（辻製本）

昭和五年一月二十五日印刷
昭和五年二月一日發行
昭和五年三月一日再版發行

定價 金貳圓五拾錢



著者 京都市上京區紫野今宮町十六 樋口功

發行者 京都市上京區丸太町通寺町東 麻田繁三

印刷者 京都市下京區佛光寺通大宮西 定池由太郎

印刷所 京都市下京區佛光寺通大宮西 天進社印刷所

發行所 京都市上京區丸太町通寺町東 振替口座大阪二三一二一番 麻田書店

大賣捌所 東京市日本橋區本銀町三丁目 大阪市西區阿波堀通四丁目 株式會社寶文館

連俳史　終

（三・四・八　おがわ・つくる）

件名索引

（附　地名索引）

書名索引

さ

し

き

く

け

こ

人名索引

（數字はページ・排列は五十音）

では物足らぬと何時もいふのは、それをいふのである。虛言でもよければ擔ぐぐらゐは何時でも擔いで見せる。

床の間に挿す一輪の春花は春の自然の象徵である。象徵はすべて藝術化を意味する。自然のまゝに象徵は無い。一片の短冊にも人間生活の一輪郭一斷面を劃くことができる。箱庭を嘲る者には日本の藝術の佳處はわからぬかも知れぬ。

文明も學術もある意味からいへば複雜豐富の壓搾であり簡化である。その壓搾簡化は、貧弱な空虛な物を材料にしても味あるものを得られぬ。はじめから單一膚淺であるものには壓搾も簡化も要りもせず無意義でもある。象徵とは一切の物を藝術的に壓搾し簡化するはたらきをいふ。その材料が複雜であり豐富である程滋味が深い。水はいくら煮詰めても酒にはならぬ。（了）

思想なり生活なりを顧るのならば可い。それをあべこべに行くから予どもには歉らぬのである。人間生活の世界は無限に擴がつてゐる。芭蕉のやうに乞食行脚の生活も生活であれば、腰辨當であはれな妻子を養ふのも生活、一杯の火酒、一皿の燒肉を張合に、煤煙と塵埃とに塗れて筋力の限りを出すのも生活、遊惰も生活、勞働も生活である。其等の生活から滲み出るものを味へば、すべて詩にならぬものはない。月夜の靜寂ばかりが涅槃の境で、赫々たる烈日の下に汗に眩む處には解脫は無いか。涅槃の境は其處では得られぬか。予どもは現に埃と汗とに塗れつゝ每日筋肉勞働とあまり異はぬ精神勞働をやりながらやう〱其の日〱を暮してゐる。芭蕉のやうな生活をしたら、忽ち明日から自分も妻子も餓死するの外無い。それでも「芭蕉の生活こそ」などと口眞似してゐられるか。特に芭蕉を種に高い原稿料や印稅をせしめて一廉な紳士顏で暮すなどは、芭蕉よりも寧ろ高利貸に多く共鳴する筈ではないか。それで芭蕉に我等のすべてが盡されてあるなどとは、どう考へたとて虛言にしかならぬ。予が芭蕉だけ

受力を遺憾無く應用し得ぬ處にはあまり手を着けなかつたといふ處がある爲である。けれども芭蕉はまだしも手を着けた方である。或者に至つては全然手を着けてゐぬ。其の手を着けなかつた處に入れば、なほ開拓すべき大なる餘地が横はつてゐる筈である。予が是迄の世の芭蕉拜趨者にあまり共鳴し得なかつた所以は、一方では我が邦の藝術の最要所を體し得た人としての芭蕉を見ずに、人格がどうだの思想がどうだの生活がどうだのと、それらと關係づけての西洋かぶれした議論ばかりなのに歉らぬのと、一方では芭蕉で何もかも一切が盡きてゐるやうに崇拜して、無暗と擡ぎ上げるやうな態度を、物足らず思ふからである。人格だの思想だの生活だのは、少しく極端にいふが、そんなものは眞の藝術境にはつまりどうでも可いものである。特に我が邦の藝術に就いて予は極言するのである。どうでも可いは多少語弊があるかも知れぬが、そんなものがすべて渾然一味の裏に鎔合融化して、毫末も痕跡を留めぬのが我が藝術の極致である。と予は確信してゐる。先づさう考へて置いて、さて立歸つて人格なり

暗んで、日本の物程好いものはなく、西洋の物は皆下らぬと、鳶か鼠の子でも拾うたやうに四邊を睥睨して得意がる者もあるが、感受性が鋭いばかりでも大きな物は産めぬ。目から鼻へ抜けるやうな怜悧さばかりでは賢人にも偉人にもなれぬと同じい。あまりに鋭い美感を有つてゐる爲に、日本人は一方に藝術の上で何ぐらゐ損をしてゐるか分らぬ。たゞ我が邦の藝術史を研究する者は、餘程鋭敏な感受性を有つて對せぬと眞の長所が分りにくいと心得て居らねばならぬことを一言して置くのである。馬鹿にしてかゝらぬ用意が肝腎だといふのである。それらをすら見取らうとせずに、たゞ無暗に日本の物こそと己惚れる者に至つては沙汰の限りで、さういふ國粹論者もあるにはあるが、それらには成るべく耳を塞いで聞かぬやうにする方が我が邦の藝術を眞に愛惜する所以であらう。

芭蕉などは此の鋭敏な感受性の持主の好代表者の一人であるが、予どもが芭蕉にすら何處かに不足を感ずるのも、此のあまりに微妙に過ぎた感受力が働く爲に、其の感

は鋭敏微妙な感受性を必須とし、隨つて象徴的傾向が强ければ强い程、深ければ深い程、感受性の强さ深さをあらはしてゐるのである。藝術的感受性の强さ深さにかけては、我が國人は世界の何國人にも寸毫も劣るものでない。例へば色彩に對する敏感などは、日本人程進んでゐるものはさう多くはあるまじく思はれる。是を反對に考へて日本人は色彩感に鈍いから洋畫のやうな感じの强い色を出し得ぬといふ者もある。けれども是は鈍いからではなくて、實はあまりに鋭過ぎるから、故意に感情を湧き立たせるやうな謂はゞ幼稚な刺激的な色を喜ばずに、澤消しされた寂びた色を喜ぶやうになつたものと見る方が庶幾い。理窟は先づどちらにでもつくとして、我が邦の美術や工藝、能樂演劇の類を仔細に注意して眺める者は、色彩に對する感受力乃至鑑賞力が如何に驚くべき程度にまで深入してゐたかに氣づくであらう。是は色彩感の一例に就いていうたに過ぎぬが、其の他の方面でも敏感にかけては如何に進んだ藝術國にも優るとも劣る所は無いやうに思はれる。といふやうな事をいふと、直に自負心に目が

連俳ゝ現代俳句の進歩に伴うて行くことは、一方しばらく廢絶して謂はゞ片輪の發達をして來た成行上、隨分至難の事とは思はれるが、俳人達の努力次第で、全く絶望するにも及ばぬかも知れぬ。是につけて、無價値論を主張した似而非文學論が如何に國詩に大なる災厄を貽したかを顧る每に、悲憤の情に禁へられぬこともある。今更ながら生半可の似而非論が眞を害するの毒を思ひ、明き盲だ賢こぶつた愚昧漢だと子規氏を痛罵する者のあるのも、國文學中の最も特色ある此の一體を愛惜する國人の眞情からは無論もないと、共に慍る心にもなる次第である。

後語

「象徵」の事は芭蕉の條で絮說したから、今更言ふまでもないことであるが、一體我が邦の藝術はすべてを通じて象徵的である處に最も著しい特色を有つてゐる。象徵に

よき名撰んだ姉妹船也
ものみなの面をおこす月の秋
　晝見た鹿の妻よばふ聲
雛にさす黄菊も都わすれにて
　眞ごゝろ見ゆる賤女の歌
さなきだに糸のほつれし戀衣
　油の焦る短檠の臭
月冴ゆる山攻落す謀
　腕をこまねく癖の醜し

城　石　之　城　石　之　城　石　之

現代のものを現代人が評するは、とかく不公平に陥り易いから、差控へて置く。たゞ其の風からいへば、天明と化政と天保とのどれでもなく、先づ是等を折衷した程度の處であらう。

たりとしてゐるものも少なからぬ。少しく極言すれば連俳は文學として價値があ
る、子規氏の說は誤つてゐた、と主張する者も、まだ、子規氏が何の爲に非文學論を
立てたか、文學としての價値の有無乃至高下の境界は何の邊に在るか、を一向考へず
に、たゞ無暗矢鱈に反動的に主張する者も可なり多いとしか見受けられぬやうな實狀
がある。かういふ狀態の下で連俳が果して靑天白日裏にまことの光輝を發揚し得るか
どうか、隨分覺束無いやうな感もされるのである。

附合は舊派の人々の間にも漸く衰へつゝあつたやうであるが、それでも熱心に試作
に力めつゝあるものも少なからぬ。左に揭ぐるものなど其の一例で、可なりに骨を折
られたものと見受けられる。

初夏や先ともし火の宵景色　露城

枇杷にいちごに珠つゞる店　他石

案内狀披くや否や筆とりて　貫之

秋待ちがほにありく朝月　機

（明治十三年、明治八十歌仙）

初表六句と初裏六句とである。大凡は炭俵風で、天保風とあまり變りはなく、蕉風連句としては先づは最も低い程度の處を狙つたものである。此の外にも其角堂機一とか、美濃風直系誰々とか、大宗匠は昔に劣らぬ程數多あつたが、俳風は愈〻沈滯に向ふのみであつた。

明治後半期に至つて、故正岡子規氏が連俳非文學論を唱へ、連句を排斥し、随つて所謂新派の人々は殆ど擧つて連句を顧みもせず、又試みもせぬといふやうになつたので、世間は漸く是に雷同し、最近迄は連句は俳壇から全然驅逐され埋葬し去られた觀があつた。近頃では又その反動とでもいふものか、子規氏を痛罵して連俳の價値を云々する者が漸く殖ゑて來たさうであるが、をかしい事には、子規氏の非文學論を謬論だ妄説だと誹謗しながら、肝腎な其の材料たる連俳を相變らず非文學的に解釋して得

る。

旅人の笠だけ白き霞かな　静和
彌生にちかく凪つゞく海　犂春
釀藏春の荷透に塗替て　永機
松の小枝を伐る差圖する　和
初月の出てゆつたりと暮かゝり　春
寢てもたまらぬ蜻蛉の羽　機
蘆の穂の中に水棹を押立て　和
茶屋のよし簀のふいと倒るゝ　春
逆さまに吸た煙管も戀なれや　機
思ふ程には思はれぬ人　和
夏もはや眞葛が原の露けくて　春

夕暮は蚊に浮世めく住居かな
桐落ちた外に事無し留守の庵　梅室
冬の夜や針失うて恐ろしき

二人とて此のやうな句ばかりでもないが、其の風を最もよく語つてゐるもの一つ二つを出して見たわけである。

二、明治以後

明治の前半期は天保時代の延長と見て可く、俳諧の最衰期である。舊派の宗匠は到る處に割據してはゐたが、舊風を墨守するのみで、新しい活動は一向になかつたやうである。但し是等の人々のものの中でも、精査したら或は優れたのも見出し得るかも知れぬが、予の是迄見たものの中では、成美乙二に追隨し得るものすら見當らなかつた。左に掲げるは其角の俳風を傳へた筈の江戸管派の宗匠老鼠堂永機一派の作例であ

美しけれど酒は手強き　蚓

とても永く讀みつゞけるに堪へぬ卑趣俗味ばかりで、是でも詩といへるかどうかと思はしめる程風韻に乏しい。但し廣い目で見れば是も亦一體で、此の卑趣俗味の底から新しいものを生み出し得るのかも知れぬ。たゞ是では困る。『炭俵』なども、他の集と並べて見れば、かうした所謂平談俗話的趣味のものもある方がおもしろいと見られぬこともないが、さういふものばかり並べられたのでは、詩情も韻致も銷殺されてしまふ。評する者は、蒼虬の方は雅言を多く用ゐ、梅室は俗語を多く用ゐてゐるなどいふが、是等は用語の上の聊かな異ひに止まり、俗臭の芬々たるはどちらも相讓らぬやうである。但し是等の俗臭必しも盡く文學の埒外に棄て去るべきでもなく、天才が世に現れたならば必ず此の瓦石を化して金玉とすることもできるであらう。たゞ此のまゝでは致し方ないと思ふのである。

ある筈の朝月見ねず梅の花　蒼虬

などの高深を味うた後に是等の低俗のものを味ふと、芭蕉のものですら厭氣がさすのに、況やその低俗を眞似て更に硬化鄙化したものであれば、迚も手のつけやうのある筈はない。

鍬の刄に菫をのせて子を連れて　梅室
山をはなれぬ花前の雲　蒼虬
かすり矢を負はせた雁も歸るらん　室
膳いざらせて明るみへ出る　虬
棟梁をひとり殘して月の客　室
藪の下まではる秋水　虬
葉雞頭散れば散る程赤く成　室
刀もさゝで同役へ行く　虬
齒の藥こぼれぬやうに物言て　室

いが、清遠幽渺の致を可なり洗錬された技巧でこなし得てゐる處は、蕉門の人々でも茲まで達してゐた人は稀であつた。

陽炎や昔戀せし道の草　成美

五月雨や西と東の本願寺

萩芒從弟のやうに枯れにけり　乙二

墟買て歸る小道や落葉時

第九章　天保以後の連句

一、天保調

天保時代は俳諧の墮落時代と謂はれ、天保調といへば月並調の代用語のやうに思はれてゐる。此の時代の代表者としては、田川鳳朗、櫻井梅室、成田蒼虬、辻嵐外、飯田篤老、田喜庵護物などが居る。其の狙つた處は『炭俵』あたりの俗趣低調で、『猿蓑』

櫻を花と手折る兒達　車
雛賣のあいそに笠を縫ひさして　二
ぬるむ清水の湧く音がする　車

○

このやうに菖蒲葺ても寒さ哉　乙二
旅のこゝろは芥子のよる藻か　布席
浦島が子の便り無き頃なれや　二
更ぬけしきに出ておはす月　席
ぬかご燒くけぶりを風のさそひ行き　二木
槿の花のとしきりもせず　席

（以上乙二七部集）

『猿蓑』などに比べれば變化自在の妙に兼ねての精深蒼潤の味の及ばぬのは是非も無

にでも對するやうな氣がされる。元祿風には何處かに沈厚蒼茂な趣があり、天明風は粗(あら)いかはりに清鮮潑剌な味があり、此の期のものは無瑕無疵ではあるが才氣煥發のおもしろ味に乏しいといふ處がある。たゞ連句の技巧の上からは、蕪村等のものは缺點が目につき過ぎて、其の發句から受ける程の佳境を味ひ得ぬのは已むを得ぬ。予一個の趣味からいへば、天明風の連句よりも寧ろ此の期のものに多く心を惹かれる。一は天明風のものがとかく才走り過ぎ氣取り過ぎてゐる處が深沈幽微な興趣を礙げるからである。

秋もはや鏡の浦をしぐれゆく　乙二
　雁をさそうてうつるむしろ帆　來車
招く間に薄は月を娠むべし　二
　扇鳴らして旅をなぐさむ　車
朝がけは特に彌彦の三足不二(みあしふじ)　二

眼を病む妹が髮をかきやり　美
語る間も別れせめ來る蚊を燒きて　二
舟さし寄せし西向の家　美
白雲の百不盡うつすさま〴〵に　二
小春の蠅をにくむ喰物　美
薙刈りて徑(こみち)つくれど人問はず　二
襟もとに聞く笠寺の磬　美
十錢の盞こぼしたる朝の月　二
風になぐるゝ秋のうぐひす　近世附合集》。　美

二人ともさすがに當時の代表的名家の事とて、句々洗錬烹熟を極め、五分の隙間も無いやうに運んである。但し是を譬へると、元祿風を徂徠あたりの漢文の味とすれば天明は山陽の物でも讀むやうな心地がし、而して此の期のものは精里栗山などのもの

である。「國々へ名も聞ゑたる廊下口」に「ぞんぶんひねた梅を植ゑけり」などに至つては、一茶の面目躍如として其の人に接するの想あらしめる。

一茶の發句も多く世に知れわたつてゐるから、例は省くこととする。

二、成美と乙二

此の期の人々中では成美乙二あたりが連句では先づ優れてゐたやうである。是等の人々はさすが復古派と謂はるゝだけに猿蓑あたりを狙うたと見ゑ、清新富麗な趣よりも、しんみりと、落ついた靜寂蒼古の趣に優れてゐるやうである。附味の幽微な處も元祿風に似てゐる。句々の練れ工合は天明の諸人よりも概してはるかに勝つてゐる。

夕かすむ那須の七騎の小宴(こざかもり)　　乙二

貧の心を詠める腰折　　成美

塊(つちくれ)に雨の色ますわすれ草　　二

桐の木に目鼻を書いて笑ひけり　茶
　いざ薬めせ鴫の夕ごゑ　嘯
蘆火たくかげに兜巾をひけらかし　同
　名を替へてより木賀にわかるゝ　美
誰やらが都の月を嫌はれて　節
　たゞ七文の花の朝顔　茶

幽嘯のもあまり優雅とはいひ難いが、一茶のは其の人と爲りの如く傍若無人で、都大路を肥料（こゑ）叩いてわめき歩くの概がある。「財布おとしていふ事も無し」に「ほか／＼と壁の穴から花の春」、「宵は更けしか黒犬を蹈む」に「臼唄の若松樣もねたましや」、「菫の奥の謎解をよぶ」に「雀にも胡葱鱠いはゝせて」、「變な處へつける雪車道」に「窓の穴猫の通ひ路吹きとぢよ」、「折々は笛鰐口の音すなり」に「辨當の菜（さい）を配る蕗の葉」、「西に東に仰ぐ君が代」「棚に在り必ず福と牡丹餅は」の類、すべて一茶の口吻丸出し

醬油かけたやうで一向調和してゐぬ。成美は粹、一茶は野暴、一は上品、一は下品で宛（まろ）で太夫と權兵衞との道行見るやうである。

散る露に月の心のうつるなり　大　節

今や栗燒け二郎三郎　一　茶

（中　略）

尺八吹に別れて後の秋の風　節

うどんの上も皆月夜なり　茶

冷々と放下の袴かしてやり　美

死ぞこなひの紙魚（しみ）さたはれて　幽　嘯

春雨でぱつぱと花の散れかしな　茶

（中　略）

國が芝居の名の通り來る　嘯

赤染が露のしるしのほの見ゐて　成美
荒くれ武士に身に任せつゝ　一茶
匂ひなき木地の小箱を打詠め　美
涼しき足しにならぬ柿の木　茶
短夜の袴を濡らす地藏講　美
欠(あく)び法度(はつと)と書いて張るなり　茶
笠ほどに湖見ゆる窓切りて　美
鼓打ち／＼よばる旅人　茶
山雀の袂をぬける月寒く　美
うき世の花の胴ぶくれかな　茶

成美は江戸倉前の札差の旦那、一茶は信濃の片田舍の土百姓親爺で、修養もちがひ趣味も異ふのだから、無理もないやうなものの、二人の附合は平目魚(ひらめ)の刺身にもろみ

た爲である。蕪村があれだけの藝術的敏感を禀けてゐながら、連句に不得手であつたのは、此の性質が幾らか不足してゐた爲で、それがまた却つて彼の獨境を完成し得た所以でもある。一茶に至つては我が邦の詩客中殆ゞ類例を絶する迄の强烈な自我の持主であつたから、連句に不得手であつたは寧ろ當然である。さういふ處がまた一茶の一茶たる所以で、無骨な氣儘な意地つ張りな處が微温的妥協の雰圍氣を打破つて我執の爪痕を深く俳壇に印し得たのでもある。所謂近代人に多くの共鳴者（？）を有ち得る所以も其處に在る。然るに連句の主味は、前句との融合應化によつて生ずるのであるから、其の融化性に乏しいものは隨つて連句の主味を無視するに傾き易い。謂はゞ連句として味ふよりも、各獨立の一句々々として味ふ方が意義があるといふ風になり易い。是も亦自から一體として見れば見られるが、それだけ連句としての特質に遠かり易いといふやうに見られるかと思ふ。根本問題としてはなほ研究すべき餘地は多いが要するに歴史的意義の上から見た連句の特質に背反し易いことだけは明白である。

風を釀成せしめた。が俳諧の方では天明中興期程の華々しい活動も無かつたやうで、此の兩期を通じて連歌に合せて假に之を繼承期と見ると、化政期の方が純然たる繼承で、天明期程の特色は無かつた。けれども亦全く人が無かつた譯ではなく、幕末期に比べれば矢張可なり才人に富んでいたやうである。雪中庵完來、鈴木道彥、松窓乙二、遠藤曰人、小林一茶、大伴大江丸、夏目成美、井上士朗、月居、素檗、等はいづれも此の期の俳客で、中にも一茶は近年になつて急に地位が高められて來たやうである。が、一茶がかく喧說されるやうになつたのは、主として其の生活と、それに密接な關係ある發句とからで、連句の方からはさして重要な地位を認め得ぬやうである。といふのは、一體連句は、自我や個性が、あまり特色があり過ぎたり、强烈に過ぎたりする人には不向きな處があつたからである。連句は其の本質の自然の要求から、他人の思想なり情感なりと融和し鎔合し得る性質を多分に具へた人程適合してゐる。芭蕉が連句に最も偉才を發揮し得たのは、其の天才に加へて此の性質を殆ど完全に具へてゐ

むら雨寒く廨かぶりぬる　士朗

君見ずや棘が中の捨小舟　紀鳳

都便の今かへり來し　入素

月暗く椽はし〳〵の上草履　曉臺

蜜柑をちぎる藍染の皿（夜のはしら）　青

曉臺門下では士朗の方が名が高いやうであるが、作の力量は岱青の方がたしかであつたやうに思はれる。是等の作には少なからぬ清新味を認めることができる。

蕪村一派及び曉臺等の發句は多く普通に知られわたつてゐるから例は特に掲げぬ。

第八章　化政時代の連句

一、一茶

寛政から文化文政頃にかけての江戸文學は、元祿期とは多少趣を異にした一種の氣

る。『桃すもゝ』が連句二卷のみを一書として出したものである處や、几董が例句として是を引いたことから想うても、餘程得意な又骨折つた力作であることが推量される。

蕪村の外には暮雨庵曉臺、南無庵闌更、春秋庵白雄、雪中庵蓼太、無爲庵樗良、などがあつて、蕪村と合せて中興の六俳客と呼ばれてゐた。是等の中で連句では闌更が最も努めてゐたやうであるが、それも蕪村の發句に追隨する程のものは無かつた。蓼太は卑俗を得意とし、白雄は上品な處はあつたが、共に才氣に於いて蕪村一派に讓る所があつた。曉臺もどちらかといへば連句よりも發句が好かつたやうで、樗良はどちらも調子が低かつた。數へ來れば天明というても蕪村一派の前にはいづれも光が薄らぐの感あるのも是非も無い。今左に曉臺のもの一例のみを擧げて一斑を示すに止めて置く。

ほとゝぎす又啼く迄の夜は永し　　　岱　青

西國の手形受取る小日の暮　董

貧しき葬の足早に行く　村

片側は野川流るゝ秋の風　董

月の夜ごろの遠き稻妻　村

「三つに疊んで」はむら雨で外に出してあつた蓆を投げ込むさまで、又雨蛙がそれに驚いて垣を飛越すやうにも聞ゑ、あまり附き過ぎておもしろくない。次はそれを忙がしい商家の日暮にしたので、是も平凡である。が、次の「貧しき葬」は繁昌の町家に貧人の葬禮を對照した手段は芭蕉のよく用ゐたものに似てゐる。次の二句は共に叙景であしらうてあり、共に天明風の長所をあらはした所謂平面的描寫の代表的好句である。

几董に『手引蔓』（俳諧文庫にも收む）と題した附合の作法を說いた書があるが、其の中の例句には右の『桃すもゝ』中の句を主として引いてゐる。注書としての參考にもな

を鎖めてしまふのを、其の時過ぎて急用の人の敲くさまである。次はそれを援ひの兵糧を運んで來たさまに急轉したので、轉じやうが唐突に過ぎて惡いが、蕉風でも他の句から軍陣の句に轉ずるなどの塲合には此の種の無理な非文學的な轉じ方も往々やつてゐる。次は戰國のさまにでもしたものらしく、兵馬倥偬の際の邊國の而も浦人なども弓箭をたしなみ、軍夫に出たりする趣であらう。女狐は其の矢にでも夫狐を獲られた女狐で、寢顔は其の狐にでも憑かれた女のさまであらう。次は前句を心病か何かで臥てゐる女にして、侍女などが男へ歌を代つて詠んでやる事にしたので、次の出船は其の歌を船路の別れにしたのである。次は蕪村などの最佳境で・つれなき出船に氣比（越前敦賀）あたりの月落ちて露暗き景致のあしらひは、其の塲を宛ら眼界に浮動せしめてゐる。次の鹿の句も前句のほの暗く淋しい景によく取合せてある。

むら雨の垣穗飛び越す雨蛙　　菫

三つに疊んで投るさむしろ　　村

二の尼の近き霞に隠れ住み　村

　七つ限りの門敲く音　董

雨のひまに救の糧や送り來ぬ　村

　弭(つのゆみ)たしむ能登の浦人　董

女狐の深き恨みを見返りて　村

　寢顔にかゝる鬢のふくだみ　董

いとをしと代りて歌を詠みぬらん　村

　出船つれなや追風(おひて)吹く秋　董

月落ちて氣比の山もと露闇き　村

　鹿の來て臥す我が草の戸に　董

是等も先づ佳い部分である。が、二の尼などは『冬の日』の「二の尼に近衞の花の盛り聞く」からでも得たものらしい。七つ限りは尼の隱れ家ゆゑ七つ（午後四時）には門

前句の西に傾くに西海に沒落しつゝある平家の末運を取合せた處は、好いとはいへぬけれども先づ惡くもなく、夕日幽かに絃音の響き來る遠致も佳い「霞む」で春季にしたのである。次の博士は前句を魔除けの鳴絃にでも取つての附らしく、惡事災難などのある時のさまであらう。此の附方はあまり好くない。次の「栗負ひし」は、前句の占ふから栗を負うた馬が倒れたと占筮の象か何かのやうに仕立てた句らしく、鳥啼いても散つた栗に啼き群がるに變兆に啼き立てる意をも有せるものらしい。次は前句の場をあしらうたまでであらう。此の巻中の

駕舁の棒組足らぬ秋の雨　村

鳶も烏もあちら向き居る　同

などは匂響の附味に近く、駕舁が棒組が足らぬので駕も舁けずに困つてポカンとしてゐる樣子に、鳶も烏も尻を向けて知らぬ顏してゐる景氣がよくかけ合はされてある。是等はさすがに蕪村の才氣の煥發した句であ　。

能登殿の絃音霞む遠方に　同
博士ひそみて時を占ふ　菫
栗負ひし馬倒れぬと鳥啼きて　村
樗咲き散る暇八町　菫
立ちあへぬ虹に淺間の打けぶり　村
勅使の御宿申すうれしさ　菫

こゝらは先づ好い部分である。「兎口の」は前句を獵人の家などに見て、殺生の報いで妻が兎唇になつたそれが因果を嘆くなどの意であらう。其の次の「鐘鑄」はよく附けてある。業果を悲しむ意から剃髮のあしらひも自然で、花の御寺と花を扱うて態とらしからぬ取入も好い。几董も自讃してゐる句である。次の「春の行方」は傳句が聊か生硬であるが（行方が抽象的である爲に態とらしく聞ゐる　附味の出し方は芭蕉に似、剃髮に西に傾くがよく映つてゐる。次の句も句振が物々し過ぎて渾融味を缺いてゐるが

卯月廿日の有明のかげ　　几董

すはぶきて翁や門を開くらん　　同

聟の選びに來つる變化（へんぐゑ）　　村

年古りし街（また）の榎斧入れて　　同

百里の陸地とまり定めず　　董

「牡丹散りて」の發句などは、其の麗潤、蕪村でもなくては到底いへぬ佳句である。脇句以下は聊か凝り過ぎ作り過ぎて、芭蕉のものを見た目では見劣りがするが、いづれも骨折つた句どもである。

餌に餓ゑる狼内に忍ぶらん　　董

兎口（いぐら）の妻のたゞ泣きに泣く　　村

鐘鑄ある花の御寺に髮切りて　　董

春の行方の西にかたぶく　　村

薄見つ萩やなからん此邊り　　蕪村

颪より起る秋の夕に　　樗良

舟たわて宿とるのみの二日月　　几董

紀行の模様一歩一變　　嵐山

貫之が娘稚き頃なれや　　良

半蔀おもく雨の降れゝば　　村

『一夜四唫』

此の卷には「矢を負ひし男鹿來て伏す霞む夜に」に蕪村の「春も奥ある月の山寺」などの佳聯も少なくないが、蕪村の作中ではあまり佳い方ではない。『明烏』『續明烏』中の連句にもなか／＼優れたのがあるが、予の是迄の記憶では『桃すもゝ』中の二卷が最も秀でゝゐるやうである。（近年潁原退藏君の『蕪村全集』が出て、廣く集めてあるが連句の部はまだ精讀してゐる暇がないので、しばらく既讀のもののみに就いていふ）

牡丹散りて打重なりぬ二三片　　蕪村

さう無造作にも行かぬものと見ね、チグハグと思はれる見方をする者も多いか　縷くいふのである。

蕪村が開いた一境は、全く新しいとは謂はれず、其の體を具へたものには、例へば蕉門の凡兆などもあるが、蕪村の大才に待たねばあの繪畫的表現の完全な成功は到底望まれなかつたにちがひない。

二、蕪　村　一　派

蕪村もどちらかといへば連句よりも發句が得手であつた。却つて蕪村門下では凝り屋の几董などが連句に長所をあらはしてゐるやうである。が、是も程度までで、芭蕉といふ連俳の巨星を前にして見れば、蕪村でも几董でも、况やそれ以下のものなどは迚も比較にはなり兼ねる程缺點が目につく。たゞ天明風の特色から見れば、亦それで新しい一境を立派に開拓し得たといへるのである。

寒く咲いてゐる清見寺よ」と、上下を直につゞけて解し得る。芭蕉のは「菊の香」と「奈良には云々」とは意味をつゞけては解し難い。だから予は、芭蕉のは平行線的描寫で蕪村のは直線的描寫だといふて兩者の特色を區別した事もある。是も大體の傾向をいふので、兩者がすべてさうなつてゐるといふのではない。が、芭蕉の發句をも連句をも直線的にばかり解さうとしても、結局茫漠として主味が何處に在るのか薩張り分らぬといふ事になるのも、是等の互の傾向をよく合點してゐぬからである。芭蕉と蕪村とでは味ひ方が異はねばならぬ。芭蕉を味うた頭で蕪村を味ふのはまだしも可いが蕪村を味ふやうな頭で芭蕉を味うても、しつくり舌に乘る筈はない。是等の事は兩者の連句にも其のまゝ應用し得るのである。一は印象的には(或は意義の上では)ぼんやりしても象徵的にははつきりし、一は象徵的には(或は餘情は)ぼんやりしても印象的にははつきりする行き方である。此れぐらゐな區別は、俳諧ならずとも、詩歌の類を鑑賞してゐるものならば誰にでも分つてゐる筈であるが、さて解釋する段になると、

とばかりも遽かにはいへぬ處もある。けれども概括して兩者の互の特色をというて見れば、先づ太體にはさういへる。是は芭蕉の連句を一讀した後に蕪村の連句を一讀して見たら、何人にでも直に感得さるゝ互の傾向である。蕪村の發句もさうである。一例を以ていふと、芭蕉の「菊の香や奈良には古き佛達」――此の句もあまり度々引くので引き饜きたが、最も解り易い例だから引く――の「菊の香」と「奈良には古き佛達」とは印象的にはつきり繋いで味ふことは不可能である。もつとも此の不可能も、無理に牽強し、客觀的に取合せて解すれば解し得られぬこともないが、鮮明的切を缺く爲に結局不得要領に了つてしまふ。どうしても「菊の香」の感じなり氣分なりを抽出して、是を奈良の古佛の感じ氣分とをひゞき合せて味はぬと、ぼんやりした捉み處の無い句になつてしまふ。蕪村にはかういふ句が殆ど無いというても可い程に少ない。例へば「白菊の一もと寒し清見寺」といふ風に、清見寺の境内に一もとの白菊を配して是を印象的に畫くことができるのが、平面的描寫の特色である。句の意味も「白菊が一もと

第七章　天明期の連句

一、元祿風と天明風と

天明のものを大凡にいへば、純蕉風期のものよりも寧ろ貞享期のものに似てゐる。が、其の特色をいへば、前句への微妙な感應といふやうな處に主味を置かずに、前句の景趣に相應はしい景趣を以てあしらふといふ處に焦點を置いてゐる。すなはち「感じ」と「感じ」とのかけ合よりも相と相との調和に重きを置いてゐる。それゆゑ、深沈幽玄の味が乏しいかはりに鮮麗明暢の趣が克つてゐる。蕉風が象徴的表現に優れたに對し、天明風は印象的表現に長じたと謂へる。印象的とは、例へば前句の景趣と附句の最趣とを平面的に並列なり對立なりさせて、是を目で觀るやうにあり／＼と印象に浮ばしめる行き方をいふ。前者は主觀的感合に重きを置き、後者は客觀的諧調に重きを置いた。但し是も大凡にいふので、元祿風が通じて前者で、天明風が總じて後者だ

山の祝ひに小柴投げやる　（誰が家）　雪

○

竹の屁を折ふし聞や五月闇　　晋子（其角）

花たちばなに一重口よぶ　　百里

表具屋の珠數さら／＼に遣得て　　朝叟

野ごゝろの時雞に嗅がるゝ　　新眞

潘（しろみづ）に染る草葉の元結杭　　嵐雪

帆をよむ橋やよく／＼の隙　（類柑文集）　堤亭

右はいづれも作年の多少曖昧のもののみであるが、最後のものは談林臭の可なり强い方（虚栗風に近い）の一である。

はら／＼と栗燒く柴の圓居(まどゐ)して　其角
　願狂はする龍骨車(りごしや)の月　來
きり／＼蟊(な)も游ぐ山水に　雪
　盞付けて鶴放ちやる（錦繡緞）　角

○

馬蹄今秋を誘はゞ誰が家　擧白
　海の嶠(きは)なく日に向ふ稻　才麿
名月を岡の水木も待とりて　嵐雪
　杖にかけ行く賤の席(しきもの)　其角
けふこゝに雪車(そり)さし習ふ北の子ら　丸
　竹の煙のわかる里村　白
麥に買ふ肴は何か朝もよひ　角

物に凝らぬ性癖と境遇とは芭蕉の一端を得たに過ぎなかつた。尾張の荷兮や浪化上人などは相當な凝り性ではあつたやうだが、芭蕉の全豹を傳へるには荷が克ち過ぎたかも知れぬ。指を屈して見ても、芭蕉の眞手段が深く腹に入つての作なり論なりを發表したと思はれるやうなのは先づ殆ど見當らぬと謂うても可い。たゞ論としては『去來抄』ぐらゐが纔に其の骨法の要所を傳へ得たに過ぎぬ。『去來抄』は木板本でも活版本でも得易い本であるし、予も既に度々引いてあまりに引き饜きてゐるから、玆では引かぬが、芭蕉の連句を解せん爲には是非精讀せねばならぬ良書である。

其角嵐雪の附合ではおもしろいものはあまり見當らぬが、さりとてもつと末派のものは更に興味が無い。其嵐のものは何時までも談林臭味が抜け切つてゐぬが、それもさすがに雄奇突兀の趣を失はぬ處、田舍宗匠輩の及ばぬものはあつた。

鵙鳴くや弓矢を捨てゝ十餘年　去來
　及はそらぬ霜の小刀　嵐雪

似寄つた俳風を固守する者は一向に門流が榮ゐず、其角の如き再び談林風にでも復つたやうな所謂洒落風だの、或は化鳥風だのいふ言語遊戯的俳諧が世間に喜ばれる傾向があつた。嵐雪も其角に似た處があつて、連俳は其角風に近かつた。其角は發句でも謎のやうな妙に拵つてはつたいりほがなものが多い。一寸讀んでは判らず、作者の說明でも聽くか餘程考へぬと、或は考へても、合點の行きにくい句が隨分にある。かうした處に主味を置くのは談林風と手段が通うてゐるわけで、談林風が凝つて來れば自然に茲に至るのである。

芭蕉には天品があつた。門下などが眞似ようと思うた所で迚も企ても及びもつかぬ處があつた。許六などは頭では判つてゐたやうであるが、手が之に伴はなかつた。去來なども髣髴と得てはゐたやうであるが、何分にも天分の足らぬのは奈何ともし難い。凡兆は大明風の先驅をなした高才であつたが、その高才の爲に累せられたものか終を全うせずに大成するに至らなかつた。丈草は天品は可なりあつたやうであるが、

年恥かしき心根の露　　万海
身の程を花笑ふべき藥喰　　鶴
五加木にまじる梢の生垣　　子

發句も西鶴のは「蓮の實を袖に疑ふ霰哉」「夜の錦うき世は書の螢哉」といふ風で、連句の句調も談林味を帶び、なほ純蕉風とは隔りはあるが、貞享期以前の談林風とは意味も風姿も異うて、沈實靜穩に趨いて來てゐる。

二、芭蕉歿後の蕉風

俳諧は芭蕉歿後は蕉門の各派が互に地方々々に割據して、我こそは芭蕉の血脈を得てゐる、我こそは蕉風の眞髓を得てゐると稱し、相凌ぎ相爭ひ、次第に混亂の狀態に歸して行つた。而して芭蕉の俤を多少なりとも傳へてゐるやうな者は却つて無勢力でおらぬ末徒が跋扈跳梁するといふ有樣になつた。去來凡兆丈草などの幾分でも芭蕉に

物毎に勘忍始末戀止めて　賀子
弘誓の舟に乗るからは皆　西鶴
白銀の金(こがね)の鯛も醜(なまぐさ)し　同
礁にさむる夢の本意無し　子
忍び道夜るの芭蕉におどされて　同
月を妬める後の母親　鶴
追訴訟身の程知らぬ秋の蟬　同
堂こぼたれて山のさびしき　子
更に今水尖(するど)なる筏川　賀子
小宮を二度に見たる稻妻　西鶴
忍びつゝ月の闇きに顏撫でゝ　轍士

行の卷などは何時の作か分らぬが其角嵐雪言水我黑等いづれも談林臭を多分に混へてゐる。其角は終生談林的奇溢の拔け切らなかつた人であるが、此の卷などは割合に穩かに行つてゐるのは、相手が相手であつたからあまり自我流を出さなかつた爲でもあらう。

井原西鶴のやうな世態人情に精通した文學者が、何時迄も言語遊戲的俳諧に沒頭してゐる筈がない。浮世草子を次から次へと出すに隨ひ、次第に俳諧には遠ざかつたやうであるが、全く俳諧を捨てたわけでもなかつた。而して矢張新興の蕉風その他の正風俳諧に共鳴した處があつたと見ね元祿に入つてからの或るものなどは「大矢數」時代のものと全然面目を異にしてゐる。他にも此の種の正風體のものはまだ精査したら出て來るかも知れぬ、下に掲げる卷などは談林俳人として又元祿文學の代表者としての西鶴の遺作として特に注意すべきである。是は紅葉庵賀子撰の『蓮實』(元祿四年)に出てゐる卷で、同書には芭蕉をはじめ蕉門の發句をも收めてある。

「涼川餘處は瀑の曰ふせて」に「乘せて筏に犬盜み行く」、「幕打たで石碑は花の春淋し」に「蛙ののぼる馬子の捨笠」、「世間は母さへ尼になり果てし」に「賣りける牛の我を見知らず」の如き、芭蕉風と其角風との中間程度ぐらゐな味はある。「乘せて」は爲事休んで納涼にでも出てゐる體ゆゑ筏に犬を盜み行くと川を直に出したらしい處、其の場に卽し過ぎてゐる。「蛙の」は前句は花見の附近に墓石など見ゐる體らしく、是に捨笠に蛙などの上る狀は石碑の邊や「淋し」には適はしいが花の春には趣が足らぬやうである。「馬子」もあまり働いてゐぬかと思ふ。「賣りける」は零落などして母さへ尼になつた趣に、牛を賣つた事と、その牛が主人の姿の變りやうの甚だしさに見知らぬ意とを首尾したものらしく、精緊な骨を折つた句であらうが、是も其の人に聊かもたれ過ぎた嫌ひがある。けれども總じて句移りが所謂姿先情後の手段（客觀的景致を主にし主觀的情感を從にする附合の一要訣）に協うてゐる處、芭蕉の眞手段には遠いが、蕉風の平面描寫的一面をよく會得した爲であらう。『のぼり鶴』に出てゐる東山與

園水で、浮世草子でも名の著れた人であるが、此の集に出る句などは、多少の古風臭は留めてゐるものの、（巻頭の西鵬との兩吟などはまだ談林臭い）談林風とは餘程の隔りがある。言水に至つては「野遊びや立つて腰打つ春の暮、虹に雲雀の入かゝる聲（脇句）言水」といふ風に芭蕉を學んだとしか思はれぬ句が異彩を放つてゐる。

時雨聽く顏は替らぬ心哉　（以下新三百韻）　其角
　一葉とゞめよ峰の十月　如琴
大川に落るか鴨の連立て　如泉
　朝々なりては市のせはしき　我黒
日をふくむ根芋に夏を忘れたり　信徳
　桂さへぎる影の蚊柱　湖春
幾夜るを脱がぬ鎧に面瘦せて　言水
　誰か錺（かざり）に折らむ枝松　仙庵

二阪三阪嶺幽かなり　信徳

帆を洩れて海よりあがる月の形(なり)　團水

汐間(しほあひ)高く鱸(すゞき)釣れざる　執筆

是等を蕉門の撰集中に混じても他門のものとは見分けがつくまい。

年々の花は芳野を名所にて　淵瀬

春邊を背負ふ乞食の母　言水

衣更着(きさらぎ)や炭買ふ霙(みぞれ)淡雪に　信徳

移りて木香の新らしき家　我黒

明あすか　死なん軍に涙なき姿　水

根を刈られたる提斯木が果　團

なき姿は泣き姿で、提斯木はさゝへ木などか。討死の後に殘されたものを立樹の支(さゝへ)木(ぎ)がその立樹の根を刈られた意で承けたのでもあるか。團水は西鶴門で談林派の北條

である。かくて元祿に入るに隨ひ、蕉風に近づくものが次第に多くなつて來た。蕉風の感化でさうなつたものと考へるべきか、或は俳諧そのものの機運が自然に其處へ落ついて行つたものと取るべきかは問題であるが、蕉風の多少の影響は認めぬわけには行くまい。例へば松江重賴（維舟、貞德門）の門下であつた池西言水の如きは、『江戸新道』『江戸八百韻』『江戸辨慶』（共に延寶中）などでは純然たる談林化された古風であつたが、元祿三年の『俳諧團袋』を見ると、殆ど蕉風末徒と區別がつき兼ねる程古風臭を脫してゐる。其角編の『新三百韻』（元祿三年）は古風蕉風の人々の大一座であるが、是も蕉風に近いものである。もつとも一座中の信德我黑などは芭蕉と交りも深く、蕉風化された人々で、湖春なども父の關係から芭蕉には始終接近してゐた人ではある。

蕣は蒔かぬ翁ぞ初櫻　　言水

醒めて又酌む春雨の酒　　淵瀨

此年の彌生を緩く袷着て　　我黑

なつてしまふ。先づ能樂あたりの處で見當をつけねばならぬ。

第六章　蕉風の影響

一、古風の蕉風化

其角編の『初懷紙』（鶴の歩みトモ）といふ百韻は貞享三年春に成つたのであるが、其の時は蕉風の初聲と謂はるゝ『冬の日』（貞享元年冬）から滿一年餘の後である。此の百韻は『冬の日』に比べると多少圓熟はしてゐるが、なほ幾分かの險奇味を貽し高華瑰麗な趣を主としたあたり、『冬の日』に最も酷似してゐる。『冬の日』が當時の蕉門及び他門をも驚異せしめたことはいろ〳〵徵すべき材料もあるが、とにかく『初懷紙』は江戸の蕉門及び門友ともいふべき人々が、『冬の日』に傾倒するの餘、芭蕉の提撕の下に此の風で卷いたものと想はれる。作者中の不卜杉風楊水などは他門の出で（楊水は確かでないが）漸々蕉風に化せられた人々で、中にも不卜は石田未得門出の當時の大家

の何だのと古いものを引出して無しやうに難かしく說立てる者などもあるが、そんな難かしい語でも事新しい語でも何でもない。『世阿彌十六部集』の類などにはよく使つてある。一體「寂」だの「しをり」だの「細味」だの「位」だのいふ芭蕉の用語は、多分當時最も普く行はれてゐた能樂や謠曲では、何人にも常用されてゐるありふれた語を其のまゝ假り用ゐたのでないかと思ふ。「はしり」などもさうであらう。「俤」なども普通に使はれた常語である。「寂」や「位」や「しをり」は今でも謠曲などには常用されてゐる。とにかく、「にほひ」や「ひゞき」は別段變つたことでも無暗に難かしいことでもなく、謂はゞ平凡にして何の他奇もない判り切つた語なのである。鋭敏微妙な感受性に於いては世界の何國にも劣らぬ我が國人、特にあの程度迄深入した書道や茶道や能樂を既に中世時代に有つてゐた我が國人には、象徵などいふ語こそ無けれ、實は「にほひ」や「ひゞき」ぐらゐは尋常茶飯で無ければならなかつた筈である。が、又古いが好いとて源語などに持つて行くと芭蕉の連句の手段などには籍りさゑもない空漠な語に

度々辨明した事であるか、なほ一言すれば、意義の附方が洗錬されゝば自然に匂附になるので、例へば「彼は若い」といふのが「彼は青い」となるのと全く同じい。（此の場合青いは若いの象徴である）たゞそれを高度な藝術に練成する爲には芭蕉の如き微妙な感受力と豊富な創造力との持主を待たねば不可能だといふだけである。なほ一々作例を擧げて說明したいのであるが、あまり頁が殖ゑても困るので、略して置く。芭蕉の各期の俳風の變遷に就いては前にもいうた通り『芭蕉研究』に、蕉風各期の連句に就いては『芭蕉の連句』を一讀されたい。

なほ一言して置きたい事は「匂」だの「響」だのといふ用語に就いてゞある。今是を詳說してゐる暇は無いが、先づ何よりも「にほひ」「ひゞき」「うつり」などの語が互に共通した或る意味は有つてゐる處に着目されたい。それを合點しさへすれば、「にほひ」はどうで、「ひゞき」はかうだ、などと累らはしく解剖立する必要はあるまい。是等の語の說明も一通りは『芭蕉の連句』にしてある。なほ又「にほひ」などいふ語を源語だ

念的な解し方で、間一髪の差ではあるが、重要な差であることを合點せねばならぬ。とにかくに、前述の心理的にいへば、前句の觀念に伴うて起る情緒を媒介として附句の觀念を喚び起すのが「匂附」の眞手段である。それゆゑ前句と附句との間には知的の聯絡を要せぬ。但し知的聯絡が加はる場合も無論多いことは前にも一言した通りである。情緒の媒介のみに依つたものと、知的要素の加はつたものとを峻別するといふやうなことは、不必要でもあり不可能でもあるが、所謂「匂」の高度なもの程知的要素が稀薄であるは言ふ迄もない。而して本末輕重からいへば、匂附では情緒的聯絡が本で重く、知的聯絡は末で輕いことゝ是亦言ふを須たぬ。

芭蕉の「匂附」を誤解してゐるものに二樣ある。一は「匂」を概念的な幽かな繋りの事だとし、純蕉風を解するにも宗祇時代の連歌でも解するやうな要領でするもので、二は匂附とは從來の附方とは殆ど縁もゆかりも無い芭蕉新發見の特殊な附方だと考へるものである。前者は既に反復絮説した所で明かになつたらうと思ふ。後者も予は既に

可い。かゝ斗の心理作用を最も洗錬され陶冶され烹熟され醇化された形で　極度に高級な程度に應用しようとしたのが卽ち象徴主義であらう。それゆゑ此の意味での象徴も亦聯想の一種であると謂うて可い。たゞ複雜であり高等であるといふに過ぎぬ。

予は故上田敏先生から、極めて簡單ではあつたが、象徴主義の說明を聽いた時、予が芭蕉の連句の附け方に對して描いてゐた考と全く一致してゐる處があつたので　それ以來芭蕉の連句（發句も似てゐるが特に連句には適切）を象徴的表現とか描寫とか呼び慣らして來た。芭蕉の、匂、響、うつり等いふ附方(つけかた)は、極めて簡單にいへば、前句―（感じ）―附句、で、前に擧げた例でいふと、厚蒲團―（温かく快い感じ）―父母の恩愛、となるので、前句に厚蒲團が出れば、附句に父母の恩愛を附けるのが、卽ち「匂附」で、此の場合、父母の恩愛は卽ち温かく快い感じの象徴である。是を前句に反つていへば、厚蒲團を温かい感じの象徴と見て、此の感じに最も切當な父母の恩愛を附けたともいへる。此の場合、親が厚蒲團を着せて吳れたといふ風に解するのが卽ち概

する場合もあるけれども、又情意的系統に屬する情緒（emotion の譯に此の語を使ふやうであるが、こゝでは單純な mood でも passion でも高等な sentiment でも、すべてを籠めて假にいふ）を媒介としても聯合する。例へば、雪、白、綿、のやうなのは前者であるが、雪、冷かに潔い感じ、童貞、といふやうなのは後者に屬する。どんな單純な觀念にも多少の情緒乃至氣分を伴ふのが通例であるが、それが弱く伴ふ場合と強く伴ふ場合とある。強く伴ふ場合には、觀念と觀念とが直接に聯合せずに、觀念―情緒―觀念、と聯合する場合も多い。例へば、厚蒲團―温かく快い感じ―父母の恩愛といふ風に聯合する。是等は自然に起る意識作用で、心理學の初歩の講義などでも予は嘗て聽いて覺束無いながら略ぼ記憶してゐる。が、心理學までもなく、白梅、といへば白梅に對する一種の氣分――心持が伴ひ起つて、その氣分――心持から、高潔な隱者を想ふとか、無垢な處女を浮べるとかは、人々の常に經驗しつゝある所である。

凡そ藝術的作品特に文學的作品には此の心理作用を伴はぬものは絶無であると謂うて

句附を解するに假に「其の人」「其の時」「其の場」を定めて想ひ浮べても可い。予が始終いふのは、前述の意味からである。けれども「其の人」「其の時」「其の場」といふやうなことだけでは句附にはならぬといふのも其處である。

秋より後の朝顏の色

例ならぬ身はすさまじき亂れ髮

前句と附句とは意義の上では何の關係も無い。前句は附句の象徵であり、附句は前句の象徵である處に二句が影の形に伴ふごとく相映じてゐるのである。附句は「前句の朝顏にあらず、その心にこたへたる所、にほひてや謂はむ」とは此の意に外ならぬ。

觀念聯合（Association of Idea）略して聯想、は意識作用の一の主要な部分で、すべての知識、卽ち謂はゞ複合觀念、は聯想から成立すると見た所謂聯想學派といふもの も古い心理學派にはあつたといふ程に、心理現象には重大な役目をつとめてゐる。此の觀念は知的系統に屬するものであるが、觀念の聯合には單純に觀念と觀念とが聯合

矢張人の死を哀しむとか、遠く去つた人を追慕するとかいふ意味合を附けるのが「情を引く」もので、卽ち反復である。それを樹木が倒れたと附ければ、前句の情趣に響き合ひ、かけ合ふが、反復でも繰返しでもない。是が象徴であり、匂ひである。されば事象を事象で承ける處が「其の場」「其の時」「其の人」ともなるので、例へば戀人の死を聞いた「人」が樹木の倒れたのを見た（假にさう解しても可いのである）とすれば「其の人」となり、戀人が死んだ、其の時に樹木が倒れた、又は死を聞いた時に樹木が倒れた（さう解しても間違にはならぬ）とすれば「其の時」となり、戀人の死んだあたり、又はそれを聞いたあたりで樹木が倒れた、（是もさう解して一向差支ない）とすれば、「其の場」となる。けれども肝腎なのは、戀人の死と樹木の倒れたことが共通な、否共通ぐらゐでは生温い、强度に或は極度に共鳴するある情調が無ければならぬことである。それが無ければ象徴でも匂でもない。「前句をつきはなして附くべし」とは卽ち戀人の死に樹木の倒れたことを附ける類をいふのでなければならぬ。それゆゑ

だといふのである。舊風の如く語辭や意義の聯絡から解して可いやうなものならば、何で、附物、心の附、さて、匂、響、うつり、位、などゝ態々芭蕉が門下に訓へる必要があらうか。

ある一派（例へば支考及び其の流を引いた曲齋の如き）が芭蕉の連句を姿先情後の意味から、姿（卽ち事象）の關係に重きを置いて、情（卽ち餘韻、情調）を輕んずるやうな解し方をし、自らの作風もさういふ風にしてゐたのは、『去來抄』に「蕉門の附句は前句の情を引き來るを嫌ふ。たゞ前句は是如何なる場、如何なる人と其事其位をよく見定め、前句をつきはなして附くべし。」などいうてゐる意を誤解したに本くものと思はれる。もつとも是は去來の語であるから、去來一個の意見であるかも知れぬが、此の語を芭蕉の作風と照合して解すれば、「情を引き來るを嫌ふ」とは、前句と同じやうな情趣を繰返すことをいうたものでなければならぬ。情趣の響き合ひと情趣の繰返しとは相似て全く異なるものである。前掲の例でいへば、「戀人の死」といふ前句に對して

ふ意味の句を附ければそのまゝ「匂」「響」の附合になるのである。芭蕉の蕉風盛期のものは此の附け方が中核を成してゐる。然るにそれを解釋する者が、例へば戀人の死んだ事と樹木の倒れた事との關係を、何か故事でもあるのだらうとか、沙羅雙樹の意味から無常を喩へたものだとか、棺材を搜して歩いてゐた處へ恰も良木を得た意味だとか、いふ風に兩者の事象の上に無理でも無體でも因緣をつけようとする。かういふ解釋は、恰も象徵派の詩句を浪漫派や自然派の意味で說かうとするやうなものであるから、予は是を「古風の頭」で解するものとして排斥し來つた所以であることは前にも一言した通りである。

されはとて、芭蕉の句は一句々々すべて「匂」「響」ばかりで附けて意義で附けたのは皆無だといふわけでないことは言ふ迄もない。特に晩年のものには此の表現法を緩めたのが多い。けれども「匂」「響」が蕉風の眞諦で、特に盛期のものは此の味が强く、晩年のものでもそれが多いから、それを根本義として頭に入れて置いて解くべき

形が卽ち內容である。（下略）

所謂「匂」「響」等と、頽廢せる耽美と、尖銳なる官能との溷流中に醞釀された象徵派の表現とは、日本の德川中期と歐州最近との事ゆゑ、一樣にいふことのできぬは言はでものことであるが、藝術的效果の狙ひ處は全く同じかつたのである。すなはち事象そのものよりも事象の奧に潛んでゐる所謂情調乃至氣分に重きを置き、その情調氣分に感應して是に共鳴する附句を出すといふのが「匂」であり「響」である。「匂」だの「響」だの「象徵」だのといふと何か一種特別なもののやうに考へてゐる者もあるが、實は「意義」「內容」の洗錬され醇化された表現法に過ぎぬ。意義內容を表現せん爲には此の方法が更に適切で、有力な藝術的效果を伴うてゐるので、表現法が進めば自然にこゝに來るべき筈である。

それで前揭の例へでいへば、前句に、遠く離れた戀人が不意に死んだとあるのに對し、附句で、曇天の夕暮を獨り步いてゐると森の奧なる樹木が風無きに倒れた、とい

假に例を取つて言ふと、遠く離れてゐた戀人が不意に死むだとする。此題目を取つて、深い悲哀の情を歌ふものは浪漫派である。渠等は動もすれば其感情を誇張して或は之によつて自分の思想を歌はうとする。また此戀人の死むだ前後の事情、この報知をうけた時の模樣など、すべて外部の客觀的現象を細大洩さず、有の儘に精寫するものは自然派である。然るに象徵派の詩人となると、恁ういふ際の情調を再現せんがために、戀人の死とは全く何の關係もない沒交渉な他の事象を寫して、之によつて讀者にも同一若くは類似の情調を起させようとする。たとへば空の曇つた或る日の夕ぐれ、寂しい道を獨り步るいてゐた時、森の遠い奥の方で、風もないのに樹木の折れる音を耳にした。唯だ之だけの事を敍して戀人の死を聞いた其折の情調と相似たものを讀者に暗示しようとすれば、恁ういふのが卽ち象徵派の技巧である。かの舊文藝で云つた象徵の樣（單純な符牒なやうなものは勿論、譬喩や譬喩談の類は皆それである）に、內容と外形といふ二つの factors があるではなくて、外

川白村氏の『近代文學十講』の象徴主義の條を彼是引いて説明の材料にした。是は、かういふものを借りて話す方が合點し易いであらうと思うたからで、芭蕉の象徴的表現と歐州近代の象徴派の藝術とは同意味だといふ考へからではないことは呉々もことわつておく。

輓近に至つて、作家が自己主觀の內面を省察するに及むで、はじめて情調若くは氣分といふものが文藝の中心たるに至つたのだ。唯だ客觀の事實を描いたゞけでのものは、それは、documentであつて藝術品ではない。(中略)事象が喚起する感情の更にその源まで溯り、感覺から來た瞬時の情調を表現し得てこそ眞の文藝であると考へらるゝに至つた。客觀の事象は、單に此情調を傳へむが爲めの媒介として用ゐられるに過ぎないのが、此派文藝の特色である。

此情調を再現せんために用ゐらるゝ手段、言ひ換へれば技巧が、卽ち象徴である。

(中略)

釋はして見るが、さて牽强傳會もどうにかかうにか押通ると同時に、匂も響も跡形無く消ゑ去つてしまふといふのが此の種の解釋である。今一例を擧げて見る。

今日は妹の眉かきに行き

綾一重居湯に滋賀の花漉きて　（冬の日）

は、附句は其の妹のさまとしても、かきに行く姉のさまとしても、又さういふ姉妹の居る殿中のさまゝしても、そんな事はどうでも可いので、要は前句の美妃の新粧に附句の華奢濃麗な浴塲のさまが映りあうてゐる處を味ふに在る。是を轉倒して、いや其の妹だ、姉だ、召使だなどゝ穿鑿立てをするのは、無用でもあり、又却つて二句の關係を槪念化することによつて妙所を殺してしまふことにもなるのである。

三、「象徵」の意義と「匂附」

嘗て京大國文學會で連俳に就いて話をした折、芭蕉の「匂附」を解り易く語る爲に厨

としてゐても、情緒的には（又象徴的には）手強くたしかであるのが此の附方の骨法である。然るに例へば、是は織田信長の出陣のさまで、かはらけを砕くのは門出の古儀で、いか物作りの太刀よりも細太刀の反りあるを佩く處に信長の氣高い又鋭い氣象をあらはしてゐる、とか、或は又、是は豐臣秀頼が寵妾を成敗するさまを寫したもので太閤記にこんな條があるのあんな段があるのと、二句を飽迄も概念的知的に結び附けぬでは承知のできぬやうな解し方をするのを予は「古風の頭」と呼んで排斥し來つたのである。かやうな知的の方面は「假に是々のやうな場面を想ひ浮べたら趣がはつきりしよう」といふやうな意味でたゞ參考までにけ附加へるべき性質のもので、「句附」の眞面目とは、全く無關係でない場合もあるが、つまりは第二義的のもので、そんな事はどうでも可いのである。然るに此のどうでも可い方に無暗に力瘤を入れて肝腎な要處に眼を着けぬのが昔から今までの大部分の解釋であつた。無理でも無體でも知的關係を飽迄辿らぬでは句と句との聯絡がつかぬといふので、何とかかとか故事つけて解

で（芭蕉の連句集では二句が先後してゐる。反る方は反り方とあるが善い）榑縁（くれゑん）板縁や簀縁（すのこ）に對し、丸太を並べた縁をいふ）に銀の杯を投げつけて碎いたといふ前句であるが、附句は如何にも精妙に其の氣合を奪うて附けてある。反りある細太刀に更に反りを打たせて疳癖むら〳〵と青筋を張らせてゐる趣が目に覩るやうに活躍してゐる。二句の聯絡を解するにはたゞそれだけで足るので、すなはち二句のひゞき合（あひ）の工合を看取すればそれで可いのである。さてそれからなほ想像を立入らせて、ある氣短かな殿樣が、小姓か嬖姫か何かの酌のしやうでも惡いとか無禮であつたとかいふのであはや御手討、緣先に直れ、などいふ處だと假に解して見るのは必ずしも差支は無い差支は無いが、是は概念的聯合即ち知的の聯絡に當るので、つまりそんな事はどうでも可（よ）いのである。急所は二句の氣合（あひ）のかけ合うてゐる處に在るので、前述の「反りある細太刀に」云々といふたやうな狀貌を髣髴と想ひ浮べて「感じ」のピンと響き合うてゐる處を強く味ふのが「句附」の眞諦である。すなはち概念的には（又印象的にも）茫漠

名もおもしろや、とあらば、鳥も囀るけしきなりけり、とも作るべきを」というてゐる。予は此の例をも是迄度々引いて引き饜きてゐるが、古人の言でも引證せぬとなか／＼承服せぬ者も多いから、こゝでも引いて見る。「赤人の名は繼がれけり初霞」といへば、何なく初霞の麗らかにのどかな陽氣に催されて歌ひ出しでもしたいやうな氣分に誘はれる。それにかけ合はすには「鳥も囀る合點なるべし」と來ねばならぬ「名もおもしろや」は靜かに落ついて眺め味はふやうな心持である。それに應ずるには「囀るけしきなりけり」といはではかなはぬ。是れ卽ち去來の「わづかに句作のあやにして、のるとのらぬとの境」（去來抄）で、「匂」「ひゞき」「うつり」などいづれも是をいふに外ならぬ。「のる」とは今も俗語にもいふ「似合ふ」とか「對照が好い」とかいふことで「うつり」も今いふ「うつりが好い」などの「うつり」である。今一つ同書に擧げた例は

　　樽縁（くれえん）に銀かはらけを打くだき

　　　身細き太刀の反る方を見よ

に應じ季をも合せたもの）との一句の意義とを聯絡させてゐる。意義の聯絡といふたところで、情緒情調の聯絡に全く無關係かといへば、さうはいへぬが、ゝにかく句と句とは主として知的に結びついてゐるのである。それゆゑ二句の關係は意義の上から明白に了解（知的に）することができる。而して前句の氣分と附句の氣分とが必ずしもひゞき合はなくとも、二句は確實に聯絡し得るのである。ところが、「匂附（にほひづけ）」（と予は假に呼んでゐる）は氣分と氣分とのかけ合（あひ）を主とするのであるから、意義と意義との聯絡卽ち知的關係は全く無からうが、朦朧としてゐようが、そんな事には頓着は要（い）らぬので、『去來抄』に所謂「打てばひゞくが如し」とは卽ちそれをいふのである。同書に擧げた一例を借りていうて見る。

赤人の名はつがれけり初霞　　史　邦

鳥も囀る合點なるべし　　去　來

を芭蕉は「うつり」といひ「匂ひ」といひ「ひ中分が無いと讃（ほ）め、去來は「此句もし赤人の

をあしらうたのである（萩　脛とをかけてある）が、二句全體の聯絡はたゞ辭尻と辭尻とのかけ合に過ぎぬ。それゆゑ予は是を辭附とも物附とも呼んでゐる。次の「心の附」は前者よりも一段進んだもので、「心」とは、昔の人のよく言うた「といふこゝろは」などの「こゝろ」で、意義をいふに外ならぬ。是は略ば明白で、他に考へやうの無い穩當な解釋であらうと思ふ。それで予は是を意附と呼び、意義と意義とを聯絡させる附け方を指すといふ風に說明してゐる。すなはち前句と附句とは意義の上で直につながつてゐるのを指すのである。芭蕉の出る迄の俳諧の附合の附方は大抵是か又は是と辭附とを混用したものかである。例へば「何のぞうやら白川夜舟」に「飮べ醉うた花見返りの物語」などは多分意義だけの附で、「春や昔の昨日の空」に「少年のもとの身にして目は霞」（共に宗因の附句）は「春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして」を蹈へ、前句の辭尻を捉へてゐる上に、昨日の春の空も昔になつたとの一句の意義と、少年の身ながら目が霞んで春の景色も見ゑぬ（霞に春の霞にもかけて前句の空

う。

予は連句の附方を大別して三種としてゐる。すなはち辭附（又は物附）意附、匂附の三である。是は芭蕉の語として「去來抄」に出てゐる「先師（芭蕉）曰く、發句は昔より樣々變り侍れど、附句は三變にとゞまれり。昔は附物を専らとす。中頃は心の附を専らとす。今は、移り、響き、にほひ、位を以て附くるをよしとす。」とあるに本いたので、是を予は大體にかう解釋してゐる。附物とは、同書に「先師曰く、附物にて附くる事、當時(今時)好まずと雖も、附物にて附け難からむをさつぱりと附物にて附けたらむは又手柄なるべし」などあるだけで、どういふのを指したのか明白でないが、梅に鶯とか竹に雀とか、吉野に櫻とかのきまり切つた附き物や、同類又は相似の物などを附けることをいうたのかと思はれる。さうとすると前句の辭尻を捉へて附けるのと略ば相伴うてゐる附け方で例へば宗鑑の「姑の爲の若菜なりけり」に「澤水につかりて洗ふ娵がはぎ」のやうなのがそれである。姑に娵、若菜に娵が萩（娵菜の一名）

が判る。前者は既に引いた信徳の『七百五十韻』に學んだものであるから、大抵推量さられるであらう。是等の各期のものを一々紹介することは、此の小冊子では不可能ゆゑ『芭蕉研究』に讓ることとし、なほ又『芭蕉の連句』をも參考して貰ふこととして直に蕉風期の附合に入ることにする。

二、句附の性質

予は十餘年來、芭蕉の附合の眞諦は「匂」「響」「映」等にありとし、是等の附方を假に「匂附」と呼び、「匂附」は象徴的表現法を連句に用ゐたもので、蕉風の俳句も亦是と要諦の相通じたものであるとの意を、著書に雜誌に講演に既に何回となく反復辯明した。同じ事を何時も繰返してばかりゐるので實はもう言ひ饜きてはゐるが、予の辯明する意味が、まだ同好者間に十分に徹底してゐぬとも思はれ、且本書も順序として是を說かねば備はらぬといふ點もあるので、やゝ詳しくこゝにも是を繰返して見よ

類は、予から見た所を極めて率直にいへば、芭蕉の眞諦には殆ど觸れてもゐず、又あゝいふ解釋は芭蕉の連俳の眞面目を了解する爲には、却つて累をこそ爲せ、助けにはなりはすまいと氣支はれるのである。なほ一々の句に就いての卑見は一昨年頃に出した『芭蕉の連句』に陳べてあり、それには芭蕉の連句の特異な點や、芭蕉のみが達し得たと思はるゝ境地や、世間にありふれた解釋の首肯し難い點やを反復縷說してあるから、細かい點はそれに讓ることとする。

芭蕉の作物を年代から大別して、貞風期（寛文時代）談林風期（延寶時代）過渡期（天和時代）蕉風初期（貞享時代）蕉風成期（元祿時代）といふぐらゐに分けて見るが便利である。貞風時代の連句は斷片が纔に傳はつてゐるに過ぎぬ。談林風期のものは數卷傳はつてゐて『一葉集』や芭蕉の全集類には大抵載せてあるから、容易く見ることができる。一部分は前にも引いた。過渡期のものは『次韻』及び『虛栗』が好代表集で、其の他にもあるが先づ後者ぐらゐを一讀すれば當時の談林風とさ大分趣を異にしてゐる處

第五章　純蕉風の意義

一、芭蕉と連俳

芭蕉は連俳では空前絶後の異才であつた。予が連俳をおもしろく感じたのは芭蕉の連俳に嘆服したからで、俳諧に興味を有つやうになつたのも實は芭蕉に傾倒したからである。その芭蕉が最初に予の心を惹きつけたのは發句よりも寧ろ連俳の方で『冬の日』などを耽讀したのは既に二十餘年前になる。それ以來予は何とかして子規氏などによつて掃溜に棄てられかけてゐる芭蕉の連俳の眞價のたとひ片影なりとも世に彰したいものと、極めて微力ながら折にふれては努め來つた。數年前に出した『芭蕉研究』も主として其の目的で書いたのである。最近だん〳〵連俳乃至芭蕉の連俳も世間に認められて來たやうで、解釋したり評論したりする者も漸く多くなつて行きつゝあるが芭蕉の連俳の眞研究は實はまだ是れからであると思ふ。例へば某博士の『冬の日抄』の

是が談林風に對して新風と見られたその所謂新味は、輕味に對して多少の重味、甘味に對して多少の澁味を加へた處であらう。全卷を見渡した處では、常の談林風のものに比べて險奇硬晦の味が可なりたしかに添へられてある。後の『虛栗』風の佶屈苦澁な一風は多分こゝらから萠したのであらう。「腎藥たるゝ蜑の酒壚」に「思ひ内にあれば顏へ吹出る難波風」とか、「二十に足らぬ行年の春」に「逆(さかしま)に殘る鶯悲しやのふ」とかの奇調や、「晉の文公書棚尋ぬる」に「錬藥(ねりやく)や浩然の氣がつきたとて」とか、「もとこゝに龍雲山の嶺颪」に「長篇殘つて鹿韻をふむ」とかの支那張のものは『虛栗』風に至つて盛に用ゐられたものであるが、此の卷々にも少からぬ傾向を認め得る。此の重味澁味とでもいふやうな新味が輕口の駄洒落ばかりに飽きた人々を喜ばせたものと見える。岡西惟中などは所謂一口には讀み切れぬやうな句とも語とも分らぬ奇調を盛に詠んだが、是等も談林風の行き詰りの自然の結果と見て可からう。

ゐるので、參考の爲に其の一部分を引いて見る。

曰「至詞不飾、至實不華、達士賢而少、我友はおほくして、しかもあほうども

なりといふもさのごとし。

第一

江戸櫻志賀の都は荒れにけり　信徳

東叡山の麓なる春　如風

孔子堂朝だつて　春澄

麻餅供へ雲かをるらし　政定

一重は鮑蒲鉾などの月　仙庵

おつぎの間へも氣をつけて秋　常之

篠薄よしなきあほうすゝむるや　正長

歸らぬ露の役者惜しする　如泉

宗因も初めは「新春の御慶は古き辭哉」の類の貞風であつたが、後には「秋は此法師姿の夕哉」(西行像讃)の如き深沈な句もあつた。けれども其の本色は奇語奇調にあつたので、それらの句數句を例によつて引いて置く。

書初や七十歳筆攝州住

やあしばらく夕邊のかね澤釣鰹

雁啼いて菊屋のあるじわたり候か　(池田村にて)

暇申し歸る山々しぐれ哉　(岩城を出て)

四、當時の新傾向

伊藤信德(貞德及び高瀬梅盛等に從學す、元祿十一年歿す、年六十六)の延寶八年の『七百五十韻』は、芭蕉桃青の『次韻』を促したといふので喧ましいものである。桃青の俳風は、此の次韻で談林風に歉らずに新傾向に目ざめかけたやうに古くから謂はれて

相應の御用もあらば池の邊　章
海老雜魚混り折節は鮒　德
醬油のあとは湯水に月澄みて　靑
更けてしば〳〵小便の露　章
聞耳や餘處に怪しき荻の聲　德
難波の蘆は伊勢のよもー（延寶五年冬）　靑

此の部の說明は『芭蕉研究』などにも略記しくあるから省くが、とにかく連句の鬼才たり異能兒たる桃靑の天稟は蚤くも此の言語遊戲的俳諧時代に遺憾無くあらはれてゐる。此の卷などの巧さは到底他人の眞似のできぬものである。中にも「難波の蘆」の一聯は、許六が芭蕉に入門する前に、及び難い上手として桃靑の伎倆に驚嘆し、一例として引いた句である。（俳諧問答）文學者として芭蕉の眞面目を解さうとするには、此の期の芭蕉をも篤と了解して置かねばならぬ。

覺者だけの事はある。が、鬼貫の特色は眞率樸直に在つたやうで、惟然坊や一茶などと共通の處を有つてゐたやうである。たゞ鬼貫には奇峭逸宕の趣が克つてゐた。

宿がへに鼻毛も拔きぬ梅の花　　鬼貫

戀知らぬ女の粽不形なり

蹈みては花をやぶり、蹈まずしては行く道無し。

野の花や月夜うらめし闇ならよかろ

雪で富士か富士にて雪か富士の雪

參考の爲に芭蕉の談林風時代の附合の一部分を掲げて見る。

あら何とも無や昨日は過ぎて河豚汁　　桃青（芭蕉）

寒さしさつて足の先まで　　信章（素堂）

居合拔霰の玉や亂すらん　　信德

拙者苗字は風の篠原　　青

鶴の聲菊七尺の詠あり　　同

お國隠居の道廣き山　　貫

江戸の其角嵐雪は發句では優れた才氣をあらはしてゐるが、連句では寧ろ京洛の人々が多く努力したやうである。その嵐雪でも鬼貫よりははるかに好かつたやうに思はれる。揚句に鬼貫の「歌仙しかけて辛き目をした」とあるのは、多分さすがに蕉門の高弟の嵐雪との附合で弱らされた意を戯れたのであらう。『俳諧芭蕉談』（一葉集にも引く）にも鬼貫が幻住庵に芭蕉を訪ねて附合で芭蕉等にへこまされる譚が記してあるが、是等は作り譚であつても、實際鬼貫が芭蕉や丈草とでも會して附合をしたら、あゝいふ調子に脂を絞られたであらうと思ふ。

鬼貫は正風俳諧を主張した人だけに、發句にも連句にも蕉風に近い句も多い。「春の水處々に見ゆる哉」「行く水や竹に蟬鳴く相國寺」「油さし油さしつゝ寢ぬ夜哉」「冬枯や平等院の庭の面」の如きは、さすがに「俳諧はたゞまことに本く」と氣づいた先

ほこりするあすの菅笠紐付けて
　何かに物に(のか)うれしけりける
うつりての釣瓶初ぬる井戸の音
　曙數奇と人にいはれん
惜む種鳥に消ゆる月の色
　露のさかりは拾はれぬ玉　　（俳諧聯句百韻）

是等は先づ佳い方で、談林風と蕉風との間を行つた程度のものである。『犬居士』元祿三年）に蕉門の嵐雪との兩吟歌仙が出てゐる。

君見よや我が手入るゝぞ莖の桶　　嵐雪
　鰒によわる上がたの腹　　鬼貫
叡覽の月のあまりの影にゐて　　同
　年貢はからぬおのが除地　　雪

三、伊　丹　風

宗因の門人で攝州伊丹に松井宗旦といふものがあつて、此の人が伊丹風の祖と稱せられてゐる。その風を承け繼いだものが續々同地に出て、伊丹風といへば獨立の一派のやうに見做されるに至つた。けれども獨得な異見とか標榜とかがある譯でもなく、たゞ上島鬼貫に至つて注目すべきものを出したといふに過ぎぬ。鬼貫の隨筆に『ひとり言』といふ書があるが、此の書中に論じてある事は、恰も蕉風の爲に發せられたやうな趣があつて、當時としては餘程優れた識見をあらはしたものである。けれども鬼貫の作句は小西來山などよりももつと談林臭を帶びて居り、特に連句は蕉門の俊秀達には及ぶべくもなかつた。

卯の花や稀にこす垣幾白髮

つくからにまで延は竹の子

「世俗眠を醒す」の脇句は談林風が世間を驚動しつゝあるこ　を讃嘆したのである。

第三は眠を醒すから朝起の一喫(いつぷく)を附けたので、霞で春季をあしらひ、第四は煙草の煙の横折れから、駕籠舁きが迂曲し　山路を過ぎた後としたので、季は雜。第五は駕籠の過ぐる山路を大名の行列として、山風を峰の松で承けたもので（山風に峰の松を附けるやうな直接な附方は蕉風以後ではだん／＼無くなつてゐる）季は雜。第六は、供鑓つゞくに御城の追手の濠の橋を取合せたものらしく、それを追蹤（即ち御供(おとも)）する勢(ぜい)（即ち手(て)）に近き木曾　棧の月にでも繋けたものらしい。（追手を追つ手としても又鑓を負ふ手に近きとしても通ずるか）第七は鹿狩の追つ手にでもしたものか、藁人形は例の甲越軍記などにある藁人形で敵を瞞(だま)した故事など蹈へたのかも知れぬが、全句の附意が明確でない。第八は藁人形にも五色紙をあしらうたものらしく、鹿に萩の露として秋季を有たせたのである。是等で見ても判るやうに、宗因の發句が貞風に對して際立つた特色をあらはしてゐる程には宗因の奇才が十分に揮はれてない。

はさすがに輕快敏捷に行つてゐる。貞風のやうな生温い重苦しい處がない。用語も餘程時代色を帶びて來てゐる。

宗因が江戸に下つて興行した「談林十百韻」（延寶四年）は餘程油が乘つての作と見ねて、逸奇俊爽の趣の豐かな名集の一である。

されば茲に談林の樹あり梅の花　宗因
世俗眠を醒すうぐひす　雪柴
朝霞煙草の煙横折れて　在色
駕籠舁き過ぐるあとの山風　一鐵
眺むれば供鑓つゞく峰の松　正友
追手に近きかけはしの月　志計
小男鹿や藁人形に恐る（一に劣る）らん　一朝
五色の紙に萩の下露　松臼

忍ばれぬ晝のやうなる月の夜に
　露に濡れ〳〵頰かぶりして
霧深き出格子に立ち辻に立ち
　引寄せ顏の見ゆる三味線

「戀百韻」とは戀の句ばかり百句聯ねたのをいひ、連歌時代及び宗因以前にも又以後にも例へば釋敎とか羇旅とかばかりの百韻の類を試みた者も多い、連句としてはなか〳〵面白いものであるが、變化に乏しくて單調になり易い爲か、正格を守る人々はあまり行らなかつたやうである。茲に擧げた百韻の如きは各一句の意趣に戀の姿を有たせてあるが、後には「戀の詞」を大凡に定めて、其の詞さへ入つてゐれば戀の句として取扱ふやうになつた。是は寧ろ退化と謂うて可い。旁點を加へた語はいづれも戀の意をあらはした語である。發句から第三までは春、第五から第七までは秋で、四と八とは雜であるが、それらの捌き方や句移りにも無理が多い、けれども一句々々の仕立方

ゝしては實に破天荒と謂うても可い。談林調に近い奇調は宗因以前にポツ〳〵試みられてはゐたが、是を縱橫自在に運用したのは宗因の奇才に待たねばならなかつたのである。但し是は主として發句の方で、附合の方では其の奇才も十分に揮ふことができなかつた。發句と附合とは人によつて得手不得手があつて、宗因はどちらかといへば發句の方に其の特色をあらはしてゐた。であるから、連句の天才芭蕉の桃靑も中年にはしばらく談林風に沒頭してゐるが、桃靑の談林風の附合を見ると、其の風の大宗たる宗因よりもはるかに巧かつた。例は後に引く。

戀　百　韻

花で候お名をばたゞ申まひの袖
　夢の間よたゞ若衆の春
付ざしの霞底からしんで來て
　手とて枕をかはすことなし

林十百韻』の田代松意の序に「鍛冶町といふところへ時々會合して、向後の初心惡に染まらん事をかなしみ、端々此事を陳べて、多く迷へるを助くる。其中に、この席を我等如きの俳諧談林とこそ申けれ、など戯ぶるゝより起りて、皆人談林といひならはす」とあるから、俳諧敎育所の意味で呼んだ名である。

二、宗因の作風

談林風の特長は構句法の放縱闊達なるに在つた。例へば發句では「頭巾寒うして北に峩々たる靑山無し」「富士や扇おつ取り直して之を譬ふ」「屋根や時雨谷深うして耳遠し」などの如く、字餘りや調子の奇なものやを漢語や漢文句調又は謠曲もぢりの類を自由に驅使して是を句にした。言語遊戯の域を蛻脱してゐぬことは貞風とあまり變りはなかつたが、それは世間一般がまだ其の邊に彷徨してゐたからで、時代のせいで已むを得ぬ。が、此の奇語奇調で豪宕磊落な表現を無遠慮にやつてのけた處は、當時

の額を掲げて、此の頃から俳諧に轉じたといふこゝである。而して連歌宗匠の地位は長子宗春に讓つた。宗因が連歌から俳諧に轉じた動機はよくわからぬが、當時京都では松江重賴、山本西武などの眞門の大宗匠があつて、飛ぶ鳥も落すばかりの勢ひであつたが、是より先宗因は重賴に會うても居り、又後に談林の一風を創めた程の高才ゆゑ、疾くから俳諧には心を傾けてゐたことでもあらう。此の頃紀州中國九州などに遊び、大阪に歸つて後談林風を興すに至つた。晩年にはまた連歌道に復歸したと傳へられてゐる。延寶二年といへば宗因の晩年であるが、大野洒竹氏の『俳諧略史』に同年の宗因の明石人麿社法樂の連歌を掲げてある。されば連歌に復歸したとはいへぬ迄も、晩年迄連歌に心を傾けてゐたことは確かであらう。

談林は檀林とも書き、淨土宗の十八談林の類は檀林とも書くので、どちらでも可いが、もと談林は談議の叢林の義で、僧徒の學塲をいふ語で、檀林は栴檀の林で寺院の尊稱であるから、俳談の叢林の意からは談林と書く方が本旨に近いのであらう。『談

で附けると、前句が打越（前々句）に附けた意義を他の意義に變へて――卽ち取做して――附ける（德元の所謂取做し附）のが常手段になり易い。其處に、急激な變化を句移りの要諦とするといふ非文學的素質を包含してゐるのである。純蕉風以前の古風の連句が文學的意義に乏しいのも主として此の惡素質を擺脫し得なかつたからである。

第四章　談林風の連句

一、宗因と談林の語義

西山宗因は肥後の人、名を豐一、通稱次郎作と稱し。八代城主加藤右典廐正方の侍臣であつたが、夙に風流を好み、主人正方と共に作州津山寂證寺の毫信法印に就いて連歌道を學んだ。寬永九年主家沒落後、昌村昌琢に從學した。此の頃伏見に寓し、やがて又北野に移つた。正保の初め頃大阪に寓し、天滿宮の月次連歌宗匠となつた。（同社は今も連歌の月次會を繼續してゐる）明曆二年に天滿宮内の碁盤屋に轉じ、向陽庵

ゝ蝶とをかけた古風のものであるが、以下の附句は正しく意義の附になつてゐる。松を引き台ふから劣らじと結ふ玉箒と承け、それから在々の雪の道筋作ると應じ、それ〻殿の御鷹狩の道筋に取り、御鷹狩から唐犬を先に立てとあしらひ、その唐犬の驅使から唐人の八幡船の用心ゝ移る處、材料の取り方にはなほ多分の古臭を殘してゐるが句うつりの爲方は後の美濃風程度の手段と殆ど異ひがない。たゞ垢拔けが足らぬのみである。古來の芭蕉の附合の注釋家の大部分――殆ど全部と謂うても可い――や、現今でも某博士の『冬の日』の注釋の類は、是れ程度の附合にはよく適(はま)るが、「匂附」にはとても適りさうには思はれぬ。それらを茲で態々いふ所以は、古來の蕉風研究家が是こそ蕉風の眞手段だ本色だと信じて喧說してゐるやうな處は、芭蕉以前に既に疾くに試みられてゐたことを、當時の俳論とも合せて篤と了解せしめん爲である。予が、古風に二樣ありとし、その二樣の辭附も意附も純蕉風からいへば淺薄な非文學的要素を多分に雜へたものであると每に力說しつゝあるはかうした處を指すのである。意義だけ

つた一例として、『紅梅千句』(明暦元年板)中の一部分を引いて見る。此の卷は貞德晩年のものを其の歿後に上梓したものであらう。

第二　蝶

身輕氣に舞ふ羽づかひやてふ飛燕　　季吟
　御遊の光り照り添へる春　　長頭丸(貞德)
月までも初子(はつね)の松を引あひて　　友仙
　皆劣らじと結ふ玉箒　　安靜
降雪の道筋作る在々に　　可頼
　隱れは無いぞ殿の鷹狩　　政信
世の常に稀な唐犬先に立て　　正章
　かねてばはむ(八幡船か)の用心ぞする　　長久

是等に至ると蕉風末派のものと何程の異ひも無い。發句の「てふ飛燕」は趙飛燕の趙

「或は和漢の古事、或は詩歌物語やの風情などにて付くる也」とて「春日の里にゆかりこそ持て、ぬききせん(脱ぎ着せんか)若紫のすり小袖」を擧げてゐる。こゝに體付とは後世の所謂「噂」に似て、前句の句意を說明したり內容づけたりするやうな附方で、蕉風以後では嫌ふたものであるが、「意附」の一種である。とりなし付は蕉風以後でも古風臭を帶びた附方には往々あつて、甚だしく非文學的なものであるが、純蕉風を解するにも此のやうな「とりなし」的解し方をする者は今でもある。すなはち前句は孕み女が身の行末を案ずる意であるのを、稻の事に取り做して、此のやうに出來過ぎた苗が實のつたら如何であらうとの意に變へたのである。心付の事は後にいふ。此の例句は伊勢物語を含んでの附けである。とにかく此の心付のやうなのが蕉風であると誤解してゐるものが多いから、附合の手段に關する穿鑿は當時旣にこゝまで進んでゐたのであることを明かにせん爲に俳論の一例として引いたのである。

なほ又貞德一派の俳諧が烹熟期に近づくに隨うて漸く所謂心付(意附)に趨きつゝあ

山や故郷錦着て行く入日影

冬籠蟲けらまでも穴かしこ

三、當時の俳論と意附

齋藤德元の『俳諧初學抄』に「宗祇公云々。一には心の俳諧、二には詞の俳諧也。心の俳諧をば一段ほめられたり。詞の俳諧をば次にせられたると見ゑたり。心の俳諧と云は、詞なだらかにして心に興を含めり。詞の俳諧と申すは、秀句にかゝり利口を發に言ひ立つる也。」といひ。又附方の三品とて「體付、とりなし付、心付」を擧げ、射付は「前句の心を變へずしてその趣を能くいひなすを云へり。是れ作の無き付けやうなり」とて「身のしほいたくこぼれかゝれり、眉黑く笑ふ笑顏にゑくぼゐて」を擧げ、とりなし付は前句の詞をあらぬ事に取りなし付くる也。是は作を以て付くる也」とて「孕みぬる身の行末のいかならん、ふし立さ苗出來過ぎてけり」を擧げ、心付は

思ふやうにぞ雨も降りける

十五夜の月にはさはる雲も無し

きつかりきかり渡る雁がね（借金に繋く）

しちやかた悦びいさむ秋なれや

菊千代丸といひてかしづく（俳諧文庫洒竹氏所引より）

是等が漸く進んで芭蕉の連句のやうなものになつたのかと思ふと、寧ろ不思議な感じがされる。但し此の巻などは餘程談林風に近くなつてゐるやうである。

なほ例により貞德の發句二三を擧げて置く。宗鑑に比べて優美だとか雅馴だとかいへば謂へぬこともないが、退屈で眠氣を催すやうな氣の利かぬ延びやかなかけ詞ばかりなのには何人も辟易せざるを得まい。

鳳凰も出でよ長閑けき酉の歳

雪月花一度に見するうつぎ哉

仙の藥ぞ求め兼ぬる

犬死と見て逃去し悔しさよ

列仙傳まで見られ候や、奇特々々。（以上俳諧文庫本より）

源語や勢語や古今後撰の類は當時の人々は大抵鵜呑みにしてゐたのでそれらに熟してゐぬと、にはかには合點の行きにくい附句が多い。其の外佛書醫書から儒老雜說手當り次第に取入れてあるが、故事さへ分れば附意を解するのは容易である。談林風になると當時の現代語をも勝手氣儘に用ゐてデリケートな處に洒落を味はせるに力めてゐるのでだん〳〵分りにくゝなつて來る。

貞德獨吟集

鏖の名にもつもやさしきの初音哉

植込よりも見ゆる夏山

麓田の早稻も晩稻もよう延びて

冬なる柿の枝ぞさけたる

桑蠶化而成レ蝎云佛書の本文歟、珍しく候。併らはどみにあらず、蝎と云ふ小虫なり。醫方に全蝎々尾などあることなり。

七夕

牛の爪われてもあるやお七夕

牽牛の寄せあるのみにあらず、躰?物の男われてもあはんと云し古事迄引出され、珍重々々。

のきざりの中々今は悔しやな

なにはの難波のうらみ述懐

此難波の恨み後撰の蘆苅にも伊物（伊勢物語）の有常の妻も（にもカ）あらず、古今の、うきめをみつのあま、と讀し古事分明に聞えてをかしく侍。

雪の景氣を思ひこそやれ

いづくにか家は有らふ（むなざにや）嶺の雲

昌黎文集の心掲爲に候

甲子の數ふる年の答へやう

（判詞、以下倣之）珍しき古事取出され候

彌勒の出る世ははるかなり

夕貌の契りはあまの事で候

あまの子なればの夕がほの上（源語）の詞よく出あひ候

氣づかひも夏山住のこゝびあひ

ゆりわの〳〵團子蒸ぞおはゆる

ふるき小唄よく覺られ候

痩て毛長き猿のかはゆや

玄宗は御心と代を失はれ

太平廣記まで見られ候や奇特候

蝸（うはゞみ）の息にや霧を吹つらん

春夏秋をつなぎ止めばや

青柳や蓮や薄の糸もちて

以上は『犬子集』中の貞德の句から春夏秋冬戀神祇釋敎雑の各一例づゝを拔き取つて見たのであるが、あつといはせるやうな快心の句はあまり見當らぬ。戀には「御簾の下より見るは君樣」に「車にも榻(しぢ)(朘(しぢ)に繋く)といふ名は好もしや」などの如何はしいのもある。貞德には「思ふごち敷く毛氈の色好み。唐人は皆嘗むる腎藥」(紅櫻千句)の如き句は幾らでもあるが、是も時代のせいで言ふにも足らぬけれども、貞德が宗鑑等に比して特に高雅であつたとは見られぬ一例にはならう。

當時の連句には故事が多く取入れられてあつて、句と句との關係が古事で繋がれてあるのが寧ろ大部分を占めてゐる。今參考の爲に貞德判(批評)の正章(安原貞室)の獨吟千句から數句を拔いて見る。

深き心のこもる謎々

鬼と思ふも女なりけり

いつくしや薊(あざみ)の中の眉作り(眉はき即ち花薊)

　如何にいふとも今はなるまい

去年植ゑし垣穂ゝ柿を祕藏して

冬はたゞ夏の事のみ言ひまはし

　かたびら雪のかゝるませ垣

稀に會ふ夜をまん丸寢もせいで

　玉子の親(雛)が急ぐきぬ〴〵

番匠には料理の形も心得て

　よくこそ削れ神の堅魚木(かつを)

　子供の中にまじる惡人

博奕打(ばくちうち)賽の河原にさまよひて

ぶべくもなく、且その剽竊でもあるかのやうに聞え、なほ又「虫」は何にでも動く嫌ひもある。要するに滑稽の才は後者は迚も前者の比ではない。それならば滑稽以外に何か狙つた處があるのかと見ても、別にそれらしい處も見えぬ。犬筑波には卑猥な傍若無人の句(題句は態とその類を多く擇んでゐる)も多いが、油糟も隨分無遠慮にやつてのけてゐる。乙う氣取つたやうな句は附句は後者に多いが、それが却つて藁筵に縹緲緣でも附けてあるやうで、下品さを目立たせてゐる。たゞ強ひて後者の長所をいへば興に乘じて口から出任せにやるといふ風でなくて、相當に工夫し考案してゐるから、瑕疵が少なく、總じて穩かに和しいといふ處がある。此の點だけは宗鑑よりも守武に近いと謂へるかも知れぬ。が、それも時代がやゝ進んで俳諧が職業的になれば當然さうなつて來ねばならぬ筈である。

あはれなる歌こそ長く聞えけれ

蛇に呑まれて蛙鳴く(古今序)なり

腫物のつぶれぬ先に身まかりて

亡き人や釣垂れぬらんわたり河　（三途川ならん）

綻びや經帷子にありつらん

疊さし道具待つ間に頓死して　（以上犬筑波集）

親の代に星の祭や過ぎつらん

後生でも持病の虫や起るらん

方角や弘誓の舟に知れざらん

手聞（利か）にやならんと姫が思ひ死

聖靈は蓮より菱や好むらん　（以上油糟）

是等を一讀すれば多言する迄も無く巧拙の差の著しいことがわかるであらう。前者は才氣煥發し、後者は腐氣迷濛してゐる。後者の内で「後生でも」などがやゝ宗鑑風に追隨してゐるぐらゐなものであるが、「腫物」の奇警（つぶれぬ先、がおもしろい）に及

手を合せ侘言(わびこと)すれど酒強ひて　　（以上油糟）

こんなものならば貞徳を累はさずとも誰にも幾らでもできさうである。犬筑波の三句は三句とも氣が利いて五分の隙も無い處をやつてゐるが、後者の、例へば「埃にやは「硯水」の燒直しに過ぎず、「薄紙に」は埃と塵の同想で何の手際も無い。其の他いづれも如何にも鈍重で、血のまはりの惡いやうな句ばかりである。

番匠の遁世したる形(なり)を見よ

さい槌あたま剃りぞ侘びぬる

額に殘るてうの（手斧(てうな)）月代(さかやき)　　（以上犬筑波集）

柴の庵もよき圍ひやら

彌陀のみ國の指圖をや持つ

修理の守にはいつはなれけん

針手向けよと夢に見ねなり　　（題句）

今比較の爲に兩者の二三の例を並べ掲げて見る。

　吹くも吹かれず摺るも摺られず

破れ笛のさらば簓（さゝら）に成りもせで

山臥の貝破れ珠數の緒は切れて

硯水海に埃の溜り來て　　　　【以上犬筑波集】

啼く蟲もふけの中なる小萩原

垢はまだあれどたゝねば上（あが）り風呂

火急なるこうひの藥あらくして

埃にや埋れ果てたる古板木

つきつけや烟草法度の強くして

屋根も無く玉屋が内は不便して

薄紙に而も塵さへ多くして

目口あかれぬといひ、娶が洗ふとあれば脚布をよごすといふの類、附方が直に前句の詞尻にもたれてゐる處に變りはない。辭の緣から巧く趺を合せさへすれば可いといふ頓才的言語遊戲である處も亦全く同じい。而して犬筑波が奇才縱橫洒落無礙なるに比べて、何となく精彩を缺いてゐるやうに予には見ゐる。（貞德の方が才氣が優れてゐるやうにいふものゝあることは前にも一言した）貞德が評して、今は附くべからずとしたものは、同意（題句の意を繰返したやうなもの）用付（題句の物を說明したり襲用したりしたやうなもの）無正體（出鱈目に作つたやうな題句）一句の理り無し（一句に何の意味も無い題句）無誹言（連歌風に上品過ぎたり諧謔の意が無かつたりのもの）等である。是等は附方が專門的にだん／＼吟味さるゝに至つた自然の結果であるが、特に注意すべきは最後の無誹言（誹は俳と同じい）で、當時はふざけた處が無くては俳諧にはならぬとされてゐたのである。

『油糟』は、犬筑波と同じ題句で犬筑波とは異うた附句を附け試みたものであるが、

佐保姫も神なればかくの如く付け侍る。

（おほぶくや、は大服茶のちやの脱字でもあるか、未詳）

あなうれしやな餅祝ふ頃

梅が香の先づ鼻へ入る春立ちて

目口あかれぬ谷の朝東風

目と口とをば塞ぎたる故に鼻へ入るなり。

しうとの爲の若菜なりけり

澤水につかりて洗ふ娶がはぎ

しそめし脚布をよごす春の野

よごしたる脚布を娶が洗ふ也。姑（又舅）に娶婿など今は付くべからぬ。「今は付くべからず」といふ風に、附物の穿鑿や方式が細かになつてゐるが、それも程度までで、尿をしてとあれば大服茶（春の飲物）を過したといひ、鼻へ入るとあれば

地位に就いてもさま〳〵に力說してゐる『新增犬筑波集』は宗鑑の犬筑波を批評し、且第三句を附け試みたもので、一名を『淀川』呼んだのは宗鑑の居た山崎が淀川に近いので其の流を汲むとの意でつけた名であり、『油糟』も油は同地の名物で且宗鑑が油筒を霑いで口を糊したことなどから、其の油の滓渣との意で題したものである。同書の跋に「正味をば山崎衆の拔句してつくことならぬ油かすかな」との狂歌を記してゐるが、油の正味を宗鑑に拔かれてしまうたので火の點かぬ糟ばかりだとの意でもあらう。されば、主として宗鑑に對するあこがれから俳諧に入り、而して其の學識や勢力や才能やが俳諧中興に成功せしめたものと謂うて可からう。句風等も貞德のは守武よりも寧ろ宗鑑に近い。

霞の衣裾は濡れけり

佐保の春立ちながら尿をして

おほぶくやのみ過す神達

ざるものである。

それと今一つ貞德の大功績は、門下から多くの俳人を出したといふことである。是等は俳家の系圖でも一見すれば直に知られる事ゆゑ略すが、ともかくも師匠の矢鱈に多かつた貞德は弟子も無數にあつて、凡そ當時の俳人で貞德の教を多少なりとも受けなかつたものは殆ど絕無であつたかも知れぬ。されば式目を制定したと合せて、俳諧教育家としての貞德は古今無比の地位を占めてゐると謂ふべきであらう。

二、貞德の作風

貞德は『俳諧未來記』に俳諧での宗鑑守武の事を述べ「連歌などのあとにて、紹巴昌叱の言捨の俳諧侍りけるを、予若年の頃は、連歌の執筆を務めける故、耳慣れて其の樣をよく覺え、人と成るに及びて、深く思案して俳諧を中興し、都鄙境までのもてあそびものとなり侍るな〻」といひ、『御傘』の序なにも宗鑑を辯護し、其の他俳諧の

かつたであらう。貞徳を俳諧中興の祖と稱するはそれが爲である。慶長三年勅許を得て花咲翁と稱し、京都五條松原東洞院に寓居し、居を柿園と號し、歌俳を以て門戸を立てた。晩年に失明して明心居士と稱した。承應二年歿す、年八十三。

貞徳には自叙傳ともいふべき『戴恩記』があるので經歷はよくわかる。其の他參考になるべき自記のものが多くある。和歌では『逍遙集』があり、又『貞徳文集』も遺つてゐるが、貞徳の面目、俳諧に在つたこと言ふ迄もなく、特に俳諧の式目及び心得を集めて大成した『御傘』(承治二年)を編纂したのが最大の功績と謂うて可からう。此の書は後世迄俳諧無上の寶典とされ、今もよく讀まれるものである。式目を定めるなどいふは文學史上何の意義も無い事のやうであるが、準則などにかけ構ひ無しに自己の天地を拓いて行くのは傑れた天才でなくてはできぬ事で、さうした天才は滅多に出るものでもない。一般人は矢張何か――よしや馬鹿げたものでさへ――方式めいたものが無くては手がゝりを得られぬ。式目の類は即ち其の道の流行を促すに必要缺くべから

第三章　貞風の連句

一、貞德略傳

松永貞德は松永久秀の族永種の子で、幼名を勝熊（かくま）といひ、後松友（勝熊と同音）とも稱した。號を逍遙軒延陀丸長頭丸などゝいうた。元龜二年に生れたとあるから、守武や宗鑑が歿してから二十年程經つて世に出たわけである。歌道は細川幽齋其の他當時の高名の人々から受け、連歌は里村紹巴及び昌叱に學んだ。とあるから、初めは世間並に正風の和歌連歌に志したのであらう。而して貞德が俳諧宗匠を許されたのは二十歲の時であるから、守武宗鑑の後四十餘年間は俳諧は中絕の姿であつたわけである。けれども全く斷ねてゐたのではなく、たゞ代表的人物が居なかつたまゞあつて、連歌師の間や民間にも俳諧體の連歌や前句附風のものが引つゞき行はれてゐたのである。が、貞德のやうな專門家が出なかつたら俳諧はまだ〳〵獨立の機運には達し得な

たの月の句だのと手數のかゝるやうな事は嫌ひもし不得意でもあつたであらう。是に對して守武は專門家であるとの自覺も加はり、隨つて骨も折り、錬つたり磨いたりしたので自から相違が見(あらは)れて來たのであらう。其の骨法に至つては兩者に大なる軒輊あるを認め得ぬ。たゞ守武はかけ詞よりも句意の方に幾分重きを置いたやうである。

守武には「元朝や神代の事も思はるゝ」「朝顏に今日は見ゆらん我が世哉」の如き正風の名句もあるが、こゝでは連句との對照に便せん爲、それに相應するやうな發句を數句のみ揭げて置く。

落花枝にかへると見れば胡蝶哉

青柳の眉かく雉子(岸にや)の額哉

鶺や今日久方のあまの川

氷らねど水引とづる(綴、閉)懷紙哉

辷るなと言ひだにあへず辷りきて
　　唐の帝（みかど）や水雞なるらむ
　揚貴妃の顔ほと／＼とうち叩き

の類は、宗鑑の前句附とさしたる異ひはなく、よく解りもする。たゞ前句附は多くは難題的に態と拵へたやうな一句に取合せるのであるから、滑稽問答的な頓智要素が多く加はり、随つて可笑味（をかしみ）が膚淺に流れ易いといふ迄で、手段は全く同じいのである。川柳などでも所謂黒人筋の凝つた者は同じ「穿（うが）ち」でも一讀して哄々（はゝ）と笑はせるものよりも、澁くひねくつたよく考へぬと判らぬやうなデリケートな處のあるのを喜ぶ。宗鑑と守武との相異も是に近く、守武は謂はゞ宗鑑の黒人化したもので、澁くひねくつた處がある。是は長連歌の自然の性質からも來てゐるので、長くつゞけるのに輕妙自在な附句ばかり出るものでもなく、又さういふのばかりだと却つて饜き易い。宗鑑は天眞爛漫、随つて簡肆粗放で、凝つたことや、面倒臭い百韻だの千句だの、花の座

念が入つてゐたせいか、總じてあまり持つてまはり過ぎてゐるから、一讀や二讀では面白うも可笑しうもない句が多い。全體謎のやうな、餘程考へねと分らぬ、或は考へても解らぬといふやうな凝り方は、諧謔の本旨に背いてゐる。判つた時分には笑ひたい心持は遠く去り、是に代つて智慮分別が働く事になるから、間に合はぬ。今の吾々にわからぬばかりでなく、當時の人にでも早速はわからなかつたであらうと思ふ。けれども

　　梢より來てこそ吠ゆれ犬櫻
　　　猿眼にて花を見る頃

とか、

　　黒竹に筆にて書ける文も憂し
　　　兎の毛ほどだに心ありてよ
　　とにもかくにも油なりけり

ら朝顔の花の繁く（？）萎れやすらむと附けたのらしい。斯樣な「らむ」は俳諧特用のものと謂うて可く、常の推量よりも「といふやうな風だ」「といふ樣子がある」のごとき意味合に慣用されてゐる場合が多いやうである。芭蕉の「けらし」などもさうである。「すさまじ」は本來「愛賞まじ」で、無趣味、殺風景の意であるが、此句は前句の「すさまじ」を其の意にして附けたのでもあらう。「てうはう」は「調法」又は「重寶」で、常綠の松を朝顔などに對していうたものか、或は「定法」などで、開けば萎み、盛なれば衰へるのが定法と、「是れ」と前句を承けていうたのか、見當がはつきりつき兼ねる。其の次の句は露けさに村雨の跡を持つて來たのであらうが、全句の意味が予には判らぬ。第八は角から蝸牛を出したので、夕と言ふことをかけたのであらう。「露けさ」まで三句秋で、古い附合の表には露の一句をあしらうたのが多いやうである。

守武の主旨は「俳諧とて漫りに笑はせんとばかりはいかん。花實を具へ、風流にして而も一句正しく、さて可笑しからんやうに世の好士(?)歎なり《千句跋》といふ風に

發句は例の菅公の愛梅が一夜に配處に飛んで行つた、その輕々しさと、多分天下太平の氣輕さ心安さとを有たせたのであらう。脇句は梅に鶯と季をも物をも合せたので、鳥も鶯も我も／＼と身輕に浮れ出して來たといふのであらう。梅に鶯を附けるといふやうなのは、後の連句でも趣の取り方でやらぬこともないが、同じ鶯でも附味が異ふ。幼稚な時代のは、梅といへば鶯、吉野といへば花とか櫻とか、更科と出れば月。佐野と出れば雪、といふ風に、きまり切つた附物を附けたので、是等は意義の聯絡としても最も幼稚な手段で、寧ろ語辭の聯絡に近いものである。第三は、脇句が鳥鶯なので梟を取合せたので、前句の趣から長閑な風が吹くとし、山見ゐても黑うに(?)山見ゐてか何かと繋けたのであらう。以上三句春で、春秋は三句以上必すつゞけることになつてゐる。第四は、梟から目元凄まじとあしらひ、山見ゐてに月殘る影と應じたので、殘月の影が見る目も凄まじいといふのでもあらう。月の句で、月は通例秋季として扱うてゐる。それで第五に朝顏の花を出したので、殘月に目元すさまじか

る。（是等も追々研究されてだん〳〵明かになつて行かせたいものである）是等の長連句は連歌の方式を緩めて守武が自己流に試みたものであるが、大體は連歌式に則つてゐること言ふ迄もない。たゞ用語などは無拘束に古今雅俗の嫌ひ無く取入れたことは宗鑑に傚うたわけであらう。

飛梅や輕々しくも神の春
　われも〳〵の烏（からす）うぐひす
長閑なる風ふくろうに山見ゐて
　めもとすさまし月殘るかげ
朝顔の花のしげくやしほるらむ
　これてうほうの松の露けさ
村雨の跡につなげる馬の角
　かたつぶりかと夕ぐれの空

ふり烏帽子着て」と脇をつけたとある。が「寒川入道筆記」に、六七十年前に宗理といふ俳諧の上手があつて、三好長度の邸で詠んだ句（いづれも、は、大略、ふり、は、ふる、とある）としてある。而して此の百韻中に「なにと見れどもさきの近さよ」の前句に宗理の「日をねらぶ暦はしはす廿日頃」の附句があつたなど記してゐるから、こちらの方が確かなやうに聞ねるが如何であらうか。此の宗理といふ人なども初期のあまり世に知れ渡つて居らぬ才藻豊かな狂客の一人であつたらしい。此の外にも宗鑑守武時代から德川初期にかけて此の種の才士が少なからずあつたものと想はれる。だんノ＼捜つたら斷片的にしてもいろノ＼な材料が出て來るであらう。（守武の事は近頃其の遺書の自筆物が調べられたり、何かと專門家の間にも漸く注意されて來たのでいづれ纒まつた研究書が遠からず世に表れるかも知れぬ。）

守武の長連句は數巻あるが、玆では最も世に知られた獨吟飛梅千句（犬筑波に後るること廿六年の天文九年に成る）を擧げて見る。が、通じて難解なのには弱らされ

三、荒木田守武の長連句

荒木田守武は天文十八年に七十七歳で歿したといふから、宗鑑を通説の年齢にすると、それより八歳の後輩といふことになる。伊勢山田の荒木田七家の一で、本姓は薗田氏、内宮の禰宜で、通稱を中川平太夫というた。此の人は宗祇や宗長にも親炙し、千句なども數卷遺し、其の他著書も多く、さすがに正四位上の神主であつたゞけに宗鑑よりは上品な處もあつた。著書中には敎訓的なものまでもある。けれども作句の內容は前句附と何程の逕庭も無く、たゞ長くつゞけたものがあるのと、宗鑑に比べれば凝つた處があるのとが、少なからぬ進步を示してゐるといふぐらゐな程度に過ぎぬ。が、此の程度でも歷史的には大なる進步であつた。

俳諧奇人談等に、守武がある時連歌の席に上つたら、一座は悉く法體の人ばかりであつたので、「御座敷を見ればいづれもかみ無月」と詠んだら、宗祇が「ひとり時雨の

の優れたものや、御傘の初編からそれに接近したものや、『竹齋』などと共に、滑稽文學の上乘に位するものである。たゞ玉石混淆なのは、歎らぬといへば謂へるが、それも物に拘らぬ宗鑑らしい處があつた却つて嬉しいと思へば思はれるやうでもある。(犬筑波集の研究は數年前に自分も思ひ立つたこともあつたが、多忙と或る事情との爲に殆ど手もつけずに了つた。近く藤井博士の手によつて一書が出される筈であるが、自分の愛好書の一であるから、鶴首してそれを待つてゐる。)參考の爲に宗鑑の發句二三を記して置く。

手をついて歌申上げる蛙哉

うづき(疼き、卯月)來てねぶと(根太腫、音太)に鳴くや時鳥

摺子木に知らすな蓼の花ざかり

風寒し破れ障子のかみな(紙無、神無)月

傘のさし合ありて貸しもせず

の類は、いづれも輕妙人の頤を解くに足る。あまりに案じ過ぎ凝り過ぎたものには擊節の佳句は無い。「毛のある無いは探りてぞ知る、弟子持たぬ坊主は髮を自剃して」「土の中にもしはぶきの音、入定の大師や風邪を引きぬらん」「かくもかゝれず天の橋立、浦島が後の記念に糞をして」の類の、後の川柳と捉へ處の似通うてゐるやうなものに最もすぐれたのが多いやうである。（川柳も初期の寶曆明和頃のもの程素樸輕妙のうちに淡雅な可笑味と一種の風情とを蘊んでゐて好いが、後のもの程厭に凝つたりひねつたり黑人じみたりしてゐて、洒落の味が乏しくなつてゐる。）「八幡の山を拜む尼御前、今こそあれ我も昔は男して」「忍ぶとすれど聲の高さよ、春日野の若紫の摺子鉢」の所謂本歌取（古歌を蹈へたもの）の類は、才格を要するだけに作り過ぎたのが多くて、宗鑑の眞面目を發揮したものは却つて少ないやうである。ともかくも此の類の洒落味を取扱うたものの中では『犬筑波集』は最も愛すべきものの一で、『狂言記』中

人の情や穴に在るらん

玉章を今宵鼠に引かれけり

なども多少の風情もあつておもしろい。此の種の句も少なからずある。

阿彌陀は水の底にこそあれ

南無といふ聲の下より身を投げて

あまり煙の立つぞ悲しき

高き屋に登りて見れば燒けにけり

尊とくもあり尊くもなし

飛ぶ鳥を祈り落して喰はれけり

一二々々と文字ぞ見わける

雪の日に齒かけ足駄を穿きつれて

連歌の歸さ雨に濡れけり

源氏の君に盛る濁酒

夕顏の宿の亭主の出逢うて

強ひて機智を弄せず、素樸な處に自然なをかし味がある。

馬に騎りたる人麿を見よ

ほの〳〵と明石の浦は月げにて

明石の浦から月氣を月毛ともぢつた處、巧智を弄し過ぎてはゐるが、此の種の凝つた句も往々ある。

月日の下に我は寢にけり

暦にて破れをつゞる古ぶすま

是等もあまり持つてまはらずに、稚拙な處が却つて厭味が無くて好い。

堂の坊主の戀をする頃

玉章を樒の花に結び添へて

姑の爲の若菜といふのであるから、冷たい水に脚を浸して洗ふ嫁が萩（嫁菜の一名）と嫁の脛とをかけてあしらうたので、是また滑稽問答の上乘なものである。

大長刀に春風ぞ吹く

辨慶も今日や火花を散らすらむ

大長刀を振立てゝ辨慶も今日こそ必死の火花を散らして戰ふらむ、と、春風に花を散らすとを言ひ紛らせたので、その紛らせ工合が如何にも手際よく行つてゐる。

尻毛を傳ふ雫さく／＼

水鳥の尾の羽の氷今朝融けて

是も曾呂利譚の類によく出て來る前句附で、此の前句に何とやらいふむさくろしい意の句を附けたら、誰かが「水鳥の」のやうに附ければ風情が出て來るとて附けて感心されたなど傳へられる句である。是等は聊か作り過ぎて他の句の輕妙さにはやゝ似ぬものであるが、貞德のには此の類のが多い。

理に作つたやうなのが多く、貞德の奇才縱横に及ぶべくもないやうにいふ（俳書大系の井泉水氏說の如き）者もあるが、予の見る所では、それはあべこべで、宗鑑の方が奇智を鬪はす戯謔文字としては一段も二段も上である。發句でも「月に柄をさしたらばよき團扇かな」の如きは宗鑑でもなくては容易に言出せぬ逸趣がある。宗鑑はかうした方面にたしかに一種の天稟を有つてゐた人であらうと予は見てゐる。「元朝の見る物にせん富士の山」など、平凡無造作なやうで而も小細工師の及ばぬ棄て難い雅味を味はせてゐる。人の見る所はさまぐ＼である。

前に擧げた「佐保姬の」云々は、霞の衣の裾が濡れたといふ難題に對し「佐保姬の春立」とつゞけ、さて「立ちながら尿をして」と立小便をした爲に女神の霞の衣の裾が濡れたと言ひ脫けたので、頓智問答としては奇變縱横なはたらきのある句である。

姑の爲の若菜なりけり

澤水につかりて洗ふ娵がはぎ

あらう。

宗鑑は俳諧の式目をも制定したらしい。『貞徳永來記』に「俳諧は昔よりありけれども、百句つゞきたるは稀なり。然るに伊勢人 守武は千句をつらね、山崎衆は俳諧の式をつくれり」とある。是等や宗鑑の作風などから見て、俳諧の基礎は宗鑑によつて築かれたと謂うて可いやうである。

宗鑑の『犬筑波集』は所謂俳諧連歌集中に在つて第一位を占むべきものである。其の諧謔味の豊富なる、才氣の潑剌たる、意趣の自由なる、表現の眞率なる、すべて宗鑑でなければ此の境地には到底達し得なかつたであらうと思はれるものがある。同書中には宗鑑自作の句も、世間に傳はつてゐた句も 當時の同好者等の句も ごつちやにかき集めたものらしいが、大部分は矢張宗鑑の句であらう。さうでないにしても、編纂者の趣味嗜好が自から加はるわけであるから、宗鑑の句風を見るには十分である。なほ又同書の附句と、同じ題句で貞徳の試みた附句(後にいふ)とでは、宗鑑の方は無

人々が氣の毒がり、物を持ち寄つて賑はしたなどの譚も傳へられてゐる。（『寒川入道筆記』）（大阪獨吟集に、尋ねて來ませ宗鑑が庵、油屋のしめ木の音をしるべにて、といふ附句がある）

宗鑑が俳諧連歌に志したのは、正風連歌では宗祇一派が既に重名を成してゐたので、自分が其から擢でることは難かしいと考へたからだと傳へられてゐる。が、それらの考もあつたかも知れぬけれども、宗鑑の遺作が他人の追隨を容さぬ奇才縱横の俳趣のあらはれてゐる處を見ると、天性がそれに向いてゐたので、自然に其處に趨いたのでないかと思ふ。宗鑑には狂歌集もあつたと傳へられてゐる。狂歌も此の頃勃興しかけてゐたので、『狂歌合』（續群書）なども遺つてゐる。宗鑑の狂歌として後の狂歌集の類に收められてゐるものも往々ある。當時の連歌は既に行き詰つた體で一轉機を要求しつゝあつたし、文學が平民化すればする程輕易な趣味のものを望むといふ處もあつたので、宗鑑の才が恰も是に向いてゐた處から俳諧に入つたものと見るのが庶いで

歌もさうであつた。而して其の主流が、長連句の正系に流れ入るに隨ひ、二句言捨は前句附として餘流となつて後世まで遺ることになつたものと見て可いやうである。

二、山崎宗鑑の連句

山崎宗鑑は、もとは近江の佐々木氏の族で、本姓は支那氏、彌三郎範重（或は云範光）と稱した。延德中六角高賴が甲賀山に據つて叛いた時將軍義尙に從うて陣に在つたが、義尙が薨去したので、世の無常を觀じて髮を截り、尼ケ崎に隱れた。嘗て一休和尙に就いて禪に參じたこともあるといふ。其の後山崎に移り棲み、庵を結び、土產の油の筒を鬻いで口を糊しつゝ連歌に遊んで自ら樂んだ。山崎を氏稱したのは此の地に永く住してゐたからである。晚年西國を行脚し、讃岐豐田郡坂本村に一夜庵を結んで遂にこゝで亡くなつた。年八十九。

隨分貧乏してゐたと見ね、歲暮の吟に「年暮れて人物くれぬ今宵哉」とあつたので

見してゐる。宗鑑の『犬筑波集』などは一種の前句附集と謂うても可く、――長句に短句を附けることもあるが――その特色は、題句（先に出してある句）は例へば、

霞の衣裾は濡れけり
佐保姫の春立ちながら尿をして

の「霞の衣云々」の如く、大抵特に作つた一種の難題めいたものを出し是に巧みに應答をするのが附句の手際で、例の豊臣時代に流行したといふ、「圓く四角で長し短し」といふ難題の前句に曾呂利某とかが「圓盆で豆腐を買ひに行く跉跰」と附けたら、紹巴か誰かが「筒井筒月釣り上げる箱釣瓶」と附け直して豊公の御感に預つたとか何とかいふのと何の異ひもない。謂はゞ一種の難題滑稽問答で、初期の連歌のかも川を鶴脛で渡るといへば、かり袴ををしと思うてと附ける行き方と類似したものである。宗祇時代に既に俳諧百韻のあつたことは確かと見て可いが、守武が長連句をだん／＼試みる頃までの俳諧連句の主流は此の前句附的連句であつたものと思はれる。初期の連

第二章　勃興時代の俳諧

一、初期の連句と前句附

初期の俳諧連句期は是を「前句附時代」と呼んでも可い。前句附は短句を出して置いて、それに協うた長句即ち前句を附ける一種の言語遊戯の類で、俳諧の支流としてずつと後世まで行はれてゐたし、初期にも長く續けた連句もあつたが、內容は前句附と殆ど何の異ひもなく、たゞ長いものは一卷の法式に遵うたといふに過ぎぬ。前句附は戰國時代から德川初期にかけては特に流行したものらしく、前期の正風連歌を墨守したものの外には此の前句附の類ばかりであつたから、前句附は初期の俳諧連句を代表するものと見て可い。最近迄に行はれて來た前句附は、俳諧連句と殆ど何の關係も無く別に行はれて來たのであるが、戰國時代の頃にはそれが俳諧連句の正系であつたと謂うて可い。宗祇及び其の門徒などにも前句附的連句が往々あつたことは、諸書に散

な低級な附意の要領は、連歌時代に既に疾くに經驗され通過されてゐたものであることを確と了解して居らねばならぬ。俳諧では更に連歌の歴史を今一度繰返し、辭附や意附にしばらく沒頭してゐたが、芭蕉が出て、その意附を洗錬し醇化して「匂附」にしたわけである。

なほ又所謂「俳句」が連歌時代には無かつたやうに考へてゐる者もある。なる程「俳句」といふ名稱もまだ無く、後世の俳句と内容を同じうするものも無論多くは無かつたが、それはたゞ時代の違ひで、實は連歌の發句は俳諧の所謂「俳句」で、「俳句」は連歌の發句で、是もその間に本質的の相異を認めることはできぬ。連歌も和歌に對する場合には一種の俳歌であつたことは前篇にも說明した通りである。たゞ俳句は時代が進んでゐるだけに内容も進んでゐるといふに過ぎぬ。「俳句」は俳諧體の發句といふ意味で、初期のものはその名の通りであつたが、後には正風連歌の發句と同じやうなまじめなものになつて了うたのである。又俳句の「季」に就いて前篇に既に一言した。

いへば同じものなのである。終期の連歌と初期の俳諧とは全く異うてゐるが、初期のと初期の、終期のと終期のとを比べると、根本的の相異はなく、たゞ俳諧は時代が新しいだけにそれだけ進んでゐるといふに過ぎぬ。俳諧はより平民的であり、隨つてより自由であつたが、それらもたゞ程度の上に止つてゐる。であるから、連歌は中世の俳諧で、俳諧は近世の連歌であるともいへる。その關係は、謠曲と淨瑠璃、能と歌舞伎、などに似て、而してなほそれらよりも密接な關係を有つてゐる。宗祇の連歌を元祿化すれば芭蕉の附合となり、芭蕉の附合を室町化すれば宗祇の連歌となる。特に俳諧、中にも蕉風が狙つた「寂」の味といふやうなものは連歌時代に既に多分に練られてゐたのである。連句の附方も、辭のあやで附けるのからだん〳〵進んで、宗祇時代には句意に合せて句趣も相應するやうに附ける處迄達してゐた。卽ち前句の「こゝろ」に附けるのは既に連歌で可なりに鍛へられてゐたので、是を今一きは進めればやがて芭蕉の「匂附」となるのである。古來の多數の連句研究家が純蕉風に對して有つてゐたやう

異は二者の間には無いので、實はたゞ名目が變つたに過ぎぬ。といふと早速異議を申立てる人もあるであらうが、連歌を仔細に味うた人ならば、何人も是を首肯せずにはゐられぬ筈である。俳趣だの俳味だのいふと、一種の意義を含むことになるので、連歌を和歌の燒直しでもあるやうに單純に考へてゐる人々には、全く異うたもののやうに思はれ易いのであるが、一體、前篇の初頭にもいうたやうに、連歌そのものが滑稽趣味の要求から發生したものである。或はさう迄はいへぬにしても、少なくも初期の連歌は初期の俳諧と性質が全く同じで、たゞ輕い戲謔を本意としたものである。それがだん〳〵發展するに隨ひ、はしやいでふざけてばかりゐるのでは物足らなくなつて、遂に宗祇時代の道歌のやうなまじめな濕つぽいものになつてしまつたので、恰も宗鑑守武の俳諧連歌（ふざけた連歌）が後に蕉風のやうな正體のものになつたのと全く同じ經路を辿つてゐたわけである。だから「連歌」は連ねる歌といふ外形から來た名目で、「俳諧」はふざけた連歌といふ内容から取つた稱呼であるといふまでで、本來から

合をも味はぬと、妥當な解釋を下し難いこともあり、又偏見僻見にも陷り易い。例へば芭蕉の純蕉風期の發句や連句を、蕪村のものにでも對するやうな見方で、つとめて印象的に解釋しようとする者もあるが、是等は全然誤つてゐるとは謂へぬまでも、血色の好し惡しで人の體力を測るやうなもので、シツクリせぬ場合も多い。或は又、蕉風といへば芭蕉の蕉風も其角嵐雪の蕉風も、去來凡兆も、支考麥林も、皆同じやうなものと考へて、「蕉風は斯々(かく〳〵)だ」などと蕉麥を別たずに一からげに說き立てる者もあるが、例へば純蕉風と支考麥林との俳風の異ひは、純蕉風と貞風や談林風の最も進んだものとの異ひよりも甚だしいことを思はねばならぬ。是等も發句附合兩方を合せ味へば容易に陷らぬ誤解であらうと思ふ。

二、連歌と俳諧と

世間では連歌と俳諧とを全く別なものと考へてゐる人々もある。しかし本質的の相

附句は概して談林風だといふやうな事は先づ無い。人によつて發句に得手なものもあれば、連句に長所をあらはすものもあるが、連句と發句とで作風を全く異へてゐるといふやうなことは絶無なやうである。斯樣な判り切つた事を茲に改めていふ所以は、附合を了解するには、其の人の同時の發句の風をも合せて了解してゐねばならぬことを特に注意して置きたいからである。發句を了解する爲にも亦同じく附合を了解して居らねばならぬは言ふ迄もない。然るに世には此の判り切つたやうな事を等閑に附してゐる爲に、隨分發句と附合とでちぐはぐな解釋をする者もある。例へば芭蕉の談林風時代の發句を純蕉風のやうな見方で解釋したり、純蕉風の附合を談林風に或は古風に解釋したりするの類である。かうした誤りには、發句附合兩方合せ味うて置けば決して陷らぬ筈である。蕪村のある時期の發句の味ひ方は蕪村の其の時期の附合の味ひ方と相照せねばならぬ。或人の或る時期の發句での感興の捉へ處は即ち附合での感興の捉へ處である。表現の要領も互に相隨伴してゐる。是をよく心得てゐて發句をも附

後篇　俳諧

連歌の事は是迄あまり立入つて說いたものが無く、時代も古いから隨つて不問に附されてある事も多いので、史實の方面もやゝ詳しく叙べたが、後篇は記述の範圍を狹くして、俳風の變遷を手取り早く了得せしむるにつとめた。それは史實の方面に立入るなどの餘裕は此の小册子では容さぬからでもあり、又雜然とさま〴〵な史實を竝列するに過ぎ、連俳そのものの內容の變遷が不得要領に畢るのはおもしろくないとも思うたからである。且又連俳は是迄紹介されたものがあまり出てゐないので、連歌はともかくも、俳諧の方はやゝ縷く說く必要があるとも思うたわけである。

第一章　序説

一、發句と附合と

發句と附句、即ち俳句と連句とは。同じ風とか同じ人とかのであれば、其の要領は相應してゐるのが通例である。例へば同一人のでありながら、發句は概して貞德風で

ものは、前にもいうた佐々醒雪氏の『連俳小史』があるぐらゐなもので、それも至極簡單である。連歌の大體を知るには、右に擧げたもの位を見れば先づ十分であらう。其の雜誌他の類などに出された論文もある、が予も一々讀んでも見ず、又多くは斷片的のものであるから、茲に掲げた資料に就いて調べる方が却つて捷徑であらう

つくりのこせる小田のかたはら　隆於

紹巴の義子に元紹（玄仍と同人か。別人か紹巴の子とも云）といふ者もあつた。玄陳（寛永五年歿す、年七十五）は玄仍の子（或は云、弟）で、堺に生した。元紹の義子に玄的（或は云、玄仍の子）があり、玄的の子で正徳頃に紹尹があつた。又昌琢の子には昌程があり、以下子孫相繼いで、微々たる連歌道を纔に維持した。幕末の頃迄宗匠家として續いたのは玄仍系と昌叱系であつたといふ。而して謠曲が淨瑠璃に後を嗣がれても、現代に至る迄も大なる勢力を維持し得たとは、大なる違ひを生じた。

連歌の參考書は、大部分は正續『群書類從』の連歌部に收められてあるから、見るに便利である。白雲和尚の『連歌茶談』（前後、續、別、殘の諸編及び百談あり）（文政年間刊）は、連歌に關するいろ／＼な知識を集め載せてあるから、雜駁ではあるが、重寶である。『古事類苑』の連歌部も可なりよく集めてある。連歌の歴史を纏めて書いた

とある。或書に昌陸は元和年中の人とあるは誤りで、寛文延寶頃の人らしい。此の句も毎年松の發句を獻ることを詠んだので、此の事だけは隨分永く續いたやうである。昌琢が可なり優れた作家であつたことは、岡西惟中の『消閑雜記』に記してある逸話などを見ても察せられる。昌琢は昌叱の子である。

賦何木連歌（寛永三年九月八日）

山はまだ錦を袖にみやこかな　昌琢
朝霧わくる道の諸人　言富
闢の戸に夜半の秋風吹たらで　昌琢
かりねの夢をさそふ雁が音　玄陳
月影も浪にたゞよふ泊船　宗順
雨晴わたるいり江すゞしも　玄的
末そよぐ一村蘆の深みどり　寛佐

かげはいづこの松むしの聲　　　　叱
わけて入る袖も漸はださむき野に　　前
みちのゆくゑも迷ふあさぎり(定家卿色紙開百韻)巴

里村昌琢　寛永十三年歿す、年六十)幕初の頃には連歌の大宗匠は昌琢及び紹巴の子玄仍(慶長十二年歿す、年三十七)玄仲(寛永十五年歿す、年六十一)等であつた。《可笑記等》當時の連歌師は最早昔日の如く行脚や句作に骨折るなどいふこともなく、たゞ家の道を傳へるといふばかりであつたらしい。而して古歌を闇記することなどに勉強したらしく、玄的(後にいふ)は八千首、昌琢は一萬首程の古歌を記憶したといふ。《筆のすさみ》江戸城内で毎年正月吉例の連歌を興行したのは、昌琢が寛永五年に上つて「松に見ん八百萬代の春の色」と詠んだのが始めてで、それから此の吉例には必ず松を詠むことになつてゐたといふことである。《嬉遊笑覧》檀林派の祖西山宗因は、連歌を此の昌琢から學んだのである。因みにいふ古い狂句に「昌陸が松は年々新らしき」

に就いては『史徴墨寶考證』に、『西洞院時慶日記』に慶長七年四月十二日紹巴此曉遠行仕候云々とあるを引證して之を明らかにした。此の人は連歌の作も著書も可なりあるが、連歌を商賣的にやつた人らしく、宗祇や宗長の風韻は乏しかつたやうである。幸田露伴氏の『蝸牛庵夜話』に『紹巴三甫問答』を引いて、紹巴の句が剽竊や惡句が多く、識者は非難し、初心の者は褒めると謂はれたことなど語つてゐる。『なほ貞德翁記、蜀山の半日閑話も參看』紹巴には『連歌至寶抄』(木活本もある)等の編著もある

何　人　(天正七年正月)

もしほ草かく跡たにぬかすみ哉　昌　叱

まさごぢとほきはるのゆふぐれ　一本ゆふなみ　幽　齋

とけわたる汀もこほる月いでゝ　紹　巴

かへしすてたる小山田のすゑ　心　前

霜かれの葛葉にかはる秋のかせ　齋

又昌休に就いて專心刻苦して連歌を學び、昌休の子昌叱と名を齊しくするに至つた。天正十年明智の亂の際、陽光院が適ゝ二條の第に居られたが、御所に還らうとされたけれども輿が無かつた。紹巴が其の時恰も門を過ぎたので、自分の輿を奉つた。其の功で法橋に叙せられた。豐臣氏になつてから、深く秀吉の眷遇を受け、名益ゝ顯はれた。當時連歌では七名人と稱された者があつたが、紹巴は其の隨一とされた。ある時伏見の夜舟の乘合中で舟頭に佩刀を蹴られ、其の舟頭が連歌を知らぬと聞き、それなら此の紹巴を蔑にするのも無理はないとて許したといふ。《間思隨筆》京阪邊で連歌する程の者で、紹巴を見知らぬはなかつたといふわけであらう。其の邸は大炊町下長者町堀河東にあつたが、其の邊は後世迄紹巴町の名が遺つて、今もなほかく呼んでゐる。又關白秀次の處へ始終上つてゐたが、秀次が譴を受けた時、紹巴は三井寺に竄せられ、家祿資財は昌叱に遺されたが、翌年赦されて歸つた。此の間に松永貞德が訪ねて行つて、いろ〳〵物語をした事など、貞德の『戴恩記』に詳らかである。紹巴　歿年

二、連歌の沈滯と俳諧の勃興

連歌は宗祇に極まつて、それ以後は最早拓くべき道が無く、所謂行きつまりの狀態となつた。それゆゑ戰國時代以後の連歌は、前時代の風を模擬反復する外には、殆ど何の爲す所も無かつたやうである。里村家などの連歌道の本家といふやうなものが出來たのも、やがて斯道の沈滯を意味するわけである。此の行きつまりに乘じて俳諧連歌の一派が勢力を得、それが盛になると共に、漸く連歌を壓倒し、遂に之をして衰廢せしめ了つた。斯くて此の以後の連歌は文學史にさして要重な意義を認め難いことであるから、二三の人々の事を叙するに止めて置かう。

里村紹巴(慶長七年歿す、年七十九と云)は本姓は松村氏、臨江齋と號した。奈良の人である。幼にして興福寺の喝食となつたが、連歌師となつて名を揚げようと志した。偶ゝ連歌師周桂が奈良に來たので潛かに逃れて之に從ひ、京都に上つた。是より

御何（天文十二年五月）

涼しさは唯槿（あさがほ）の日かげかな　　宗牧　原本「枚」

みじかきよはの名殘ねし宿　　周桂

時鳥枕のいづち過ぎぬらん　　宗椿

しづかに雨の打そゝぐ空　　宗昆

詠めやる春の氣色は夕こそ　　宗貞

霞の外は去年の山かせ　　能親

在明の八方うすき梅が香に　　壽豪

すだれを捲けば雪ぞちり來る（伊與千句）　　永閑

宗祇―宗碩―┬周桂―紹巴（後昌休ニ従フ）―┬玄仍―┬玄的―紹尹
　　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　│　　　└玄陳
　　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　├玄仲
　　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　└玄紹（以下略ス）
　　　　　　└宗牧―昌休―┬昌叱―昌琢―┬昌程……昌陸
　　　　　　　　　　　　│　　　　　　└宗因
　　　　　　　　　　　　└兼如

で、連歌の研究には見ねばならぬ好書である。此の人の「花ぞ散かゝらんとての色香哉」は『新撰菟玖波集』の第一の發句と勅定があつたといふ。（兼載雜談）其の孫に兼壽といふがあつて、逸話が『橘庵漫筆』に出てゐる。後に慢心して天狗になつたなどある今傳はる今案は兼載の手を經たものであるともいふ。

宗碩は月村齋を號し、尾州茨江の人で、（梅菴古筆傳）紀行『さののわたり』が遺つてゐる 宗碩の弟子に周桂（肥前有馬の人）宗牧（號孤竹齋 越前一乘谷の人、天文十三年下野佐野にて歿す）の二人があつて 有名な里村紹巴は周桂門である。宗牧には『胸中抄』『闇一燈』（續群書類從）又紀行には『東國紀行』などがある。宗門牧には里村昌休があつて昌叱（號策庵、慶長八年歿す、年六十五一說七十一）は其の子である 此の邊になると、單に父祖の衣鉢を維持するといふだけで新生面を拓くなどいふことにはあまり骨を折らなかつた。予所藏の『連歌兩談抄』（永祿四年）は是等の人々中の二人の合編でもあらう『玄與日記』（群書）の著者黑齋玄與も此の頃の人で紹巴の弟子などであつたか

しくいはれたことは寧ろ宗長以上であつたらしい。「空に知るや雨をのぞみの秋の雨」（雨乞）「空に置きて見ん夜や幾世秋の月」（十五夜）など世に知られた句である。「春夢草」《續群書類從》は其の和歌集で、和歌の方でも相當の地位を占めてゐた人である。連歌は續群書中だけでも、肖柏の作は可なり多く收まつてゐる。『夢庵記』もある。

猪苗代兼載（載は栽とも書いてある。永正七年歿すと云）は初名宗春、會津の猪苗代湖畔の一小邑扉方村の庄屋の下婢の子で（白石紳書參看、傳說に據ると私生兒であつたらしい）幼にして僧となり、和歌連歌を善くしたので、人に猜まれ、奮激して京都に上り、宗祇の門に入つた。後宗祇の高弟（兼載を宗祇の師と傳へた說の誤りは、宗祇の條にいうた）となり、遂に讓を受けて花之下となつた。〇此の時の詠として「今朝開く梅は十年の匂ひ哉」といふが傳はつてゐる。《野史》武藏國古河邊の和田里で亡くなつたといふ。《日次紀事六月六日の項》其の著『園塵』《續群書類從》は此の人の連歌集で、又『兼載雜談』は本書にも屢〻引いたやうに和歌連歌に關する說話を記したもの

牡丹花肖柏（大永七年歿す。年八十五）は夢庵と號し、太政大臣源具道の後である。幼より連歌を好み八歳の折机に倚つて手習をしてゐると、或人が傍から「物をも言はで物習ふ人」と詠みかけた。肖柏やがて「くちなしの花のいろはや寫すらん」と書いて示したといふ程の神童であつた。儒も佛も嫌ひで、たゞ和歌連歌にのみ耽り、宗祇に就いて古今傳授を受け、又連歌を之に學んで、宗祇歿後に一條兼良と共に『新式今案』を定めた。攝州池田に永く卜居し、庭中には四時の花を栽ゑて、弄花軒など稱してゐたが、晩年に和泉南郡に移り、此處で歿した。嘗て「春咲かぬ花や牡丹の深見草」と詠じ、牡丹の期を初夏と定められたのは、此の句に始まると言傳へられてゐる。牡丹花と號ばれたのは是の句からだと諸書に見えてゐるが、『玉かつま』に肖柏の日記に「牡丹を名とせり。身におはぬやうに聞え侍れど、萬物の一體のことわりを思ふにや」とあるから自稱だと辨じてゐる。其の通りであらう。南泉庭前牡丹の意に依つたともいふ。（連歌百談等）此の人も趣味の高い處があつたらしく、後世から茶人などに這ま

ともあり、宗祇終焉の際にも之に從つてゐたことは宗祇の經歷の條にもいうた。宗祇の歿した時は宗長は既に五十五歲の老弟子であつた。老後も大抵京都泉谷の柴屋軒に在つて、連歌を樂しみとしてゐた。(黑川道祐、宗長居士傳)其の大永二年から歿する前年の暮までの日記『宗長手記』は、其の傳を補ひ且當時の世相をも窺ふに足る貴重な資料である。永正六年の紀行『東路のつと』等と共に『群書類從』に收めてある。『宇津山記』といふのもある。宗長は宗祇門では最も親しく最も永く師に侍いた人であらう(なほ海錄十三等參看)此の人の語として「連歌は一貫文の扇の古きより百文の扇の新らしき如くせよ」といふが傳はつてゐる。『壁草』(續群書類從)は此の人の連歌集である又連歌の付方を說いた『雨夜記』(同)がある。此の人が最も其の師宗祇の風格を傳へたので、行事もよく似てゐた。此の人と肖柏兼載とを、宗祇門下の三俊と稱して可からう。此の人には連歌の心得を書いたもの(宗長五十七個條の如き)や『吉備藥』(一名宗長口傳、但し確かなものかどうか)などの和歌に關するものもあつた。

奈良の三朝に歷事し、永正十三年薙髮して法名を堯空と號した。和歌を善くし、歌集『雪玉集』があるが、連歌は特に其の得意とした所で宗祇と共に『新撰菟玖波集』を編し、又肖柏宗碩と共に『新式今案』を出した。其の日記『實隆公記』は文明六年から天文二年迄の、凡そ六十年間の記で、名高いものであるが、其の中には連歌に關する記事も甚だ多い。(史徵墨寶考證も參看) 逍遙院實隆といへば、良基以後の搢紳の連歌師として斯道の大恩人であつたことを改めて言ふを須たぬ。專門家としても立派な人であつた。

柴屋軒宗長(享祿元年歿す、年八十一)は、一名宗春、字は久庵、駿州島田の鍛冶の子であつた。享祿五年歿す年八十五との說もあるが『宗長手記』大永六年の條に已に七十九とあるから、此の說は誤りであらう。幼時より僧院に學び、十八歲の時薙髮して僧となつた。當時應仁亂前後の事とて兵馬の間に流落すること十餘年に及んだ。嘗て一休に就いて禪を修めたこともある。宗祇には始終親炙し、嘗て山口に同遊したこ

ぬと想はれるからである。或は宗祇の俳諧百韻と傳へられたもの〻同一のものでないかとの疑ひもある。宗祇の百韻の年代や性質の明らかにならぬ間は、此の說はしばらく疑問として置かねばならぬ。）

第六章　繼承及び衰廢時代の連歌

一、宗祇の門人

宗祇は歌道及び連歌道の大家であつたゞけに、其の感化の及んだ處は隨分廣かつたことは言ふ迄もない。連歌での宗祇は卽ち俳諧での芭蕉で、後世連歌の事といへば、必ず宗祇に持つて行かねばならぬことになつた。それは一は廣く諸方を行脚して直接に人に及ぼした感化が大きかつたことが最も與かつてゐるであらう。

三條西實隆（天文六年薨ず、年八十三）は內大臣公保の次男であつたが、兄實連が早世した爲に、其の後を繼いだのである。官は正三位內大臣に至り、後土御門後柏原後

かく察すれば、必ず宗祇時代に相當の準備ぐらゐはあつたことと想はれる。宗祇を俳諧連歌の祖としよう爲には、其の『俳諧百韻』の全巻があると尚更有力になる譯であるが、それが無くても、宗祇が俳才に富んでゐたことは、明らかなのであるから、宗祇あたりから流行し出して來たと想像するのは、强ち附會にもならぬであらうか。若しさう見得ると、宗祇は正風連歌の最爛熟期の殿り即ち行き詰りの後始末と、俳諧連歌の露拂ひ、即ち一轉機の誘發との兩役を勤めたわけである。しかし後者にはそれ程確かにはいへぬこと、前述のやうな次第である。(ある書の說に俳諧百韻の祖は相阿彌が文明年中に銀閣寺で試みたのが濫觴だとある由であるが、文明は宗祇の五十歲程の年で、宗祇も此の會に加はつたとあるさうで、宗祇は當時の大宗匠でもあり、相阿彌は祖父の能阿彌が宗祇の先輩で心敬等と同輩であつたところから推すと、或は宗祇の後輩でなかつたかとも想はれるし　旁々此の說は卒かに信じ難い。何となれば五十歲の大宗匠の宗祇を列席せしめて、相阿彌が俳諧百韻を自ら創試するといふやうな事はあり得

とあるのは、何に據つたのであるか、今なほ確かな出處を明らかにし得ず、又予は其の百韻の全卷を見たこともないが、或は世に傳はつてゐるのであらう。此の百韻中の句として或る俳書に引いた句例から推すと、隨分面白いものであつたらしく想像されるが、原本を見ぬことゆゑ深くはいへぬ。

俳諧の文字は「古今集」の俳諧歌から出たものであること言ふ迄もない。而して歷代、の歌集や連歌集にも之に倣うて或は俳諧の部を立てた。しかし前にもいふ如く、實は連歌其のものが畢竟俳諧であつたのである。それがだん／＼まじめになつて、遂には俳諧の意が無くなつた爲に、別に俳諧部を立てねばならなくなつたので、卽ち其の本領に立歸らんとして來た譯である　俳諧體は杜甫の詩にも戲作ニ俳諧體一遣レ悶二首があつて、是非何處定　高枕笑ニ浮生一などいふ調子であつた。されば古今の俳諧も漢詩に倣うたものであらう。連、集中の俳諧體は『菟玖波集』の條などにも例を擧げた通りである。とにかく宗祇の次の代には、宗鑑守武といふ立派な專門の俳諧連歌師が出た處

七、宗祇と俳諧

宗祇といふ人は、正風連歌を大成した程の大家で、斯道の泰斗と仰がれ、性格も随分眞摯な人であつたらしいが、それでも連歌師だけに、洒落の才も中々であつたらしい。「藤はさがりて夕暮の空、宗長、夜さりは誰にかゝりて慰まん、宗祇」(實隆公記)「摩訶般若はらみ女の奇特哉、宗祇、一二もすてんでさんの紐とく、宗長」(俳諧奇人談等に見ゑてゐるが、貞徳の淀川に、大般若はらみの女の祈禱して、たきやう巻第三のひもとく、とあると酷似し、少々訝かしい)などは其の方面を代表したものである。『新續犬筑波集』(萬治三年季吟撰)の序に「わざことは云々、祇公の百韻」とあり、又白露(八文字舍自笑)の『誹論』に

宗祇法師云々。ある人の所望によりて俳諧の百韻をなせり。是れは俳諧連歌の鼻祖なるべき。その去嫌は皆連歌に准じて輕くとり行へり。

りにて、都の中も波の音絶えず侍れば、草の庵いとゞ住み難く侍るを、思はざるに左京兆のかぐはしき契深くして、西の國の磯の上迄をたのめ置き給へることとありき。程無く博多の海も浪治まりて、岩國山いとゞ動きなき隱れ家となりぬれば、文明十二の年水無月の初め、周防山口といふ處に下りぬ。木高き一本賴むしるしありて、陰の草木の露のなげきも茂くなりて、折々時々の遊びなど、行ことと數そふまゝに、月日移りて長月にもなりぬ。（筑紫道記）

是は發端の文であるが、文の風骨餘情が甚だしく芭蕉の『奥の細道』の發端に似てゐる。後者は或は前者から氣趣を得たのであらう。「蘆原の風のさわぎ云々」は當時の海内の紛亂をいうたので、都も關東も應仁の大亂に引續いて、此の前後は、足利氏の内訌や、細川畠山の紛爭や、古河堀越の攻防、兩上杉の衝突などが相踵いで起つてゐる。亂世の音は怨み且怒るとかいふのに、連歌師などは割合に暢氣で、大抵憤惋沈痛のひゞきを缺いてゐるのも、奇といひながら聊か物足らぬ處であらう。

かゝる嬉しき、春にあひて、いま一しほの、ことの葉を、きくが上にも我たのむ、神のおまへの、榊ばの、さしていたらん、道ををしへ　○

以上（宗祇法師集）

當時の連歌師は皆歌も相當に出來たので、宗祇も其の一人であつたのであるが、幾分か優れた處があつたやうである。たゞ其の爲人や經歷と結び付けて見ると、中々面白い處もあつた。

次ぎに紀行文を見よう。

二毛の昔より、六十の今に至る迄、愚なる心の一すぢに引かれて、入江の蘆のよしあしに迷ひ、身をうき草の浮き沈むなげき絶えずして、移り行く夢現の中にも、時に隨ふ春秋のあはれ思ひ捨て難く侍るまゝに、國々の名ある所見まほしく侍る程に、筑波山も思ひ入る障り無く、白川の關の越え難き境をも見侍りしかば、今は松浦箱崎のあらましのみ、ふかゝ侍りながら、近き世となりて、蘆原の風のさわぎ頻

たが慕ふ今一聲をほとゝぎす、思ひかくしてこゝに鳴くらん

人の世の淵瀨にぞ思ふいつの秋、わたり初めけん天の川浪

小笹原ひろはゞ袖にはかなさも、忘るばかりの玉霰かな

人知れぬきはゝ思ひも中空に、かゝらで消えよ夕ぐれの雲

うつし置く我が影ながら世の憂さを、しらぬ翁ぞうらやまれぬる　（自影の讃）

常緣に奉りし長歌

久方の、あまのうき橋、すゑとほく、たえせぬ世々の、ことわざは、いづれの道も、かはらねど、猶敷島の、大和てふ、言のはのみぞ、たぐひ無き、かゝるあやしの、身にしあれば、雲ゐにみゆる、ふじのねの、おもふたよりも、なかりしを、そこひしられぬ、わだつ海の、深きめぐみの、白露を、我かけそめし、道しばの、かれずもおもひ、なげきつる、年の數さへ、すでにはや、五とせ六とせ、過ぎぬれば、猶いたづらに、そはりゆく、老木の松の、おもほえず

何　人（長享二年正月）

雪ながらやまもとかすむ夕かな　宗　祇
　行水遠く梅にほふさと　肖　柏
河かぜに一むらやなぎ春見えて　宗　長
　舟さす音もしきるあけがた　祇
月やなほきり渡る夜に殘るらん　柏
　しもおく野はら秋はくれけり　長
鳴く虫のこゝろともなく草かれて　祇
　かきねをとへばあらはなるみち　柏

（水無瀨三吟百韻）

次に長歌及び短歌を擧げて見よう。

　さそふとも人し訪はずば梅が香を、鳴く音にしめよ宿の鶯

舟見ねて霧も迫門越す嵐哉

戸ざしせぬ關に關守る紅葉かな

花ならぬ眞砂も菊も濱路哉

染川は時雨れし山の雫かな

夕浪に返るも秋や西の海

松の葉に同じ世をふる時雨哉

いつ聞かんあしやの月の夕しぐれ

木枯しを菊に忘るゝ山路かな

以上（筑紫道記）

別段特色というては無く、宗砌心敬等の句と混ぜれば、孰れが誰のと到底見分けがつくまい。但し一味の寂寥の氣のみは、俳諧の正風と遙かに脈理を相通じてゐる處がある。次に長連歌を擧げて見よう。

山の端に霞むや名殘庭の雪

白雲のたてるや何處花ざかり

更けて見ぬ光も涼し夕月夜

逢ふ夜や今年二つの天つ星

明けばまたいつかは今宵秋の月

氷より引く眉ならし瀧の糸

世にふるは更に時雨の宿り哉

以上《新撰菟玖波集》

一年の月を曇らす今宵哉

冬はなほ奈良の習で朝茶哉

松風や今日も神世の秋の聲

以上《俳家奇人談》等

雲無き月の曉の空
さよまくら時雨も風も夢さめて
こなたかなたの松風の聲
かたはらの一むら薄枯るゝ野に

以上《新撰菟玖波集》

右は附合の作例であるが、宗祇の作すべて括めてを見ると、

- 律文
  - 連歌
    - 長篇
    - 前句付
  - 發句
  - 和歌
    - 短歌
    - 長歌
- 散文
  - 論文
  - 紀行文
  - 雜文

に分つことが出來る。今是等の一々の例を擧げて見ようと思ふが、其の内附合は前記の通りである。長連歌は後に出す。又論文の例は、前に引いたもので一斑は判るから略して置く。發句を少し擧げて見よう。

人の身や生るゝたびにうからまし
　花にて知りぬ世々の春かぜ
なげきし夢のさむるはかなさ
花に人風も吹きあへずちりはてゝ
　ゆふ露すゞし道のべの里
あふち吹くそこもの葉山蟬鳴きて
　けしきばかりの夕立の空
しみづせく岩根の月はなづさへて
　いつしかさびし奈良の古里
柳散る佐保の川風けさふきて
　おのづからなる理りを見よ
やどすこもみづは思はぬ月すみて

師の撰である。宗砌心敬専順宗祇兼載肖柏等の成熟期の連句を集めたもので、例は特に擧げる迄も無く、前後に掲げた是等の人々の句例を見れば十分であらう。(此の書は續々群書類從歌文部にも收めてあるが誤脱が少なくない)板本も坊間によくあつて、割合に得易い。體裁は、「菟玖波集」と略ぼ同一で、連句はすべて二句宛を抜いて出してあるのが物足らぬ。内容が『菟玖波集』に比して、ふざけ氣味洒落氣味のものが殆ど全く無くなつたことは、既述の通りである。是の集でも、或者から入集料でも取つたものか、此の集を撰集の時櫻井永仙(基輔)の連歌が入集しなかつたので、戯れて云ふ、遙見筑波錢便八、不レ論二上手與二下手一。足無くて登りかねぬるつくば山、和歌の道には達者なれども。と。(嬉遊笑覧引和語抄)みだりに臆測すべきでもないが、花之下となるとて人の苗字を借りたり、傳授事に奔走したりした人ゆゑ、斯様な事にも相當にぬかりのなかつた人かも知れぬ。鬚に始終香を炷きしめるなども、捨身風雲の乞食詩人であるべき境涯としては、可なりなしやれ方である。

寸判らぬ程に、際立つた特色も無かつた。但し通じて見わたした所では、宗祇は文學上の常識も豊かで、歌でも文章でも立派にやれるし、人物も温厚で、世渡の祕訣も心得てゐたやうであるし、第一身體も達者で長壽はするし、斯の道を甚く好みもしたし、といふやうな有利な條件が相依つて、彼を成功せしめたのであらう。芭蕉のやうな圖抜けた優れた處があつたとは何の作を見ても認められぬ。彼は秀でた才人であつたに違ひ無いが、飛離れた長處は何も無かつたやうである。其の才氣の可なりにまはつたことは、其の俳諧體の附合を見ても判る。（例は後にも擧げる）又老後には、通常の諸體には飽き果てたので、人が聞いても解し兼ねるやうな難句を附けた處が、門人達も其の眞似をして、險怪な句を作つたさいふ。（兼載雜談）是等でも彼が才氣の進んだ人であることが想はれる。名高い「秋の月名もことわりの光哉」などは、平凡ながら、亦流石に捨て難い趣もある。

『新撰菟玖波集』は『菟玖波集』の後凡そ百四十年の明應四年になつたもので、宗祇法

「皆さびしげなる手ぶりにて、少しも俳調にかなはず云々。俳諧歌の正風は俳調〇ふざけた風）なるをいふべきにて、然らぬ體は邪事になんありける」と云うたのは、俳諧の名にのみ拘はつて、物事の自然の歴史的發展を無視した見解に過ぎぬが、事實は宗鑑守武時代のふざけた體が、芭蕉に至つてまじめなものになつたのであることは、與淸の見た通りである。

五十韻百韻とつゞけることも、既に鎌倉時代からあつた筈であるが、今遺つてゐるものは無いやうで、又事實完全に滿尾したのは少なかつたのであらう。宗祇時代には百韻五百韻千句など迄行はれ、大部分は今に遺つてゐるから、容易に見ることが出來る。

六、宗祇の作風と新撰菟玖波集

今から見ると、宗祇の作が他の同時の諸家に比べて、何程優れた處があつたかは一

(○前略)かく連歌の體たゞしくなりにしかば(○無規律から有規律になつたといふ(俳諧歌は別物になりたるなり。されば文和の菟玖波集(○良基の)には俳諧體も數多こもりたれど、明應の新撰(○宗祇の)は、心して選ばれけん大かた正風體(○まじめな體)の連歌のみにて、俳諧體(○ふざけた體なるはいと〳〵稀なり。さて山崎の宗鑑が犬筑波など俳諧連歌ばかり採り集めたる集も出來しは、二流(○まじめな流とふざけた流)に分れしが故にぞありける。これよりして、季吟の新續犬筑波のたぐひ、多くの集どもゝ出來て、遂には俳諧歌のみを詠める徒世に數多になり行きつゝ、その本意を失ひ果てしものにこそありけれ。

と可なりによく調べて論じてゐる。與清は只管和歌の方の事にばかり拘泥して俳諧を論じたので、僻説が多い、が此の條の宗祇の撰が、心してまじめなものを選び、後には正風體と俳諧體とが分れて、一長一消し、遂に俳諧體が正風體を壓倒し、所謂「本意を失ひ果て」たと說いた處は、よく事實に當つてゐる。なほ同書に芭蕉を評して、

春の夜や夢路も花に匂ふらん　宗砌

かすかに殘る春の山路

花や知る去年も我こそ尋ねつれ　專順

の類で、句意は平淺凡近、和歌を模倣したやうな感興に乏しい句共であるが、附方は正しく意附になつてゐる。宗祇の『吾妻問答』『老のすさび』の二書は全篇此の意を力說したものである。其の「心を本とせよ」「只心のすぢめ肝心なり」「有心幽玄の姿」など云うてゐるのは、皆此の意に外ならぬ。當時の連歌は既に茲迄達してゐたのであるが、かく明白に議論としても主張した處は、宗祇が實に代表的であつた。此の點では恰も俳諧の鬼貫に相當してゐる。俳諧で正風體を最も明白に熱心に主張したのは鬼貫で、芭蕉は是を實現したが、さ樣な議論はあまりしなかつた。宗祇は議論も實現もした代りに、實現の方は芭蕉程の有力な地位に居なかつたわけである。なほ又連歌が宗祇頃に極めてまじめなものになつたに就いては、高田與淸の『俳諧歌論』にも、

近江と逢ふ身とをかけてあしらうたのである）源氏物語に近江の君とてあやしの姫君ありけり。此句を思ふに、大公望が堅田の浦に住みて近江の君と云ふ女に仕へたるにてこそ侍れ。以外（もってのほか）拙くや侍らん云々。此比（○今時）つかうまつらば、

愚かにて世に出でぬ身を如何にせん

などや侍らん。

と云うてゐる。宗祇の「近江なる」の句の解し方は如何かと思はれるが、其の意は辭附（こゝはづけ）を排して意附を主張してゐることと明らかである。宗祇の付句は不才明主棄とか、聖朝無㆓棄物㆒老病既爲㆑翁とかいふやうな意である。又宗祇が模範の付句として擧げた句例は、

梅が香清き雪の下水

月に鳴く谷の鶯今朝出でゝ　　能阿

手枕わたる窓の山風

世は人の心に亂れ治りて

など付くべし。一句の子細無くや。又

武士の心に思へ大和歌

などや付け侍らん。一句は宜しからずとも前（○前句）にはよく付き侍るべきにや」と云うてゐる。此の「心更に確かならず」とは、縁語で二句を繫ぎ合せたばかりで、句意の聯絡無く、且各句に纏まつた意味の無いことをいふのである。宗祇の試みたやうに付ければ意附（こゝろづけ）となる譯である。

かしこき人ぞ君に仕ふる

近江なる堅田の浦に釣垂れて

宗祇は此の付方を評して、

賢人に釣を付けるは、大公望などの事なり。（○これだけならば意附となるわけであるが）此付けやうは君にあふみゝ付けたり。（○即ち君にさある前句の詞尻を捉へ、

るにや。(〇中略)古風の有心幽玄の姿を慕ひ、然も一句正しからぬことなどを除きて、直旨を守り侍りし也。(下略)

宗祇の歴史的地位は是で明らかである。宗祇の繼承したのは宗砌で、宗砌の風は心敬專順等の正風中でも、代表的のものであつた。宗祇とて宗砌の風に多少物足らず感じた處もあつたであらうが、何事も傳統を重んじ、新意を出すことを一種の罪惡の如くに心得た時代の事ゆゑ、右のやうに宗砌を斟酌無く手本としたやうに云うたのも無理はない。なほ宗祇が古句を評した例二三を引いて見よう。

弓矢の外も又文の道

桑よもぎ繁れる蔭をかき分けて

是は宗祇の所謂「中古風」で、詞の上に頓才を弄したに過ぎぬものであるが、宗祇は之を評して「此の付けやうは、桑の弓蓬の矢といふことを取り、文に書き分けてと付け侍り。寄合ばかりにて心更に確かならず。是を當時(〇今時)付け侍らば、

可レ申哉。句の樣も長高く有心(○まじめの意)にして歌に其心ひさしく、殊勝の事多く侍り。(○但し此の頃のはなほ狂歌じみたものが多つた)然はあれど、歌の繼歌などのやうにいひかけて、一句に其理無きも侍りけるにや(○即ち各句に纒まつた意味無く、たゞ詞の緣に依つて、前句から付句に一首の歌のやうにいひかけたやうなものをいふ)侍公(○救濟)亡せて後、周阿一人の風(○即ちくだけた風)を殘して天下に是を便りとして學びけるに、救濟(○やゝまじめな風)に心不及や有りけむ、一句を嗜む心ばかり(○言ひまはしの巧みをのみ欲すること)にて、前句に大樣(○前句に對して付意の放縱なこと)なる句侍るなるべし。され共周阿が句には猶以て前句にも能く付き侍りけめ共、有心の樣など後れけるを、其の後好士周阿にも又難レ及ければ次第に心劣り來て、世上皆侍公の心に少しも似たること無し。(○中略)かやうの頃を中古と申侍りける也。當世と申侍るは、宗砌法師此道の明鏡にて、上古中古をよく見明らめて、救濟周阿が風骨をうつして、中古の風情を捨てけ

みた趣が極めて微かではあるが殘つてゐることを感知するであらう。意味はまじめでも語氣や口調に幾分のふざけ氣味を有つたものが少なくなかつた。併し大體に於いて連歌は宗砌心敬時代に既に正風體に趨いてゐたのである。此等の事に就き、宗祇は其の著『吾妻問答』(前出)に說いてゐる。

昔は連歌共不申哉侍りけむ。只上句をいひかくれば下句をつけ、下句を申せば上句を付けゝるなるべし。業平齋宮にあひ奉りし時、かち人の渡れどぬれぬ緣あればといひ出させ給ひけるに、又あふ阪の關は越ゐなむと、つい松の炭にて書きけるとなむ。是を筑波集に入れ侍り。拾遺集にも連歌とて入れ侍りぬれば、上古とはさゝうの時をこそ申侍るべけれ。此道の再興は故二條攝政殿(〇良基)好みすかせ給ひて、好士を選び玉ひしに、その頃の達者、善阿順覺救濟信照周阿良阿など侍る也。當時も千句などいふこと侍れども、式目を定め、法度を正しくせられて、末代に其の旨を守るは、彼の御時のことなれば、此折節(〇是れより以前)を指して上古とは

命で田邊城の圍みを解かれたことは人のよく知る所である。

古今傳授
常縁—宗祇
- 實隆—公條—實澄
  - 公明—實條
  - 幽齋
    - 烏丸廣
    - 中院通勝
    - 木下長嘯子
    - 松永貞德
- 宗長
- 素純（以下略ス）
- 肖柏等
  - 林宗二
  - 宗珀

五、宗祇の連歌論

連歌がまじめなものになつたのは、前代の宗砌心敬の頃であつたことは、既述の通りである。宗祇は單に之を繼承したに過ぎぬと謂へば謂へるのであるが、とにかく之を大成して、連歌といへば必ず宗祇を聯想せしめる程の地位を造り上げたのであるから、先づは此の人を正風體の連歌の完成者と見ても可い。宗祇には別に狂體の連歌もあつたが、通常のものは、徹頭徹尾まじめで、全く和歌と同じい趣味のものであつた。宗祇や宗長のものを讀んで後宗砌や心敬のものを讀むと、まだ何處やらに狂歌じ

らしいことに就き松屋筆記等參看）三翁の傳とかゞ中心になつてゐて一向につまらぬものである。伊勢貞丈の『古今三鳥三木考』伴信友の『比古婆衣』其の他『古今集打聽』『和訓栞』の類の中で國學者の解も多いから、其を一讀すれば傳授の埓も無いものであることが直に判る。宗祇が常縁から傳へた祕説を記したと稱する寫本を二三種見たが內容がいづれも少しづゝ異うてゐて、どれが眞物であるか判らなかつた。が、要するに陰陽だの和合だの、平等だの同塵だのと、歌意とは直接關係の無い心學めいたことを並べたものに過ぎぬ。宗祇の『古今集』を解釋した書では『古今和歌集抄』（六卷萬治二年刊）があるが、宗祇の自著かどうか疑はしい處もある。而して所謂祕事口傳とは亦別なものであるは言ふ迄もない。解釋は殆ど何の參考にもならぬ程に役に立たぬものである。

なほ此の傳授は、肖拍の堺傳授、林宗二の饅頭屋の奈良傳授、實隆から數傳して細川幽齋に傳はつた二條家傳授に分れたといふ。幽齋が此の傳授を繼いでゐた爲に、勅

愚老等不レ存知間、人に敎ふるに及び侍らず」など云うてゐる。常緣の傳授も恐くは此の類の祕事々似たもので、本家に對抗する爲にやり出したものらしい。ともあれ常緣も中々の人物であつたらしく、敵に降服を勸められ、歌を贈つて拒絕したこともあると云ふ。（白石紳書）

何にしろ和歌の經典たる祕事を傳へるといふのであるから、宗祇などが履を倒まにして之を授かつたのはもつともである。此の後、後奈良天皇の如き至尊さへ實隆から傳授を受けたといふ。（御湯殿記）宗祇が是を受けたことは、『宗祇法師集』『宗祇終焉記』にも『常緣集』にも書かれてゐるから、確かである。終焉記に、宗祇臨終の際素純（名、胤氏、常緣の甥）に附屬したとあり、『宗長手記』には、是を傳へたのは自分や（？）實隆のみであると記してゐる。祕傳とあるからは、容易に人には授けなかつたのであらう。

此の傳授の內容は、所謂三鳥三木の傳とか、（是等の或るものは常緣以前よりあつた

だとの說もある（國歌八論等）吉田令世の『和歌勅撰考』に、古今秘事は冷泉持爲から之を授かつたといふ一條兼良の頃からあつたが、古今傳授の名稱は常縁から出た者らしく、常縁が祖先以來傳へた抄物などの中に、古今もあつたのを取出して傳授したのであらうと云うてゐるが、是も臆測に過ぎぬ。一體和歌の秘事口傳は、旣に定家爲家爲氏爲相等の頃から漸く行はれたもので、爲氏爲相は二條冷泉の祖として、歌道の本家となり、秘事口傳で家業に重みを添へたこともだん〴〵あるのであるから、古今傳授の事はともかくも、是と同趣の傳授事は盛に行うたものらしい。和歌に限らず、當時は秘事口傳でなければ夜も日も明けなかつたのである。『落書露顯』に了俊が或人から三代集萬葉などの不審を質されて之に對へた處、二條派の兼好の弟子命松丸といふ者が傍に在つて、斯かる秘事を無造作に人に敎へるのは勿體無いと云うたと記してゐる。又『袖中抄』や『顯注密勘』などにも、古今の秘事を二三個條の外は皆洩らされたことを說き、「かの家（○冷泉家）になほも秘事とて被レ殘たる事共は、門弟共なれども、

意義を加へるには及ぶまい。

古今傳授は連歌には關係が無いが、宗祇が文學者としての地位を占めるに重大な關係があつたのであるから一言して置かう。古今傳授とは、當時の和歌の經典とされてゐた『古今集』中の難かしい個處の祕傳を授けることで、言傳へでは、定家の子爲家が東常縁八世の祖胤行に授けたのが始まりであるといふが、確かでない。或は云ふ、常縁は其の師堯孝（常光院、和歌所開闔、有名な頓阿の曾孫）から受けたと。併し『中原康富記』に堯孝は子が無くて養子をしたが、歌道を繼ぐ者が無く、女子に口傳を授けた由ある（玉がつま）から、常縁が堯孝から受けたといふのも確かとも謂へぬ。但し又常縁の『東野州聞書』には、堯孝に歌道を受け、又「此の道の奧儀は古今集にこそ侍らめ」など聽いたとある。堯孝が古今を神聖視したことは、其の日記に　古今集披覽序春部上於ニ神前一讀レ之勤行及ニ數刻一終夜不ニ一睡一などあるのでも察せられる　是等に依れば、堯孝から受けたといふのも、萬更な虛傳でもないかも知れぬ。或は常縁の僞作

兒童に對しての敎訓を長歌で詠んだものである。此の外和歌の詞とか、連歌の語とかを釋したり用法を示したりしたものも少々あるが、果していづれも宗祇の自著であるかどうか、疑はしいのもある。其の他の斷片的著書は一々擧げるに勝へぬ。

四、宗祇と古今傳授

連歌師としての宗祇の地位は、正風體を集大成した處に在るが、其の他にも當時では可なりの地位を占めてゐたのである。第一に中世の國文學の代表者の一人として、國文を註釋した多くの著書を遺した。第二に中世歌學の代表者として、有名なる古今傳授を受授し、歌書を註釋し、歌道を說き、又和歌を作つた。但し是等は連歌師としての爲事に比べると、其の意義は甚だ淺く、或は無意義に近く、多く言ふに値せぬ。したゞ自ら和歌を作つたといふことが、其の連歌師としての力量や品位を多少助けたことであらうが、是とて當時の連歌師は殆ど悉く歌人であつたことから想ふと、太した

一源氏物語種玉庵抄等

一伊勢物語山口記（一名伊勢物語宗祇抄）

後者は延徳年中周防山口で人々の請に依つて講じた稿本。寛文頃の板本もある。

源氏物語註釋系統

（上略）奥入追加（定家）花鳥餘情等（兼良）—
〇不審抄出、〇帚木別註、〇種玉庵抄（並ニ宗祇）—
- 弄花抄（實隆）
- 一葉抄（肖柏）
- 蒲紫（肖柏）
- 宗碩抄（宗碩）
- 休聞抄（昌休）

岷江入楚、湖月抄等に至つて大成

伊勢物語註釋系統

髄腦（滋春？）
古註（不明）、知顯抄（經信？）—愚見抄（兼良）—
〇宗祇抄（惟清抄　宣賢）、肖聞抄（肖柏）—闕疑抄（幽齋）—
拾穗抄等を經、勢語臆斷に至りて面目を改む
（藤岡博士日本評論史參看）

一見教訓《群書》

（是等の書は多く續群書類從に收めてある）

からうが、後者は卷首に宗祇述作とあるが、紹巴の跋に作者不詳とあつて、自著ではなささうにも思はれる。

初學抄　一卷　寫本

發句の作法を說いたもので、宗祇の著と稱する此の類の寫本も三四見た。中には假託と思はれるものもあつた。

一萬葉集註抄書（一名宗祇抄）五卷　寫本

例の中世歌學の萬葉の解釋の一代表書で、參考になる部分は至つて稀である。

一古今和歌集抄　六卷　萬治二年刊

一九代抄　五卷　寫本

前者は古今集の註で、例の祕事口傳とは別なものである。後者は後撰から續後拾遺迄の九集中から千五百首を選出して註釋したものである。是等も歌學としても古書の註解としても役に立つ處の少ないは言ふ迄もない。

で仕揚げたやうなものである。

一吾妻問答（別名隅田川）（群書）

一老のすさび　（同）

以上二書共宗祇の連歌論を見るには絶好の書である。

一老葉　（續群書）

一下草　（同）

一萱草　（同）

三書共宗祇作の連歌を集めたものである。なほ又『胸中抄』（續群書）（宗祇の附句を註したもの）なども參考になる。

一袖下　（續群書）

一白髮集　（同）

共に連歌の心得を說いたもので、前者は常德院殿進上とあつて宗祇の著書に紛れな

は繪人中本と小本との二種あつた。右の外『廻國雜記』が或は宗祇の名で板木になつてゐるが、是は准后道興の著であることゝ『群書一覽』等に辨じてある通りである。又『東路のつと』を宗祇の著と記したものも往々見受けるが、是は門人宗長の著で、宗祇歿後の永正年間に成つたものである。其の他にも宗祇の名に附會した書を一二見たことがあるが、其の名は忘れた。

一新撰菟玖波集　二十卷　《續々群書類從》

一竹林抄十卷　《續群書》

前者は別に紹介してある。後者は宗砌心敬等七人（竹林と名けた所以）の連歌を宗祇が集めたもので、此の序は一條兼良といふことで、それに依れば、是より先『新玉集』と題した連歌集二十卷を選んで置いたのが、應仁の亂に亡せたので、更に『續菟玖波集』を選ぶ意があつた。などあるから、此の書は或は右續集の準備のつもりで集めでもしたものか。序にもさうも思はれるやうな文句がある。新撰は卽ち兼良の意を紹い

を集めてゐる。連歌師の發句のみを集めた『發句集』十巻（木活本もあり寛文の整板本もある）も廣く網羅してある。

一宗祇法師前句付　寫本

の類の寫本で傳はつてゐるものもいろ〳〵ある。又連歌の附合の一巻々々のものは、是も寫本で多く傳はつてゐるが、『續群書類從』連歌部にも數巻入つてゐるから、例としてはそれだけ見たら十分であらう。中にも「河越千句」や「熊野千句」は有名なものである。獨吟のものも多い。『老葉』や『下草』中のものは皆それであらう。

一筑紫道記　《群書》

一白河紀行　《續群書類從》

此の二書のことは既にいうたから略して置く。

一名所方角抄

此の書は僞作説もあつて、いかさま多少疑はしい處がある。板本は、予の見たもの

一　宗祇終焉記（群書類從）

宗祇の著ではなく、門人宗長の記したものであるが、宗祇の終焉前後の行狀を知るには此の上無い好書である。後の俳人の終焉記の模範となつたものであらう。

一　宗祇東國旅日記

一　宗祇諸國物語

是等も自著ではないが其の傳記に關係のあるものである。但し終焉記の外は參考にはならぬ架空譚であること前にもいうた通りである。二書共正德頃の刊本がある。其の他の參考書としては前述の傳の條に引いたものなどがある。

一　宗祇法師和歌集（群書）

經歷の參考にもなる。

一　宗祇發句集　寫本

宗祇の發句は、後にいふ『老葉』等にも散見してゐるが、此の發句集は可なり多く

ども、一歳連歌師の宗祇法師諸國を執(修)行し給ふ時、緣は知らぬものなり、東海道の岡部の宿に相宿、同じ蚊帳に寝たといふ昔物語をかしく云々」とあるのがそれで、諺に依つての作り譚であらう。『骨董集』上編中に『崑山集』(慶安四年編、明暦二年刻)の「おなじ蚊帳に寢しは則ちけふ義哉、貞德。是は世の諺に、實なく餘情の事を宗祇の蚊帳といふ事あれば、それを故事に用ひはべる」とあるを引いてゐる。是は一轉して根も無い高言をする者の意に用ゐたものと見ゆる。又『柳亭筆記』三には此の諺に就いて多くの書を引證してゐる。是は「見ぬをいふ」との意にしてある。いづれにしても同じやうな意味になるのであるが、宗祇の盛名は此の諺からも推し得る。

宗祇の逸話行事等を蒐め記したものに『宗祇諸國物語』『宗祇東國旅日記』の類が數種あるが、いづれも大率本傳を補ふに足らぬ架空譚を以て充たされてゐる。

三、宗祇と著書

宗祇は長壽で且精力の優れた人であつたと見ゆ、著書も中々多く遺してゐる。

篙手など止めるが可い。一生食ふには困るまいと。後其の色紙を、或は知人に與へなどして、やがて五十枚を皆にした。常緣の蓄へた五十枚は其の後火災で亡くなつたが、宗祇が人々に與へた分は、世間に散らばつて遺つたと、此の事は『野史』に『兵家茶話』を引いて記してある。『老人雜話』に、宗祇の弟子の宗長が伊勢の國司某から、色紙百枚を押した屏風半雙を貰ひ受けたが、後國司の家に殘つた半雙は火けて亡くなつたとの話が出てゐる。此の二話は、互によく似てゐて、一つの話から二つが分出したものでないかと想はしめる。

宗祇は連歌での大宗匠として、其の名は雙ぶ者無く、且足跡も廣かつたので「宗祇の蚊帳」といふ諺さへ出た。是は風流の道など口にする者が、自分は宗祇と一つ蚊帳に寢たと誇說することから出た諺で、何事につけても、其の道の大家に親炙したことを誇りがに言ふ者を嘲つた意の語である。田舍の縣會議員などが、大隈さんと食卓を共にしたと言ふのと同じ心持から出てゐる。『西鶴名殘之友』五に「我は賤しき身なれ

ぬ主義であるが、二三を記して置かう。

宗祇常に美鬚を貯へ香を以て薫じた。曰ふには、吾は鬚を愛むのではなく、香氣の常に鬚に在るを愛むのであると。後世「宗祇の鬚」とて、俳句などに多く詠まれてゐる。山口素堂の句に「鬚宗祇地に蓮ある心哉」は萬葉の例の「勝間田の池は我知る蓮無し」に依つたのであるが、とにかく宗祇の鬚は餘程立派であつたといふ。

或書に、宗祇がある處で賊に遭ひ、衣類を剝がれた上に、拂子の料に賣るからとて鬚を望まれ「我が爲に拂子ばかりは許せかし、假の此世を棄て果つるまで」ゝ詠んで免かれたさある。歌が拙くて且訝かしい節もあるから、眞僞は如何かと思ふ。

宗祇が常緣から古今傳授を受けた當時、常緣は小倉山莊色紙（定家色紙か）百枚を藏してゐた。宗祇に傳授の後、其の道を慕ふことの深切なるに感じ、其の半を割いて頒ち與へた。宗祇は常緣に辭し別れ、西上の途に、ある渡津を濟るゝて、色紙一枚を取り出して篙手に與へて曰ふには、是は天下の奇寶であるから、爾は之を金に換へて

八十間許、寛文雜記に屋敷跡に又太夫といふもの住居すとあり。今は其家も絶ゑて田地となれり」とある（寛文雜記以下は名所圖會も同じい）『玉がつま』二一に「宗祇法師が生れし家の跡とて、紀の國在田郡藤並莊下津野村の民どものやどころの内に五　間に四十間ばかりの地ありと彼の國の事ども記せる物に記したり」とあるをも參考すべきである。其の家の跡といふて、舊と一段四畝程の空地があつたが、明治の初年に茶畠となり、今は蜜柑畑となつて、纔に一の古井のみが遺つてゐるといふ。其の地に接して勝福寺と呼んだ寺の跡があつて、其處には兩三基の石塔が殘つてゐるのが、宗祇の家の墓だと言傳へられてゐるといふ。紀州には此の外日高郡道成寺附近、海草郡、牟婁郡等にも宗祇の庵跡といふのがあり、田邊町には宗祇庵とて其の住庵の後だと言傳へられたものが、今も遺つてゐる。紀州は鄕里のことでもあり、且長壽の人であつたから、茲にも處々に庵居したことがあつたのであらう。

宗祇の逸話も可なりいろ／＼傳へられてゐる。予は逸話にあまり多くの價値を置か

病を獲て相模國に留まり、文龜二年七月晦日遂に湯本の客舍で亡くなつた。時に年八十二であつた。相模と武藏の堺の桃園山定輪寺に葬つた。宗祇の辭世（或は云、此の歌は辭世ではなくて畫像の讃であるぞ。俊成卿にも類歌がある）

はかなしや鶴の林の煙にも立後れぬる身こそうらむれ

此の前後の事は、前記の終焉記に詳かである。宗長等の哀悼の連歌、

消ねし夜の朝露分くる山路哉　宗長
名殘過ぎうき宿の秋風　宗碩
小萩原旅寢の月に散るを見て　同
鹿の鳴く音も袖ぬらせとや　長
物ごとにあはれは暮を歸る野に　同
雲をかたみの春ぞ仇なる　碩

宗祇の誕生地は『紀伊續風土記』に「宗祇屋敷跡、一つ松の內吉備野にあり。周百

花のもとのたはぶれとなれり」とあるに本づいたのであらうとあるが、さうらしい。此の事は宣長以前にも云うた者もある。宗祇は又嘗て卜部氏に就いて神書を學んだと『國史實錄』にあるが、此の書の記事は心得難いことが多い。

宗祇は前の西行、後の芭蕉と共に、我邦詩人中の三大旅行家と謂はれる程な旅行癖の人であつた。曾て奥州に遊んだといふは、其の歌集に白河の關を越えた歌があり、又應仁二年（四十八歲）の『白河紀行』（續群書）もあるので確かである。周南の傳に東登二金華山之巓一とあるは、何か據所があつたのであらう。文明十二年（六十歲）三月には武州隅田川の遊び、有名な『吾妻問答』（群書類從）を遺した。同年六月には九州を巡遊して『筑紫道記』（群書類從）があつた。又延德中には周防の山口に遊び『伊勢物語山口記』（刊本がある）を得た。晩年には越後に遊び、凡そ二年間程滯在した。此の事は『宗祇法師集』（群書類從）や宗長の『宗祇終焉記』（同）等に依つて知られる。此の越後滯在の間に、宗長も駿河國から尋ねて下り、共に信濃から關東に出たが、宗祇はたま〳〵

なる。又『山城名勝志』十の葛野郡の條に「宗祇法師庵、礦礫集云、宗祇法師法輪寺、嵯峨）のかたはらに庵を結びて一年あまり住みけるに、或時野州常緣とぶらひけり云々」とある。京都での永住地は、右の東山の種玉庵であつたらしい。『雍州府志』に、一說に種玉庵は大宮一條の園池邊にあつたとあるが、東山といふが實らしく想はれる。紀州は鄉里であるといふので、遺蹟といふのも多く、庵趾傳へられた地も數個處あるが、確かな處は判らぬ。なほ此の事及び歿地に就いては後にもいふ。宗祇の別號を、見外齋、不審齋などした書もあるが、庵の號か、又確か否か、よく判らぬ。

有名な古今傳授を當時伊豆國三島に居た東常緣を訪ねて受けたのは文明三年で、宗祇が五十二歲の時である。此の事も後で別にいふ。宗祇の名漸く高く、遂に天聽に達し、花の下（下とも本とも書くが、下が本義らしい）の稱號を勅許になつたと諸書に記してある。連歌の宗匠を花之下と稱することは、宗祇から始まつたのであるといふ。本居宣長の說に花之本の號は、『菟玖波集』の序に「久しく雲の上のもてあそび、

であつたゝすれば、僧侶にでもならぬでは學問もできず名も成し得ぬといふやうな事情から先づ佛門に入り、學問したのが緣で、遂に連歌道に入ることになつたのでもあらうか。ともかくも今の處予は紀州出身說の方になほ多く信をおいてゐる。

宗祇の遺蹟といふのも、隨分處々方々にある。嘗て洛東(或は云叡山)に草庵を結んで種玉庵と號したが、突黔まずして去つたとある。(周南文集の傳にあるが、何に據つたのか)此の事は『山城名勝志』などにも出てゐるが、其の處を知らずとしてある。前出の或書《玉かつま》に結二草庵於岩倉之長谷一とあるが、是も實かどうか。茲は東山ではない。宗祇歿後其の徒宗長が種玉庵跡に三年間居たなど記したものもある。《紀伊國名所圖會》或は云、種玉庵は圓山安養寺にあつたものらしいと。《同》此の寺は慈鎭和尙の再興で、慈鎭は連歌にも關係のあつた人ゆゑ、宗祇が居たといふのも或は實かも知れぬ。寺は西行に關係の雙林寺の附近にある。『下草』に「西行法師宮城野の萩を慈鎭和尙に奉りし其種今に殘り侍るを草庵に移し置き侍りしに云々」とあるのも參考に

に傳へた所に却つて眞實があるのではないか。而して飯尾氏で江州產だなどあることが却つて實は賤民出であつたことを間接に證據立てるものでないとも限らぬ。『梅菴古筆傳』には宗祇の氏も姓も記してなく、却て名も低い常房に飯尾氏三善姓を記してあるなども聊か不釣合に思はれる。

なほ聊か餘談ながら附加へて置く。「七つ下り」「骨足らず」は今もいふさうで、是に就いていろ／＼な說があるさうであるが、ともかくも藤並村一帶の住民は何處から か移住して來たものらしい。此の邊には現今でも今來と呼んでゐる地もあるさうで、王仁の食邑もあつたとかいふ。宗祇が其の今來の高麗人か何かの末裔であつたか、或は一說の如く「淡路のデコ屋」の移住者の子孫であつたか明かでないが、古へは賤民の業であつた伎樂師（卽ち現今の太々神樂師の類）子で、後世まで隣邑に齒されなかつた村の出であつたことは、事實らしく想はれる。在田郡からは是より先高僧明惠上人を出し、隣郡日高からは是より後名緇德本上人を出してゐる。宗祇が特に賤民の出

同姓であつたとも傳へられ、紀州の著姓湯川氏を假稱したとも傳へられたところを想ふと、飯尾氏も湯川氏同樣に堂上へ出入の體面上からの一時の假稱であり、飯尾氏を假りた關係上、表向き江州人といふことになつてゐたのでもないかと疑はざるを得ぬ。紀州の方では、よし附會も加はつてゐるとしても、とにかく生れた村も屋敷跡といふのも、宗祇一家の墓と傳へらるゝものまでも遺つてゐるのに、都に近い江州でありながら、世に聞ねて何も傳はつてゐぬといふのは不思議な限りではあるまいか。産ニ江東地ニが略ぼ同時代で情實を知つてゐる筈の人の而も像贊であるといふことに、却つて江州産をどうかと思はしむる陰影があるのではないかと疑へば疑へる。『湯川彥右衞門聞書』も所謂聞書だから無論其のまゝを信據すべきではないが、根も葉も無い事を書いたものとは思へぬものである。宗祇を紀州人であると記したものでは、何が最も古いか今博搜するに遑無いが、宗祇程の名家を鄕里の人の人情からは相當な家柄の出としたい、又し易いところであるのに、骨疋らずの子だ賤民の出だと已むを得ず

湯本で歿した時、兼栽は白河邊の岩城に居て、哀悼の書を寄せてゐる。

然るに茲に一異說として、周麟景除の『翰林胡蘆集』中の「種玉宗祇庵主肖像贊」の文に「宗祇老布衲、身產二江東地一、名喧二天子寰一」とあるのに據つて、宗祇の生地は江州であらうと考へるものもある。『梅菴古筆傳』にも江州人としてあるし、旁々紀州で生れたといふ舊說は疑はしいといふのである。（詳しくは「國語國文の研究」第八號を看よ）是等の外になほ今少しく取とめた材料があれば格別、是だけの材料から紀州說よりも江州說が信ずべきであるといへるかどうかと思ふ。若し果して宗祇が飯尾氏で江州の產であるならば、江州は京都にも近いことであるし、飯尾氏は江州の著姓であり、且當時神聖視された古今傳授を承け、連歌道では當時既に大宗と仰視されてゐた宗祇が、產れた里もわからず、江州でそれらに就いて何も傳はつてゐぬらしいといふことは、容易に考へ得られぬことである。さういふ事があり得るものか知らぬ。一方に宗祇は氏も姓も無い賤民の出であると傳へられてゐるのに、飯尾氏といふ江州の著姓と

ら紀州に入る雄之山越の本街道筋に當つてゐる。心敬が紀州に行つたことゝ宗祇が心敬に師事したことゝは、關係をつけて考へられ易いので、此の時宗祇が心敬に親炙したのであらうと想像した者（紀伊國名所國會の如き）もある。寛正二年は宗祇の四十一歳の年に當つてゐる。此の時始めて二人が接近したのか、或は前からか明らかでないが、心敬が紀州に行つたことゝ宗祇とは、何かの關係があつたのでないかと想はれる。紀州で連歌に關する書を遺したといふことをも考へて置かねばならぬ。宗祇が心敬に師事したことゝは、其の著書で心敬の言などを祖とし述べてゐる處を見ても判る。又宗砌にも師事したやうである。或書（玉がつまに引く、此の書の傳は奇說が多くてあまり當てにはならぬ）に宗祇を叔父としてあるが、果して據所があつたのかどうか。宗祇の號は、宗砌の偏名を取つたのかも知れぬ。又『野史』や『連俳小史』が『俳家奇人談』等に據つて兼載（載とも）にも從學したと記したのは誤りで、兼載は宗祇よりも後輩で、其の著書中に宗祇を師稱してゐる。『宗祇終焉記』（群書類從）にも、宗祇が

となつたものと見ねる。宗祇がさばかりの賤民の子でありながら、どうして歌道などに入つてあれだけの名家となつたのであるか、明らかではないが、諸書に、早くからある律院（郷里の寺にや）に入つて薙髪したとあるから、多分幼時から僧侶となつて文字に親しんだのが縁となつたのであらう。さうでもなくては特殊部落出の一賤奴と見做さるべき宗祇が、歌道を成就して帝都の貴人の尊崇を受けるといふやうな事が容易にできる筈がない。其の後何時の頃か、十住心院心敬（前にいうた）の名を聽いて、京都に上つて之に師事したとある。是も何の因緣に依つたか、明らかでないが、心敬は嘗て紀州にも行つたことがあつて、其連歌道の心得を示した書の『さゝめごと』《群書類從》の跋文には、寛正二年田井莊八王子社で有志者の爲に著した旨を記してゐる。此の八王子社に就いて『紀伊續風土記』に云ふ『さゝめごとの』奥書に、「田井莊云々。當莊の內川邊村の八王子、此邊諸莊に著るき社なれば、心敬の所謂八王子は、川邊村の八王子なること明らけし」と。川邊村は今の海草郡川永村大字川邊で、京都の方か

所者にて候。宗祇には氏も無き者にて候。宗祇花之下（はなのもと）となり申候に、氏無之候へば、宗祇花之下になり申事成り不申に付、湯川の家の名を假り候て、宗祇花之下になりて候故、此時の連歌一順、發句（原註　此發句連歌師の分に知らぬは無之候）あらぬ名をかるや山彦郭公、宗祇。脇、たゞ卯の花は嶺の白雪、正春。第三は宗長仕候が其句失念仕候。此の懷紙の內、宗祇十一、宗長十一、正春九か十一か仕候。此時の懷紙紀州にては我等所に有之候を云々。

とある。本居內遠の『賤者考』に、「本國（紀州）在田郡藤並莊に、七下りと俗にいひて、賤しむる中に下津野村の小名吉備野といふあり。宗祇法師出生の地なり。こゝを吉備野の骨不足（ほねたらず）といひて、賤しとす。案ずるに、宗祇の傳に伎樂師の子飯尾氏にて、常房といふ。出身の賤しきを恥ぢて云々」とて、右の聞書の文を引いてゐる。伎樂師といふは、古へは傀儡師とか放下師とかいふものと同樣に賤民の業で、公民には齒されなかつたものである。湯川氏は有田郡の名族であつたから、其の姓を假りて花之下

ゝ答へん」の二首の古歌を辨へてさへ居れば、佛法にも世法にも迷ふまいと云うたとある。斯樣によく心得た處があつたればこそ、あれ程の地位を造り上げ得たのであらう。大體に於いて俳諧の松永貞德に似寄つた人らしい。よく西行芭蕉と並び稱せられるが、此の二人に比べると、常識的で圓滿であつたやうに思はれる。隨つて詩人としての色彩は、二人よりも多少薄い處があつたやうにも見ゆる。

宗祇は紀州有田（古くは在田）郡藤並村吉備野の人である。或る書に姓は飯尾氏とあるが、詳らかでない。又三善氏ともあるが、是等も一時の假姓であつたかも知れぬ。賤民の子であつたといふから、氏や姓は無かつたといふのが信じ易い。應永十八年に産れたことになる。父は當時の賤民で、伎樂師であつたとある。『湯川彥右衞門聞書』（史籍集覽等）に、

湯川正春は古へ隱れ無き歌道者、連歌師にて候。人にも知られたる連歌師は、正春事を知らぬ者は無ㇾ之候。又連歌の宗匠宗祇は、紀伊國橘谷（此の地名不審）と云在

連歌で宗砌心敬專順等の諸名家が並び出て、宗祇以前に連歌が既に全く正風化してゐたのとは、大なる程度の相違があつた。芭蕉は蕉風といふ正風俳諧の創始者と謂うても先づは不當ともいへぬが、宗祇は一風を創めた人ではなく、其の諸先輩の遺風を保守育成したに過ぎぬ。而も宗祇の如き大家が出て之を大成宣布しなかつたならば、連歌はなほ不十分な地位と混沌たる狀態とを持續したであらう。此の點から謂へば、宗祇の地位は俳諧に於ける芭蕉の位地とよく相應してゐる。且連歌に代つて興つた俳諧の本を開いたのも矢張宗祇であつたと見て可い地位を占めてゐるやうである。此の點に於いては芭蕉とは亦異なつた立場に在つたわけである。

　宗祇が卑しい身分の出であつたに拘はらず、斯く連歌の大宗となり得たのは、其の才識の優れた處があつた爲であらうが、一は人物が溫厚で、世渡りにも適してゐたからと思はれる。『兼載雜談』に宗祇が、有名な「海人の刈る藻に住む蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をば怨みじ」「無き名ぞと人にはいひてありぬべし、心の問はゞいか

著書中『小夜のねざめ』（群書類從）には連歌に關する記事や說話がいろ〳〵あつて大層役に立つ。中に連歌か「此頃地下にのみ翫ことになれる、いと無念なるわざ也。連歌のことば歌とたがひたらば、たゞ歌のやうに面白き句共もせられ侍れば、仔細あるまじきに、歌の毒とて一向に棄てられ侍るは、昔にはたがひたる事にこそ。詩作る人の聯句嫌ふこと未だ無し。何とて歌よみの連歌を忌み給ふやらん」と憤慨してゐる。是で見ると、當時でさへ多くの保守的な歌人には連歌は嫌はれたものと見ゐる。

二、宗祇の經歷

前期の宗砌等が既に正風連歌を成就したのであるが、是等を集めて大成し、一代の大宗となつたのみならず、連歌といへば直に其の人を聯想せしめる程に斯道に重要な地位を占めた大家は卽ち宗祇法師であつた。俳諧では芭蕉が正風を創める前は、鬼貫や來山が議論なり句作なりで舊風に累せられず、正風を目ざし、新味を試みてゐたが

月雪の色わかれ行く朝かな　　智蘊

雨に色雪に聲あるみぞれ哉　　行助

謠曲は主として時代物、狂言は主として現代物を取扱うてゐるが、狂言の中には連歌に關係のあるものが隨分多い。連歌を主題にしたのもある。例へば「盜人連歌」「連歌毘沙門」「八句連歌」などがそれで、恰も德川時代の狂歌と趣を同じうしてゐる。德川時代には狂歌が最も廣く行はれて、之を詠んで罪を宥されたとか想はぬ優遇を受けたとかの逸話が多かつたが、中世では連歌が其の役を勤めてゐた。多分民間に行はれたものは此の種の狂歌的連歌で、專門家の連歌よりも、もつと後れた通俗的なものであつたらう。『新札往來』『遊學往來』の類にも連歌の事が記されてある。

一條兼良(文明十三年薨ず、年八十、宗祇には二十歲程の先輩)の事は、人のよく知る所で、又何にでも傳が出てゐるから略しておく。『海錄』七には攝關傳を引いて年譜を掲げてある。宗砌　共に新式追加」を作つて連歌の爲に制規を遺した。其の數多い

松風やしたに秋ふく荻のこゑ　専順

露ながら折ればをられぬ小萩哉　宗砌

うら葉ふく秋風しろき木末かな　能阿

梅が枝をわきて秋なる木の葉哉　賢盛

月にこひ月に忘るゝ都かな　東にて月を見て　心敬

名もしらぬ小草花さく河邊かな　智蘊

（名も知らぬ小草花咲く垣根かな　芭蕉）

秋風をうらみぬ星のちぎりかな　行助

冬さくや一重こゝろの梅の花　専順

ちる音を時雨にかへすもみぢ哉　宗砌

香こそ梅さくれ竹の雪の窓　能阿

雨さむみしづくを木々のたる氷哉　賢盛

山や雪知らぬ鳥鳴く都かな　心敬

咲きけりと花の物言ふにほひ哉　賢盛

ちる花の音きく程の深山かな　心敬

花一木うゑぬ宮古の宿もなし　智蘊

若草に花の露そふ木かげかな　行助

花も名になのるや卯月郭公　専順

今朝かゝるあやめや軒の一夜づま　宗砌

峰高みしげるがうへの木末かな　能阿

五月雨のあめこまかなる晴間哉　賢盛

雨あをし五月の雲のむら柏　心敬

卯花の月にかたぶく離かな　智蘊

小松おひなでしこ咲ける岩ほ哉　親當

口なしの花は心のある世かな　行助

のどかなる御代にやはらぐ光かな　　道賢
　しら玉椿花ぞひさしき　　元綱
青葉にもみ山ざくらの開そへて　　勝之
　春の流れにうかぶ鴨とり　　盛長
江にあまる水はこほりやとけぬらん　　心敬
　風にかたまる浪の月かげ　　専順
露おもきわさ田の稲の穂にいでゝ　　行助
　霜おかぬより野べぞいろづく　（熊野千句）　　宗祇

○

遠近にかすむ一木のこずゑ哉　　専順
春風に行く人したふ柳かな　　宗砌
吹きつくせ花咲かぬ間の春の風　　能阿

の有名な三阿彌の一人眞能阿彌である。平賢盛（杉本伯耆守と云）と法印行助（文明元年歿す、年六十五）とに就いては詳しい事は判らぬ。

夕　何（文安二年八月）

月やあらぬにたる時なき今夜かな　宗砌
夕までふくけふの秋かぜ　堀宰
紅葉ばの枝にたまらず霜冴ねて　日晟
ちるや木末の雪の初花　生阿
霞たつ遠山本の朝まだき　専順
そらに野原の雀雲鳴く聲　直清
殘る日の行かみねぬ春の色　玄幸
舟人つくる沖つしらなみ（月千句）　盛家

何　船

前句の善惡に依つて付句も如何にでもなる　云うてゐるが、宗砌はさうではなかつた。宗祇云ふ、「付にくき句も、やうによりて中々それにひかれて上手の一興を付出すことも侍れば、必ず嫌ふべきにもあらず。宗砌などは更々歌（前の誤か）の善惡を不レ申候ひしと覺え候。前を嫌ふは、只不レ叶方よりの事にや」（吾妻問答）と。而して宗砌が拙ない聞えぬ前句にも、それ相應の句を付けた例など擧げてゐる。『兼載雜談』に「心敬は若きより老後まで風情を變へざりしとなり」とあるなどから察しても、心敬が律義を旨として、宗砌のごとき臨機應變の活用を多少缺いてゐたらしく思はれる。但し流石に連歌の才は中々優れてゐたと見え「くやしや心あぢきなの身や」に「一夜寢し人にあさくも我とけて」の名句を付けた時は、執筆が前句の筆を置かぬ内に出來たとある（《兼載雜談》）又發句では「散る花の音聽く程の深山哉」は絶唱として傳へられた名句である。宗砌の才と心敬の識とは當代の双絶であつたに疑ひ無い。

智蘊は例の一休の法友蜷川新左衛門親當（文安四年歿）で、能阿は將軍義政の同朋

人の著書である。とにかく連歌では餘程新鋭な意見を有つた人であつた。

當時の名家には猶ほ十住心院心敬（文明七年歿す、年七十）《梅菴古筆傳》（壚尻には年七十九）を始め、多くの名家があつた。此の人には『さゝめごと』『老のくりごと』《以上群書類從》『ひとりごと』『心敬僧都庭訓』『馬上集』《以上續群書類從》等があつて、斯道を弘めるには大なる功績もあり、且餘程熱心な人であつたらしい。此の人の語は既に數々引いたものから察することが出來よう。和歌の方でも了俊正徹等と共に當時の新派を代表する大家で、家集其の他が遺つてゐる。六角堂專順（文明八年歿す年六十六）《梅菴古筆傳等》も亦上の二人に次いでの名家であつた。專順には『片端』（明應四年）と題した連歌の心得書（藤井紫影先生藏）がある。

宗砌と心敬とを比べると、前者は才氣が優れてゐ後者は規律を正直に守るといふ風であつたらしい。心敬は「昔の救濟周阿良阿などの奇異の句出來しも、前句あるによれり。今時も其の頃の如くの前句あらばそれにも優りて珍らしき句をせんとなり」と

長雨哉。此等作は一二番發句なり」とある。「雪の山草木の花の家ゐかな」に「冬ゞ咲く梅にまじる呉竹」などは、後の芭蕉風の脇句でも讀むやうな感じがする。相似の句もある。此の人の遺著に、應安の新式に據つて連歌の法式を歌に作つて初心に敎へた「式目掟歌」（歌數六十許と云）といふがあつた。後之に倣ふものが數種出て、中にも紹巴の「連歌式目歌」が最も弘く行はれたといふ。「新式追加」は一條兼良と此の人とが定めたのである。宗砌の噂は連歌關係の書には數多く見ゐてゐる。

又地下の連歌の宗匠は此の人が始めてゞあつたらうともいふ（關祕錄）が、宗匠の意味が判然せぬ。地下で專門の連歌師をいふならば、救濟あたりからとして可からう。其の前の善阿なども或は宗匠のやうな者であつたかも知れぬ。宗匠の稱號は、松永貞德が慶長年間に近衞龍山公（前久）から免狀を受けて稱したものが始めてだといふことである。（本朝世事綺談等）とにかく宗祇の先輩としては、此の人が最も有力であつたことは、當時の專門家の齊しく認むる所であつた『花のまがき』（續群書類從）は此の

右の七大家の句を擧げてゐる。

宗砌は斯く傑出してゐるだけに、才氣に任せて隨分詞の上の戲謔をも弄したらしい。

歌の未來記（時流を飛離れた奇異な風の歌の類をいふ。今の未來派といふのに一寸似てゐる）のことは云々。宗砌あまりの上手にて、詞な〻自在に侍りしま〻、秀句などに惡しきも侍りけるにや。其の頃侍公の正しき意を學ばずして、秀句などの侍るを、諸人希ひて邪路に入ろたぐひ、多く侍りし程に、宗砌之を誡めて、其の次に我が句に侍る秀句の惡しきをも物語侍りしとなり。（吾妻問答）

秀句とは、頓智を働らかせた言語上の戲謔をいふので、宗砌は是も巧みであつたから、諸人が之を學んだものと見ゐる。

宗砌は又發句よりも附句の方が得意であつたらしく、『兼載雜談』に「宗砌は附句より發句は下手にて有けるとなり。梅か我花にかくる〻老木かな。水まさり梅ちる庭の

當世と申し侍るは、宗砌法師此の道の明鏡にて、上古中古をよく見あきらめて救濟周阿が風骨をうつして、中古の風情を捨てけるにや。宗砌も我が身は梵灯の門弟たりしかども、松月庵（正徹）と申しける名匠に近づき奉りて、源氏の物語をならひ、歌の道の深き旨を學びて、自づから至り深く侍るによりて、連歌をよく用捨して、古風の有心（まじめ）幽玄の姿を慕ひて、然も一句正しからぬことなどを除きて、直旨を守り侍りし也。（吾妻問答。再引）

近くは宗砌法師とて、此の道に妙なる者出で來て、能く連歌のさまを知り、言の葉の心を悟りしより、風體更に中興の時を得たり。（新選菟玖波集序）

宗砌は救濟のあはれ深い風を承けて完全なる正風連歌に迄推進めたのである。但し是は宗砌等の力で成就したと謂ふよりも、時代が既に其處に達してゐたと見るべきであつて、當時の連歌は一齊に此の風に向いてゐたのである。宗砌に次いで心敬、專順、智蘊、能阿彌、賢盛、行助等、いづれも風は略ぼ同じであつた。宗祇の『竹林抄』には

な處があつた。句々獨立して、一句で意味も趣致も、先づは完全に纒まるやうになつたのは、此の期に至つてからである。（無論是も程度の上で、蕉風の附合などに比べれば、御話にならぬわけであるが）此の事は宗祇も明言してゐる。云ふ、連歌が歌の本末の句のやうであつたのは　救濟周阿の頃迄さうであつた。救濟の「秋果てぬ今は山田のいねよ　や」は意味の完了せぬ句であるが、是に了俊が「鹿追ふ聲ぞ里に聞ゆる」は、「附方は連歌であるが、「里に」が「山田の」と一致せぬ。是等は歌の本末の體を全然脱してはゐぬ。「住みなれし昔の跡に來て見れば」の如きは全く可かぬ。と。此の時代になつてやう〳〵茲迄來たのである。物の發達に一足飛は稀で、大抵順序のあることは、是等からでも思ひやられる。

此の時代の先達と目された人は先づ宗砌（肖柏の春夢草に宗切、寺井伯耆入道とあるは同人か別人か。梅菴古筆傳に但州人享德四年死すとある。一書に康正元年歿す、高山民部入道とある）。此の人は餘程の俊才であつたらしい。宗祇法師は云ふ。

の手に成つた「新式今案」が文龜元年に出た。『群書類從』連歌部に是等のものを一所に集めて收めてあるから、それを見れば略ぼ判る。同書に明應元年の兼載の「連歌本式」といふのが出てゐるが、それが所謂本式で、兼載が校合したのを收めたのであらう。舊式目よりも新式目の方が永く後世の準則となつたことは、是も前に一言した通りである。本式の主なる異ひは、表十句一句名所名殘裏六句各面に花一月隨意、等である

第五章　成熟時代の連歌

一、正風連歌の確立

連歌は救濟あたりから既に正風の傾向が可なり著くなつてゐるが、なほ狂歌臭味を全然脱するに至らなかつた。此の期の宗砌心敬などに至つて始めて醇乎たる正風となつたのである。且連歌の各句が一句々々で意味を纏めねばならぬといふことは、既に初期の俊頼などが明言してゐるに拘らず、南北朝頃の進んだ連歌でさへ、なほ不十分

後には雲をこふらん」（同）は、多少和歌風と異うてゐるが、何と無く一首の狂歌のやうに聞ねる處がある。此の時代のものは、通じてふざけたものが多く、又まじめなものでも、斯く續けると一首の歌のやうに聞ゐるので、それが亦何と無くふざけ氣味に取れ易いのである。救濟の「馬驚きて人さわぐなり、早川の岸にさはれるわたし船」などは全く狂歌で、宗鑑の前句付でも讀むやうな氣がされる。而して二句を離すと、片方だけでは何の意味をも成してゐぬ。宗祇はなほ是を「古への連歌は秀句（滑稽なかけ詞）對句をたゞ一兩句云つゞけたる計也。中比は又一句の成ぜざる句を歌のやうに云つゞけたる也」（吾妻問答）と云うてゐる。其の通りである。

其の後の連歌の式目に就いて一言して置かう。爲相の「舊式目」の後五十餘年を經て、應安五年に二條良基と救濟との手に成つた前にも一言した「新式目」が出た。是が所謂應安の新式と呼ばれたものである。其の後約八十年を經て、一條兼良と宗砌との手に成つた「新式追加」が享德元年に出、又五十年を經て西三條實隆々牡丹花肖柏と

が、校正が意の如くならず、誤脱も少なからぬのは遺憾であつた。寫本の外に傳はらぬので一時の間に合せのつもりで、予が校合して入れたのである)

此の期の連歌は既に獨立して大なる發達を遂げたのであるが、それでも前述の如くなほ初期の特色であつた戯謔趣味を持續してゐ　。且『吾妻問答』に此の期の連歌を「句の樣も長高く、有心(まじめ)にして歌に其の心ひとしく、殊勝の事多く侍り。然はあれど、歌の繼句などのやうにいひかけて、一句に其の理無きも侍りけるにや」と評してゐる通りの幼稚さもあつた。「有心にして云々」は、正に次期の室町時代の連歌に始めてよく適るので、其の期のにはなほ不十分な處があつた。「歌の繼句などのやうに云々」とは、各句に纒まつた意味が無く、二句を續けて讀むと一首の歌のやうにひゞき易いことをいつたのである。例へば「いつも絲の露ぞ亂るゝ、蓬生の軒端爭ふ古郷に」(菟玖波集)などはやゝまじめであるが、二句を置きかへて讀むと一首の歌のやう(常の歌とは幾分か異ふが)になる。「鳥はなほこの中にこそこもれるに、花の

なほ又俳諧體では「庵の夕ぞ谷ひとつなる。松あれば風ふくろうの聲聞て、周阿」「ひだるきにつの（唾の、角か）引かるゝぞ心ねぬ、やぶれ車をかくる痩牛。救濟」「さんのまとぞいふべかりける。引目いるうぶやの内のふるだゝみ、順覺」「人の家の庭に楯のふしたるを見て、ふしたるを楯といふこそ心得ね、ふしたればこそ立てといふらめ。念佛法師」などが入れてある。又古い處では「連歌しは皆ふしものに成にけり、何木をとつて枕にはせん」などを入れてある。かく俳諧體を別に立てゝあるが、其の他の句でも幾分の狂歌味をおびたものの多いことは前にもいうた通りである。此の事は『俳諧歌論』なども言ひ及んでゐる。（宗祇の連歌論の條參看）句は悉く二句宛截り取つて入れてあるので、長連歌の體裁を見るを得ぬのは遺憾である。宗祇の新撰もさうであるが、宗祇頃のは長連歌は幾らも傳はつてゐるから見られるけれども、良基時代のは、此の集を外にしては句例はあまり傳はつてゐぬ。此の意味からしても、此の集は貴重な材料である。（數年前に此の書を「古俳書文庫」中に加へて活版に附した

『菟玖波集』は寫本で往々傳はつてゐるが、板本も多分あつたのであらうが、自分はまだ見ぬ。自分の見た寫本は誤脱が少なくなかつた。體裁は宗祇等の新撰と略ぼ同じく、たゞ順序が少しく異うてゐるだけである。春夏秋冬神祇釋敎戀雜羇旅賀雜體（俳諧聯句連歌、雜句、片句連歌）發句となつてゐる。例は既に擧げたものなどと同一であるから略して、發句を數句擧げて見よう。

枝のこる花は老木のかざしかな　善阿

月に待花に急がぬ夕かな　周阿

明日も見ん都に近き山櫻　無生

誘ても花を思はぬ嵐かな　救濟

盛なる花をば誘ふ風も無し　尊氏

散らすなと風に物言ふ花もがな　良阿

きつゝ鳴け待をな待ちそ杜鵑　夢窓

いづれ先花と花とのあだくらべ　　　良　基」

是等はいづれもまじめなものであるが、それでも本末（かみしも）を置きかへて讀み下して見ると、狂歌じみて聞ねる。「つひにはおなじ道とこそ聞け。乘る駒のあしがら近き箱根山、救濟」「親や我が子のまもりなるらん。腰にさす片名の文字を取分けて、同」「三十あまりの誓たのもし。よむ歌の文字に枯木の花も咲く、良阿」（觀世音三十三身の誓願を、和歌の三十一文字に取倣したもの「目も合はでこそ夜を明かしけれ、籠の中のつるの（原文へ）親子の鳴く聲に、周阿」など、いづれも此の類で、何處かにふざけ氣味がある「親のいたみや子に當るらん、狩人の矢前の鹿の腹ごもり、良阿」などに至つては、純然たる狂歌である。次の時代になると、特に狂體として詠んだものの外、此の種の狂態は全然無くなつてゐる。

六、菟玖波集

會の時「雨の夜も月のあたりは雲あかし」の「あかし」は「赤し」か「明し」か、どちらにしても變だとて舊風の人に難ぜられたなどある。（落書露顯）又心敬の『馬上集』に良基の邸での會に、懸賞の領地を得ん爲に周阿は豫め救濟と謀し合せ、周阿執筆の際、難句を出して、良基の附句を拒み、救濟の附句を取つたが、後に此の事が露はれ、兩人共九州に遁れて三年間謹愼したとの譚を載せてある。實否はどうかと思ふが、實とすれば、救濟も謹厚一片の人でもなかつたらしい。要するに救濟は心要に重きを置き、周阿は修辭に重きを置いたものらしい。

　　言はずともよし色に知るらん　　相阿
主や誰くちなし染のから衣　　救濟」
　　船寄せかぬる須磨のかたしほ　　成阿
小車の音かときけば雷（かみ）鳴りて　　周阿」
　　なほさめ難き夢の世の中　　忠頼

を例に擧げ、又「柴の戸ぼそをたゝく秋風」に付けた周阿の「今夜とは契らぬ人の月に來て」を「心うるはしく、前句によらざるか」(心はうるはしいが、前句によく付かぬの意か)とて、「月に人は來で」とあるべしと云うてゐる。「人は來で」とせば人は來で、秋風のみ柴の戸を敲くの意となつて、成程前句によく付くやうであるが、周阿のはそんな平凡な言方を不可とし、前句を秋風の裏に人が戸を叩く意に取つて月夜に乘じて思ひ設けぬ人が訪ねたと付けたので、却て一段進んだ處に目を着けてゐる。なほ心敬の『老のくり言』や宗祇の『吾妻問答』に、救濟の老後は世間は相率ゐて周阿の風に趨いたとある。而して二書共矢張周阿の風をあはれの後れた輕薄な風のやうに謂うてゐる。是等も要するに周阿が才氣か克つてゐた爲に、温和しい風の救濟の方に專門家の同情が集まつたが、世間では周阿の方を面白いとした爲であらうと思ふ。今から見て、救濟の方が特別にあはれ深く句品が優れ、周阿の方は世間に媚びた卑俗な風だとも見えぬやうである。救濟も多少新らしい語を用ゐなどもしたと見え、大休寺殿の

る連歌、心によしと思ひしめて、てにをはには働はてをよしと申侍りしなり。

とある。修辭の巧は周阿が優れてゐたのである。同書に良基の語として、侍公は道にあひ、周阿は人にあふ。愚老(良基)はたゞ面白に任せてあふと仰ありき」とあるも、周阿が世間向である處を抑へたのである。心敬が『ひとり言』にも、周阿は救濟に及ばず、周阿は氣が利いて取合せなど手だり上手であるが、深い味の句か無く、之に反して救濟は哀深い句が多いとて、

海士人の濱田かりしほみちぬるに　　周阿
腰にさすかたなひきなる花すゝき

雲あれば出る山にも月入て　　救濟
ふる郷に跡をつぎ木の花咲いて
腰にさすかたなの文字を取分けて
いつ出て雲間の月になりぬらん

の付所をも、一も捨てずあしらひ、偖而も其の一句の言のかざりを面白く仕り候間、詞きゝの最上手と覺えしかども、心〻餘情をば願はしく存じけるなるべし。

とある。周阿が、自分の敵手で而も其の名が動もすれば我を壓しようとする救濟に對し、毫も私心を挾むこと無く、生きた內に一句でも救濟に似たものを作り度いといふなど、何等の好漢ぞや。此の人は才氣餘りあつた爲に、人から嫌はれ過ぎたやうに思はれる。『梵灯庵主返答書』上に

> 侍公（救濟）はいづれの體をも捨てざりけれども、たゞ思ひ入りて、如何程もしをれたる所に心をかけ侍りけるやらん。荒れたる宿の籬垣も、傾く軒の檜皮は忍草など茂く、春の月の朦朧たるが、御簾のひまよりほの〳〵とさし入りたるに、端近くは人の音なひも無きやうに句を作り侍りしなり。（中略）周阿は詞きゝにて、如何程もいひくだきて、一句の內に理をいひ立てぬをば、本意ならずと存じけるにや。近來攝政家（良基）の仰にも、言葉くだけて長高き句無し。或は作連歌、或はこまかな

善阿法師の門下に救濟、周阿の雙璧があつた。此の二人の事を評したものを見ると、いづれも救濟を揚げて周阿を抑へてゐる。今川了俊などは、周阿の弟子でありながら、しきりに救濟の方を褒めてゐる。又周阿も救濟にはひそかに服してゐたと見ね晩年に救濟の風慕うたとある。救濟は器識の非常に優れた人で、實に出藍の才であつたと見ねる『筑波問答』に「救濟も善阿が弟子と承りつれども、其の姿ははたとあらぬ動にてぞ侍る」と謂うてゐる。了俊の『落書露顯』に、

周阿法師逝らんとての前の年、鎭西に下りて侍りしに、語つて云、年來老僧(救濟)が連歌のかゝり、浦山敷存じて候へども、更に及び難く候。今度下向の時分、一句仕り候。是や若し老僧が句ざまに似て候や。御意如何といひし句、

古郷の松や野風になりなゝん

となり。老僧とは救濟が事なり。是を思ふに、周阿が名句いくらも侍りけめども、作者の本(本意の句の意か)は少なかりけるなるべし。彼が句ざまは　いくらの前句

尙の下に久しく候侍りて、歌の道をも知れるにや。其頃より連歌の道漸く絕ゑたるを起すと見ゑたり。彼等身まかりて後、此道くらくなり侍るとなん。今は淸き巖 淸巖)より打出でし光も消ゑ侍れば、又くらき道になり侍るとなり。(さゝめごと)

宗砌も我が身は梵灯の門弟たりしかども、招月庵(正徹)と申しける名匠に近づき奉りて、源氏の物語などを習ひ、歌の道の深き旨を學びて、自づから至り深く侍るによりて、連歌をよく用捨して、古風の有心幽玄の姿を慕ひて、然も一句正しからぬことなどを除きて、直旨を守り侍りし也。(吾妻問答)

(心敬)特に淸巖和尙に三十年は日夜の如くに侍りしかども、一の事をも耳に留めず聊かの悟りをも得侍らざりし。今は千たび悔い、足ずりをし侍る計也。(ひとりごと)

正徹が當時の歌壇の明星と仰がれた狀が思はれる。

五、救濟と周阿

したものと云』『清巖茶話』『なぐさめ草』《續群書類從》等がある。此人が時流に阿らなかつたことは、二條派の堯孝（古今傳授の東常緣の師）及び飛鳥井雅世等の與かつた『新續古今集』に一首も載せられなかつたなどでも想ひやられる。其の言に「定家の風骨を羨み、其の心づかひを學ぶべし」といひ、「至極の好き歌は、理の外なることなり」と論じ、歌の妙境は理を以て說くべからず、たゞ自然に納得すべしと諭す處、今から見れば何でも無いことであるが、當時に在つては中々傑れた見識と謂はねばならぬ。其の作に至つては、歌論以上に奇拔なものもあつた。（佐々木博士日本歌學史參看）『兼載雜談』に「招月は一生の間の歌に未來記をのがれたるは十首ともあるまじきなり」といつてゐる。こんな風であつたから、當時のやゝ進んだ考を有つた人々は、多く此の門に集まつたと見ゐる。連歌全盛期の名匠、宗砌、心敬、智蘊などいふ人々は、いづれも正徹の大なる感化を受けたのである。

永享の頃より世に知られぬるは、宗砌法師、智蘊法師などなるべし。彼等は淸巖和

的性質を十分に會得せぬからの說とも謂へるが、論旨は後の宗祇の說などと大體に於いて同じいのである。しかし「寄合は連歌の大宗なり」との考を未だ擺脫し得なかつた處は、時代は矢張爭はれぬものと見ねる。宗祇時代になれば、寄合は全然連歌から驅逐され、特別にふざけた句でもなくては、是を取らぬことになつてゐる。

四、清巖和尙の感化

有名なる清巖和尙の招月庵（松月庵とも）正徹（梅菴古筆傳等に長祿二年七十九寂すとあるが、丹鶴本草根集十四卷末に長祿三年の歌があり、此の年五月九日死去と註してある）は、了俊の門から出た人である。正徹は京都五山の僧で、嘗て東福寺の書記であつたので、徹書記と呼ばれてゐた。和歌を了俊及び冷泉爲尹に學び、當時一流の歌才と稱せられ、且當時の新派であつた冷泉家の衣鉢を傳へた爲に、其の歌風も一時に傑出してゐた。歌集『草根集』及び『徹書記物語』（群書類從、此の書は上卷だけ抜書

詠むべきに、連歌は當座の一興ばかりの事に用ふる事、然るべからずと申されけると、爲秀卿の語り給ひしを承りし。後より、一かどありぬべき心風情をば、毎度連歌には惜みて、不レ仕候て、一向寄合と緣の言ばりにて仕候を、攝家御覽じ拔きけるかと存き。(中略)是にて知りぬ、歌と連歌とのけぢめを心得わけなば、全く同道なることを。(同書)

爲相の頃などは、連歌がなほかりそめの戲れで、歌と同視されなかつたことを知り得る共に、了俊が歌も連歌も同道であると喝破した處を注意すべきである。一は時代が其處迄進んで來た爲でもあるが、一は了俊の周密なる着眼に依つて是だけ明白に說き得たものとせねばならぬ。當時は歌人は連歌師の歌を連歌々と嘲り、連歌師は歌人の連歌を歌連歌と笑ひ、互に排斥し合うたと了俊も云うてゐるが、了俊は之に對し、切りに歌も連歌も二致ならざるを說き、歌の心得が無くては連歌は品高くはならぬと論じてゐる。是等は、一は連歌の成立が歌の輕い可笑味の方面を代表したといふ歷史

夜は更けぬらん人音もせず

と云ふ句に、

月かすむしほひの浦のとまりぶね

如レ此の餘情の句は、毎句あるべきにはあらず。(同)

此時代の多くの宗匠中でも、獨り正風に心を入れたと謂はれた救濟をすら、「寄合離れて句ばかり仕たる少くや侍らん」と評した了俊の見識は、精到と謂はねばならぬ。了俊また連歌の眞體を論じて云ふ。

愚老も連歌の事は、周阿を信じて學びしかば、寄合も一句のかざりも如レ形學び得て侍る〆存せしを、攝政殿より蒙レ仰しに付て、歌に仕るべき心風情を宛ら連歌に仕りし。後攝家の仰に、早おのれが連歌は至りたるぞと承りき。(中略)昔關東にて、藤谷黄門爲相卿(舊式目を定めた人)の連歌の會の時、子息兵衛督爲成の連歌に、面白き句のありけるを、後に父卿の大に誡め給ひて、かゝる事をば歌にこそ祕藏して

記に載せられて侍りし句どもに、

山里の月いづるまで花を見て

山里の嵐ふきやむ雨の夜に

秋寒きかた山水に鵜のおもて

かやうに面白き句は、作者も本意と存けるなるべし。昔善阿といひける連歌の上手の弟子にて、救濟、順覺、信眼、十佛、上手なりしかども、寄合を離れて面白さまの少かりける故に、救濟一人を攝政の御師と定めけるとかや。(落書露顯)

茲に「寄合」とは、詞の縁で句と句とを繋ぐことをいふので、「物付」「詞付」は、此の寄合で出來てゐるのである。卽ち句の内容又意味全體とは直接の關係の無い付方をいふのである。了俊又云ふ。

救濟が句にも、寄合離れて句ばかり仕たる、少くや侍らんなれども、作者が本意の句とは存ける句、

も多くの面目を施したことなど記してゐる。(辨要抄、落書露顕等)

了俊の連歌に關する議論も、是等と同じく、着眼の中々高い處があつて、當時として は實に立派なものであつた。

連歌事、攝政家(良基)よりたび〳〵御敎の如くは　寄合は連歌の大宗なり。但寄合離れて好き句は多かるべし。それはたゝ(ねカ)ずあるべき事難ければ、地連歌を大宗にして、自づから心もまはり、風情も珍らしきこと思ひ得たるを、句だち詞の一もいたづらならず、みがき立てゝ可﹂仕云々。(中略)賴之朝臣家にての一座に

横川に近きを野　の　山　ざ　と

といふ句に、

杉の木を炭に燒きける煙たち

といふ句を、安盛入道が仕たりし。如何にぞや、比興(未熟などの意)に聞ねし也是も一句寄合許りをしたる故に惡きなるべし。此の作者が句とて攝政殿(良基)の御

了俊は文武兩道に關する著書が甚だ多い。有名な『今川狀』（一名了俊壁書）は、其の弟仲秋を訓誡したもので、武家の家訓としては最も傑出したものであること、人のよく知る通りである。『難太平記』『今川大双紙』『九州合戰記』等の武に關するもの、『落書露顯』『了俊辨要抄』『和歌所へ不審の條々』等の歌道に關するものなど、皆名高い。和歌は冷泉家の流を汲んで、割合に自由な意見を有つてゐた。『露顯』に冷泉家に就いたのは、爲秀卿の歌「情ある友こそ難き世なりけれ、ひとり雨聽く秋の夜すがら」が心に沁みたからだとある。二十歳餘の頃から爲秀の門に入つて詠歌を學んだのである。（辨要抄）了俊の歌論の時流を拔いてゐた處は、例へば源實朝の萬葉調を賞し、又頓阿（當時の舊派二條派の泰斗）や其の徒の歌が古歌の燒直しであるのを斥け、西行や俊賴の歌は新らしいのが多いと說き、「何にても其の人の得たる姿を詠み候までかと存候」と云ひ、古歌のつぎはぎなる和歌所風の歌に不服を言立てゝゐる。（辨要抄、和歌所へ不審等）其の他自分の歌を「唯心と風情計を求め詠み候」など自讃し、勅題に

及び二條良基に聽いて、早くも一家の見解を立て、宗砌宗祇に先だつて一種の正風論を唱へた。武に非凡な了俊は、また文にも非凡であつた。

了俊は今川義元と祖を同じうし、南北朝時代の名士で、文武兩道の達人として世に知られた俊傑である。父を範國といひ、足利尊氏に仕へて遠州の守講となり、屢〻官軍と戰うて武功の譽れ高く、且歌道にも通じてゐた人で、（此の事は了俊の記にもある）了俊は其の次子である。了俊は父及び祖母の勸めで、歌道に志したというてゐる。了俊は名を貞世といひ、足利義詮及び義滿に仕へ、父の志を繼いで屢〻南軍と戰うて之を惱まし、次いで鎭西の探題となり、大内義弘等と共に菊池氏と戰ひ、讒に遭うて義滿に疎んぜられ、遠州に退いたが、後赦された。晩年は閑居自適、書を著して自ら慰め、終に九十六歲（と或書にあるが、了俊辨要抄の奥書に應永十六年八十四とあるから數へると、卒年應永二十七年は九十五歲に當る）の高齡を保つて、應永二十七年八月に卒した。

跡を隱すこと二十年の後、六十餘歳で都に歸つたが、才藻衰へ、心泉涸れて前句なども直ぐ忘れるといふ風であつた。とある。『了俊辨要抄』に「今ほど朝山梵灯連歌をば或は下りたり、或は下手なりなどと申すとかや。諸道は上手こそ品をば知るべきに、今ほど梵灯に優る人誰ありて如レ此沙汰あるぞや。是にて知りぬ、天下の下手なることを」と辯護してゐるのは、多分梵灯の晩年に就いてであらう。梵灯の逸話として、ある時鎌倉に居た頃、信夫といふ關東の上手が、「雨にだに露無き松の嵐哉」と發句した處へ梵灯が來た。乃で此の句を隱して梵灯に發句を望む、「雨降りて露無き松の嵐哉」とした。信夫も大に感じて退屈（辟易、閉口）したとの譚もある。（落書露顯）又「人を送りて歸る鳥邊野」に「身はいつの煙の爲に殘るらん」の付句は、名句としてく口碑に傳へられたといふ。（壒尻）ともかくも此の時代の名匠であつたことは疑ひい。

今川了俊（應永二十七年卒す、年九十六）は正徹の和歌の師であつたが、連歌は周阿

が如く、氣を天地の間に散らして、必ず求むる所無けれども、前句を便りにして取向ふに、出來せずといふこと莫し」と論ずる所、當時の歌人の口などからは容易に聽くを得ぬ餘程卓越した見識と謂はねばならぬ。流石に當時の先達と立てられた人だけの事はあつた。

又かはり行く秋のさびしさ
木葉ふくあらしの末のむらすゝき　梵燈
舟出して山の渡もありけるに
海はるゞゝめぐる近江路　同
又もあはずば後如何にせん
法を聽く人とは今も生れ來て　同

晩年には振はなかつたと見ね『老のくりごと』に、始めは斯道の好士として世にもてはやされたが、四十の頃から陸沈の身となり、斯道を捨てゝ筑紫の果や吾妻の奥に

歟。(梵燈庵主返答書)

是は師の良基から聽いた事ではあるが、かやうな處に着眼したのは面白い。恰も芭蕉の語と傳へられる「附方は薄月の夜に梅の何處と無く馨るが如く、竹林を隔てゝ幽かに琴聲を聞くが如く」(俳諧芭蕉談)などとよく似てゐる。幽かに風韻のかをり合ふ處に付合の興味が在るといふのである。又「四十年五十年晝夜此三昧に入るといへども、猶上手の位に至ることなし」と斯道の至難を言ひ、「此道に醉ずしては我心より出來連歌あるべからず。たとへば上戸の酒を三盃ヵ盃飲みたらんが如し。口には味もや侍らん。心は更に酒無し。數反の後、心酒に成ぬれば、一身は酒にて、本心は迯去ぬ。連歌も數反面白き心に醉侍れば、興に乘たる心もたゞ醉の中也。さればいかなる初心も分々に句を儲るといふは醉る心なるべし。まして上手は醉のうちに眞實の秀逸をば儲るなり」とて、這裏に沈溺陶醉して始めて眞實の句を得べきを說き「若し一座の中他念あれば本意の句無し。吾心を取靜て一心よくをさまりたる時、人の息を口より出す

らしい。心敬は「彼等（救濟周阿）が身まかりて後、應永の頃よりは、梵灯庵主此の道の先達なり」（さゝめ言）と云ひ、又「應永年中の比より世に聞ゐ侍る人々には、今川了俊、成阿法師、梵灯庵主（中略）などゝて、やむこと無き作者侍りし。此の内にも末の世まで殘り、一世の先達の名を得しは、梵灯庵主也」とも云うてゐる。宗祇も「梵灯庵主といひし人、周阿已後の上手にて、門弟多く侍りけるにや」（吾妻問答）と云うてゐる。此の人の著書には連歌に關する『梵灯庵主返答書』『袖下集』『鷹詞百韻』などおつて共に『續群書類從』に收めてある。此の人も正風に心がけた一人である。

連歌はいかほども餘情ありて幽玄なるが、堂上の翫と見ゐてよき也と仰ありし也。清涼殿の有明の月に、梅のかをり滿らん樣に案すべしとこそ仰ありしか。餘情の句は、照りもせず曇りもやらぬ春の月、いつくの空ともさだかならねど、夜もやうやう明がたになりて、峰の松原そこはかとなく霞み込めたるに、雨さへそぼふりたらんは、何となく物あはれに、おもかげうかべる心地すべし。是ひとつの姿なるべき

梵燈の記す所に依ると、池の木の葉の浮ぶといふ發句に「上は時雨の浪の白雲」など人口に膾炙した句である。「ゆふべ〱の寺々の鐘」「若し夢ならば又や見ざらん」「散らして見ばや花のあけぼの」「谷にふる雨よりうへに月出て」などいづれも風情の優れた名句である。發句も亦可なりに巧みであつた。

千世も見ん松のはやしの山櫻
里よりも時雨は山の紅葉哉
鳴けや今日都を庭の郭公
瀧はみな花の常葉のためし哉
瀧たかし限りも更に浪のはる

三、梵燈庵と了俊

梵燈庵（字は多く梵灯庵と用ゐてゐる）は宗砌の師匠で、救濟以後の名匠であつた

攝政家(良基)の御句はさきかさねたる花の橫雲も霞も同じ梢にて、又無く艶なるに日のさし出でたるかげ匂ひ滿ちて、こぼれおつるかと見ゆ。されども一葉も散るにはあらず。盛は今日なんめりと眺め居たるに、夜の露處々に殘れり。ぬるとも花の陰にといふ詞もいまにかなへり。花の雫は只露の殘りなるべし。かやうにそほけくとも、うき〳〵とも御案ありし。されば毎句御詞もわびしれずやさしく聞ね侍りし程に、當座承りし人も、皆耳を驚かし、如何なる初心もたゞ心うき〳〵と成るとぞ申侍りし。(梵燈庵主返答書)

隨分形容澤山の賞めやうであるが、當時では是程に持て囃されたものと見ねる。附様を「袴のそばを取て堀を越ゆるやうに」と教へた(同書)など中々凝つた言方をしてゐる。芭蕉の附合の骨を敎へた語として「西瓜截るが如し。梨食ふ口つき」などが傳へられてゐるが、是等と併せて見ると面白い。是等の諸方面から察して、良基が專門家としても餘程卓れた見識を有つた作家であつたことが判る。

てゐる。
良基は連歌では立派な專門家であつたのみならず、中々凝り性で、又巧みであつたやうである。風體抄の序にも「連歌の事は、多年の數寄によりて世の人も許し侍るにや」と自任してゐる。又熱心の度も甚だしかつたと見え、
攝政殿は人の御點を申すとて、夜深く門を扣きなどするにも、やがて内より連歌を詠吟ありて、殿上人に紙燭をさゝせて御出ありしなり。祗候の人は、起きあがらぬも侍り。目をさましたる諸大夫などの少々あるは、只今何事ぞやなどつぶやきて、分明に目をみあくる人も無かりし也。それにいつの程にか御詠吟もありつらん。是に常住たゞ此の道に醉はせ給ひけるとおぼえ侍る。句は吟の内にありと仰せありし、是れ又はかり難きことなり。常に連歌はかゝり第一なり、かゝりは吟也。吟はかゝりなり。とこそ仰ありしか。（梵燈庵主返答書）
などある。又其の作は、風情が優れてゐるとて、いづれの書にも甚く推稱してゐる。

魚鳥平家、小夜寢覺等の書がある。例の頓阿と和歌の風體を問答した『愚問賢註』は有名なもので、今から見れば讀んでも得る所は少ないが、當時にあつては和歌の古調を失したことを慨した有力なもので、舊派を代表した立派な歌論であつた。晩年の著書『近來風體抄』も是と略ぼ同趣旨のものである。けれども良基の面目は寧ろ連歌にあつて、連歌中興の祖ともいふべく、連歌に關したものでは『筑波問答』が名高く、連歌史の資料として必讀の書である。連歌の式目(法式を定めた書)は、鎌倉時代に冷泉爲相(定家の孫で有名な歌人)が五十七年前に始めて定めたが、良基が是を取捨して新式目を定めた。是が所謂「應安の新式」で、是に對して前者は古式と呼ばれてゐる。此の新式は永く連歌の準則とせられ、後の式目類は悉く是に多少の取捨を加へたものに過ぎぬ。又良基が連歌道の達人で、所謂殿樣藝の藩籬を脫してゐたことは、當時の連歌師達の齊しく推服稱揚措かなかつた記事などを見ても判る。特に連歌の最初の集で勅撰に準ぜられた『菟玖波集』を編したことは、其の地位を此の上無く重からしめ

中納言より、内大臣左右大臣を歴て、關白氏長者と爲り、牛車兵杖近衞等を聽され、太政大臣從一位に進み、天授二年准三宮、弘和二年攝政に昇り、元中五年六月薨じた。年六十九。諡して後普光院殿（普光は一に福光に作る）と號した。初め後醍醐天皇に仕へたが、天皇西狩の後、光明崇光後光嚴後圓融の四朝に歴事し、北朝の名臣として始終した人である。七子あつて、長子師長が後を嗣いだ。良基は博く典籍に渉り、文に巧みに、且和歌を好み、其の奥堂を極めたと謂はれてゐる。其の家には素より舊記古書を多く藏してゐたが、良基亦諸家の秘錄を借寫して之を貯へ、世に傳はらぬ奇書珍籍を多く手許に蒐めた。又祖師輔以來累世攝政の家柄であつたので其の家記も傳はり、是は世に二條殿日次記と稱せられてゐる。されば朝廷の儀式典禮、武家の故實等は悉く此の家に就いて聽くといふ有樣であつた。室町時代では此の人と一條兼良とが博識の好一對であつた。（松屋筆記）良著の著書は甚だ多く、御禊記、百寮訓要鈔、榊葉日記、小島口號、貞治御鞠記、諒闇記、大嘗會記、雲井御法、白鷹記、山鳥之慰、

あは雪は春のしるしに消えそめて
　うすき烟は草の下もえ　　同

さくら色に空さへみつる木ずゑ哉
　花にもり來る鶯の聲　　無生法師

　花も過ぎぬや葛城の山
うちなびく柳の枝の長き日に　　道生法師

二、二條良基

二條良基（元中五年薨ず年六十九）は、救濟と共に連歌の地位を定めるに大なる力のあつた人である。公卿中連歌の保護者として功績の最も顯著な人が古來三人あつた。それは此の良基と、三條西實隆と、一條兼良とで、いづれも立派な學者であつた。姓が一二三條であるのも面白い。良基は藤原氏、關白左大臣道平の子である。從五位權

として相率ゐて正風連歌を勃興せしめた宗砌心敬智蘊などいふ名匠達は、いづれも此の正徹の薫化を受けた人々であつた。されば二條家の和歌の沈滯極まつて良基等の連歌となり、反二條派の歌風は毘沙門堂派となり、冷泉派となり、冷泉派の潑剌自由な風儀は又連歌と意氣相投じて玆に正風連歌全盛期の諸名匠を生むに至つたといふやうになつてゐる。之を平たく謂へば、當時の因襲的和歌が一向に面白くも何ともなくなつたので、少しく才氣のある新らしい思想を有つたものは、自然に自由な連歌に趨いたといふやうな工合に見ねてゐる。

當時の先輩に寂忍道生無生などの大家があつたやうであるが、是等の人々に就いての詳しいことは判らぬ。善阿といふ人は、多分是等の諸家中の特に傑出したものであつたのであらう。二條良基や救濟周阿などは此の人に學んだのである。

善　阿

おもふ程には未だうらみず

風通ふ夏野の眞葛若葉にて

風を主張した。當時では先づ新派と謂ふべき地位に在つた。爲世の門からは、和歌で有名な頓阿法師が出、頓阿の門からは連歌の恩人二條良基が出た。此の二條派は保守派であつたから、頓阿も良基も歌論歌風共に何の新味も無かつた。此の二人の問答を記した有名な『愚問賢註』も、良基『近來風體抄』も、共に陳腐平凡な意見を臚列したものに過ぎぬ。之に反して、恰も二人が北朝方であつたに對し、南朝の忠臣として知られた文貞公藤原師賢の孫花山院長親（薙髪後明魏又は耕雲と號した。有名な耕雲千首がある）などは、隨分新らしい意見を有つてゐた。又爲兼の新風は、花園上皇などにも甚く喜ばれたが、やがては宗家の保守風に壓せられて、後を繼ぐ者も無かつた。然るに冷泉家では爲相の子に爲秀があつて、其の門からは後にいふ今川了俊が出、二條家や頓阿の保守風に反對し、割合に淸新自由な歌風を唱へた。了俊は和歌でも中々優れた意見を有つてゐたが、連歌ではなほ一きは秀でた卓見を發表してゐる。是も後にいふが、正徹の淸巖和尙は、此の了俊及び冷泉爲尹に歌道を學んだ人で、宗祇の先輩

み、連歌の詞を連歌にせば、歌にも達せる人と云ふべきにや」な云うてゐる。歌人から見たら多少苦しいことであつたらうが、實は和歌と離れて俗化したことが卽ち連歌の大なる進歩で、和歌と違ふ處に存在の意義があつたのである。

爲相の兄弟は、二條京極冷泉の三家に分れて、和歌の方では劇しく競爭したのであるが、連歌の方でも、一は對抗の必要上からも互に勵みあうたことであらう。爲氏と爲相とが家の所領播州細川の莊を爭ひ、爲敎は爲相に加擔し、爲相の生母阿佛尼が訴訟の爲に鎌倉に下るやら(十六夜日記は此の時の旅行記である)で、牆に鬩いだ事實は、人のよく知る所である。爲氏の子爲世(新後撰續千載兩集の撰者)、爲敎の子毘沙門堂爲兼(玉葉集の撰者、再び流謫せられ、嘗て資朝を羨ましがらせた人)になつて、恰も當時喧ましくなつた大覺寺持明院兩派の迭立問題に關聯し、爲世は前者に、爲兼は後者に用ゐられて益〻軋轢を甚だしくした。而して爲世は嫡家として只管父祖の遺訓を墨守し、保舊に努めたが、爲兼は才氣縱横思想奔放な處であつて、新奇自由な歌

の道の達者、善阿順覺救濟信照周阿良阿など侍る也。當時も千句など〻いふこと侍れども、式目を定め、法度を正しくせられて、末代に其の旨を守るは、彼の御時よりの事なれば、此の折節をさして上古(○中古とあるべき處)とは可レ申哉。

と。右の如く立派な專門家が數多出た上に、永く後世の規準となつた新式目が出、連歌最初の撰集『菟玖波集』が出た。是等は二條良基が高貴な身分と歌道の總本家たる地位を以て獎勵したのも與かつて力あつたらうと思ふ。

又此の時代になつて連歌が和歌とだん／＼懸け隔つて來たことは、當時の歌人が連歌の俗化したことを指摘してゐる處を見ても判る『耕雲口傳』(耕雲のことは後にいふ)には「近來連歌の詞を歌になして詠む事あり。是れ歌の淺近になる基也。昔の連歌は強ちに歌に背かず。くちなしに千しほ八千しほ染めてけり、といひたれば、こはねもいはぬ花の色かな。と付けたり。かやうならば、上々の句を歌になしたりとも苦しからじ。今様の連歌を歌になしたらば更に六義の姿に叶ふべからず。歌の詞を歌に詠

もとにはねぢ寄り、あからめもせず凝視りて酒飲み、連歌して、果は大なる枝心無く折り取りぬ」（百三十七段）ともあるから、隨分地方などにも行き亘つてゐたことが察せられる。而して鎌倉時代から既に行はれた懸賞の風などがだん〳〵盛になり、同書に例の連歌する法師が取つた賭物の品々を抱へての夜更けての歸るさ、猫またに飛付かれて川にはまり込んだ譚（八十九段）が出てゐる。斯く民間に大勢力を以て廣まつたといふことが、亦多くの專門家を輩出させた原因であらう。

前時代にはまだ專門の連歌師が殆　出なかつたが此の時代になると、連歌師が出、連歌集も成り、連歌は略ぼ完全に和歌から獨立するに至つた。卽ち良基の『筑波問答』の出た時代で、同書に鎌倉以後を近來、平安朝を中古、萬葉以前を上古としてゐるが宗祇の『吾妻問答』は平安朝を上古とし此の南北朝を中古と呼んで連歌の確立期としてゐる。同書に云ふ、

此の道の再興は、故二條攝政殿（良基）好みすかせ給ひて、好士を選び給ひしに、そ

慣を維持してゐるのは、聊か矛盾で無いかとも思へるわけである）

連歌は鎌倉時代に殆どすべての事が準備された觀がある。此の後は單に此の時代に創められ試みられた處を更に進めたり改めたりしたに過ぎぬ。後に至れば内容は著く進歩したが、大體の形式や準則は先づは此の時代のものを繰返した迄と見て可い。

第四章　獨立時代の連歌

一、連歌師の輩出

此の時代になれば連歌が一般に弘まつて、流行を極めたことはいろ〳〵の物から徵し得る。夫の名高い建武元年の二條河原の落書に「事新らしき風情無く、京鎌倉をこきまぜて、一座揃はぬゑせ連歌、在々所々の歌連歌。點者にならぬ人ぞ無き」（嬉遊笑覽）とあつたなど、多少の誇張はあつたらうが此の時代の初期頃には既に都鄙共に連歌が盛に行はれてゐたことが判る『徒然草』に、片田舎の人々の花見などには「花の

後世の發句の姿になつてゐる。

當時既に發句は特別は注意を拂はれたやうで、發句は一座中でも重立つた人に讓る(八雲御抄)といふ樣なことを彼是と沙汰されてゐた。發句が一句で語を結ばねばならぬ(後の所謂切字の說)との考も此頃から既にあつた(八雲御抄)又發句に季節を取ることも當時から定まつたやうである。『吾妻問答』に阿佛尼の語として「歌は題を發句とし、連歌は發句を題目とせり。然れば其時節を違へずあるべきことなり」とある。(是れに就いて擧げた阿佛尼の發句今日は早秋の限りに云々は、井蛙抄には信實の句としてある)發句に必ず季を入れることになつたのは、連歌中の句は季を選ばぬのご其の成つた時を明かにして置く爲に、特に發句に其の役目を務めさせたことから起つたのである。之を言ひ換へると、俳句に季節を取るのは連俳の發句(卽ち初頭の句)として、其の卷の出來た時を表はす爲の要求から來たのである(それ故連俳が廢絕し、俳句が一卷の發句たるを豫想する必要も無くなつた今日、尙發句に必ず季を入れる習

誰に心のうつるとか知る

色までもうたてあだなる山櫻　　爲氏

人丸に似て歌や詠むらん

栫の下を流るゝ水に鳴く蛙　　爲相

夕暮のうはの空にぞ待たれける

山ほとゝぎす一聲も鳴け　　爲世

立ちそむる霞の袖はなほうすし

うらはかとりの春のあけぼの　　少將內侍

したの心やはなれざるらん

ゆく春のかすみの衣身になれて　　辨內侍

爲相は特に發句が巧みであつたと見え、「霞むとも雲をば出でよ春の月」や「雲消えて日影に濡るゝ落葉哉」など有名な句が傳はつてゐる。《筑波問答》後者などは、全く

思ひに勝手な式目を作つて、和歌〻同じく互に我が門戶を張るに努めたものと見える。而して其の內爲相のが最も名高く、後世迄傳はつたのであらう。此の舊式目は、永く洛東淸水寺に遺り、俗に淸水連歌とて同寺では此の式に准うて連歌を興行することが久しく絕えなかつたといふ。なほ內容に關しては、新式目の條に一言しよう。

同じ雲ゐの春ぞ戀しき　　後鳥羽院
老が身にかすめる月は隔りて
少女子が葛城山に春かけて　　家隆
霞めどもいまだ峰の白雪
笹竹の大宮人のかり衣　　定家
一よはあけぬ花の下臥
谷の小川や水まさるらん　　爲家
山深き春のみ雪は下消えて

式新式など云物出來侍り、鎌倉には爲相卿藤ヶ谷の式目とて、北林と號して出されたり。當時用ゐたる新式は、大納言爲世卿（爲氏の子、爲相の姪）作られ侍るにや」とある。此の文和は文永の誤りかも知れぬ。建治は文永と弘安との間の年號である。但し建治二年に成つたとの說には異論もある。『連歌辨義』に『十六夜日記』は建治元年鎌倉に下つてから、同四年迄のことを記してあるのに、子の爲相が鎌倉に下つたことは少しも云うてゐぬ。されば爲相の父爲家などが作つて置いたのを、阿佛尼が手を入れ、尼に因んで北林と稱したのを、建治四年に爲相が藤ヶ谷に下つてから出したのであらう。それで『筑波問答』にも弘安云々と云うたのであらう。弘安は建治の次の年號である（以上）と說いてゐるのは一應もつともである。而して爲世には新式があつたものらしい。『筑波問答』には「近くは爲世爲相爲藤卿（爲世の子）など、思ひ〳〵の式目をつくられなどして賞翫せられし事は、無下に近きことなれば、定めて御覽じも及ばせ給ひぬらん」などあり、爲藤の新式目とも物に見ゑてゐるから、つまり家々思ひ

を惡口したが、道で肥料取車を見て、父が「瘦牛に肥お車をぞかけてける」と前句を出しても、爲敎は遂に付け得ずに、父に、汝の兄（爲氏）ならば付けたであらうと言はれたとある。（水蛙眼目）爲相は所謂連歌の舊式目の撰者として、斯道の大功績者であつた。斯く和歌の家元から始め、競うて連歌をも弄んだといふことは、其の流行を助けるに大なる力のあつたは言ふ迄も無く、世間も亦之を歡んだことが想ひやられるわけである。

併し此の時代は、連歌はなほ歌人の餘戲に過ぎなかつた。『八雲御抄』には連歌はあまり深入して案ぜぬが宜しく、和歌の祕藏の詞など付けてはならぬとある。當時の歌人の連歌に對する態度は實は皆まだ此の程度であつた。此の八雲抄は順德院の御撰で中には連歌の一項を設けていろ〳〵と心得を說き、長連歌の斷片も引いてゐる。

右にいうた舊式目は、連歌の法式を記した最初のものと傳へられてゐる。而して建治二年に出されたことになつてゐる。『筑波問答』に「文和（文永にや）弘安の頃より本

二、連歌の地位

ともあれ、何というても定家は當時の歌壇の泰斗であり、且精力絶倫の人であつただけに、才力も多方面で、連歌にも深く興味を有ち、家隆等と會して詠み合うたことなどが『明月記』にも見ねてゐる。賭物の連歌の會では百中四十迄取つたとある。《小夜のねざめ》老後には日毎に連歌をしたといふ。《筑波問答》こんな事で歌人の間には連歌が漸く盛に弄ばれ　やうになり、定家の子爲家などは、晩年には和歌は面倒臭いとて連歌をのみ翫び《小夜のねざめ》其の側室の阿佛尼（十六夜日記の著者、安嘉門院四條）も、連歌には堪能であつたといひ《吾妻問答等》爲家の子爲氏、爲敎、爲相いづれも連歌を好んだ。特に爲氏は餘程得意であつたと見ね　之に關する逸話が往々傳へられてゐる。《小夜のねざめ、井蛙抄等》「爲氏云ふ、唐へ能者有りて渡さんに、我連歌にて渡るべき」にと。《兼載雜談》《小夜のねざめ》爲敎が父と同車した時、兄爲氏

などを隱して詠み込んだもののことである。當時の連歌はともかくも旣にこゝ迄來たのであるが、其の後も此の速度で進んだといふわけではないらしく、五十韻百韻の長連歌などもあまり無かつたらしい。江村專齋の『老人雜話』に宗祇の連歌の會の給仕をした成庵といふ者から聞いた話として、宗祇時代の頃迄は、百韻滿尾は稀で、大抵は二句言捨であつたとあるのは實に近いのであらう。

有心無心の座を分つての會や、賭物をかけて競技の行はれたのは、多くは水無瀨殿（當時の後鳥羽院の離宮、今の山崎驛附近）で、後鳥羽院は屢〻盛大な此の種の會を催して樂しまれたことが『增鏡』などにも見ねてゐる。院御自身も和歌では專門家を凌ぐ程の名人であつた。有心では後京極殿（良經）慈鎭和尙等、無心では光親卿宗行卿泰覺法眼などが其の代表者であつた。（『水蛙眼目』）有心無心とはいふものゝ和歌に比べると、有心でも多少の洒落味を有つてゐたことは言ふ迄も無い。

るから、連歌は此の頃から隨分長足の進歩を始めたわけである。但し、五十韻百韻は漢詩に倣うたに過ぎぬとはいへ、此の時突然に始めたものとは思はれぬ。前にもいうた『台記』『玉海』などに既に和様の長聯句が見えてゐるから、五十韻百韻などが定家卿頃から始まつたものとしても、十句や二十句續けることは可なり以前からもあつたかも知れぬ。『今鏡』八に「くさり連歌」の名も見え、「古今著聞集五にはいろは連歌』〔各句の頭字をいろはで繋いで行く連歌〕といふのも見えてゐる。定家等が百十韻百韻を試みたことは、定家の『明月記』などにも見えてゐるから、實(まこと)であるが作の今に遺つてゐるものが見當らぬので、どんな風であつたかはよく判らぬ。其の子の爲家に至つては、嵯峨で「錦かと秋のさがのの見ゆる哉」を發句に千句連ねたといふ。〔井蛙抄、ひとり言〕有心無心とは、多分『萬葉集』の無心所着から出た語で、もとは一貫した意義の無い語を歌の調子で並べたのをいうたのであるが、連歌當時にはふざけた句の意味に用ゐ、之に對してまじめなのを有心と稱した。賦物とは句中に名詞

處は少なく、曖昧な點が多い。或は名だけは高くても、生地も姓氏も生歿年月も知られぬものもある。別表に掲げるのは、略ぼ確かと認めて可い處だけを記したもので、又人物も重要な地位に在る者だけに止めて置いた。大體の系統だけは是で判るであらう。和歌との關係も大略は見當のつくやうにして見た。

連歌は鎌倉時代に入つて俄然として勃興し始めた。是は第一に後鳥羽院のやうな有力な且和歌に達せられた御方が保護奬勵された爲であらう。而して當時の和歌の明星たる定家卿や家隆卿が盛に之を試みたのが特に與つて力あつたことであらう。

『筑波問答』に、鎌倉初期迄は、連歌はたゞ二句言捨ばかりであつたが、後鳥羽院の建保頃から、白黑又色々の賦物（後にいふ）のひとり連歌（獨吟）を定家卿や家隆卿から召されたとある。而して百韻なども此の頃から始まり、懸賞の連歌の盛會なども行はれた。まじめな連歌仲間を柿本衆、ふざけた方を栗本衆とて、座を別つて會をなし、前者を有心體、後者を無心體とて、互に其の技を競うたのも此の頃である。とあ

で置かうと思ふ。此の情緒的メロデーで詩句をつないで行く行き方は、詩中でも最も高度な最も進歩した形の一であると信ずる。單に文字で景なり事なりを叙べるのならば、韻律や聲調の束縛を受ける不自由な詩の形に依るの要は無く、散文の方が自在にも委曲にも叙べられる。詩の最高目的は或る氣分なり感じなりを起さす處に在る。意義よりも情感が詩の基礎である。此の目的に最も適した詩形の一は連俳のやうな行通方のものであると予は確信してゐる。

此の外微細の點に亘つて注意して置き度いこともいろ〳〵あるが、大抵は本書をき讀すれば自然に合點の行くやうな事ゆゑ、略して置く。

第三章　勃興時代の連歌

一、連歌の流行

連歌師の經歷は詳しく判つてゐぬのが多い。宗祇の如き大宗さへも、知られてゐる

ものではない。見る物聞く物からいろ〳〵な聯想を瞬間的に、亢進的に起すもので、且それは皆我が現に經つゝある境遇に關係した事のみである。道行はつまり此の意識狀態を其のまゝ修辭的に又は詩的に寫し乃至應用したに過ぎぬ。修辭的に又は詩的に寫し乃至應用しようとするから實際とは多少異ふ處も生じて來るのは已むを得ぬ。連俳も亦自然の變易と人情の推移との狀態を摹寫したもので、其の首尾一貫した意味が無く、聯想に依つて其の境涯を寫し出さうとする處は全く同じい。異なる所は、道行は或る人のある特殊な境遇を寫さうとし、連俳は詩人に共通な普遍的境地を寫さうとする處に在る。又聯想の起し方が、道行は其の經つゝある土地から主として起すが、連俳は前句から起す處も異うてゐる。斯く異ふ處もあるに拘はらず趣味が甚だしく近いのは、前にいうた共通の處があるからである。而して兩者共、讀んで行く內に、異なつた觀念の連續中に、自づから一種の感情を起し來り、識らず知らずある雰圍氣の裏に包まれてしまふのである。私は此種の意識の進行法を假に情緒的メロデーと呼ん

ては、其等が其の音樂の中心的氣分を幇助し又は鼓舞させるやうなものである。之を縱（たて）に應用したのが日本の長唄の類である。之に興味を有ち得ずに道行類に共鳴のできる筈はない。

偖此の道行がどうして連俳と趣味を同じうするかに就いて少しく私見を述べて見よう。支那のでも西洋のでも、通常の詩は、一の題目を定め、其の題意を首尾一貫した句々連續した語で述べるのが例である。然るに道行も連俳も是と大に違ふ所がある。連俳では前後一貫した一の意味は無く、各句皆獨立して、一句が一の意味を有ち、句々の間は、詞の縁（かゝり）や聯想や趣致の共通やで聯絡して行くに過ぎぬ。又道行は、其の道中に經べき地名や、其處の名物などからの聯想を、前の語との僅かな繋り合を辿つて或は全く繋り合無し　並べて行くに過ぎぬ。而も此の道行が、他の部分と關係が薄いかといふにさうではなく、寧ろ反對に、却て全篇の興味の中心を成してゐる。是は斯う解釋が出來る。人の感情が高潮に達した時は、意識は決して理論的に秩序的に進む

ろ〳〵な聯想を利用してゐる處は、貞風や檀林風の連俳に相應してゐる。併し『曾根崎心中』や『生玉心中』は是等の「盡し」や地名にあまり累せられずに心境の推移に重きを置いて寫してゐる。是等は蕉風の連俳に相應するものと謂うて可からう。

西洋や支那の詩に頭を慣らされてゐる人は、此の道行文の類に興味を感じ得ぬといふ者が多い。又道行文でなくとも、我が邦の淨瑠璃特に長唄の類には是と同じ行き方のものが少くない。始めから終り迄首尾一貫した一の事柄なり心境の推移なりを寫さずに、一の句なり語なりから「繫り」又は聯想によつて出て來る事を、前後も順序も無しに並べるのがそれである。併し是は實に日本の長詩の一特色である。他國に類例の無いといふことは、價値が無いといふことゝ、同意味にはならぬ。いろ〳〵樣々な聯絡の曖昧な語を無秩序に並べたやうであり乍らも、之を通じたある中心感情があつてある語は直接にある語は間接に、其の感情に共鳴しつゝ其れを高め深め行くのである。恰も音樂に、いろ〳〵調和音や不調和音や噪音雜音などが加はり乍ら、全體として

徳川時代に入つてから、淨瑠璃が謠曲に代つて、もつと的實にいへば、歌舞伎が能に代つて行はれたが、それは恰も俳諧が連歌に代つたのと同じい意味であつた。而して道行も亦だん／＼進歩して遂に近松の世話物程度に迄達した。それが矢張俳諧での芭蕉の連句とよく相應してゐたのであつた。此の前後の歌舞伎淨瑠璃には、道行が付物であつた。而して道行の無いのは、讀んでも淨瑠璃らしい氣分が起らぬ迄に重要な位置を占めてゐた。其内近松の心中物の道行は特に技巧の極に達してゐるが、中には技巧を弄し過ぎたと思はれるものもある。例へば「暦盡し」（戀八卦）だの「青物盡し」（宵庚申）だの、「呉服物盡し」染物盡し」（刃は氷の朔日）などがそれで、恰も連俳の賦物（ふしもの）同一對のものである。賦物は芭蕉以前の俳諧でも往々試みる者もあつた。地名を並べるのは、道行の常體で、街道筋の名を取り入れたもの（博多小女郎）（冥途の飛脚）町名を取り入れたもの（卯月の潤色）（今宮心中）などいろ／＼あつて、「橋盡し」（天の網島）や「二十二社廻り」（卯月の紅葉）の類も此の中に入れて可い。地名からのい

河原表を過ぎ行けば、急ぐ心の程も無く、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏拜む。觀音も同座あり。闡提救世の方便あらたに、たらちねを護り給へや。實にや護りの末すぐに、頼む命はしら玉の、愛宕（おたぎ）の寺も打過ぎぬ。六堂の辻 かや。實に恐ろしや此道は、冥途に通ふなるものを、心ぼそ鳥部山、煙の末もうち霞む、聲もりよ（呂、旅）雁の横はる、北斗の星の曇り無き、御法の花も開くなる、經書堂は是かとよ。其たらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、春のひ（日）ま（隙）行く駒の道。早程も無く是ぞ此の、車宿り、馬留め。茲より花車、おりゐの衣はりま潟、飾磨のかち（褐 徒步）路き（着）よ水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。（熊野、元清作）

茲迄來ると、地名は却て主觀的感懷を起す爲に巧く利用されてゐる形で、單純に地名からの聯想を臚列したものよりも餘程進んでゐる。後の淨瑠璃の道行は是を一層複雜に巧妙にしたものに過ぎぬ。

の道行とは多少異ふ所もあるが、道中の地名を列べた所は似てゐる。是が鎌倉時代の宴曲になると、後世の道行の體を成したものも少なからず入つてゐる。中にも「海道」などは、後の謠曲中のものと酷似して、正に其の前驅をなしてゐる。

關の藤河浪越ゑて、水の柵行きやらで、誰かは心を留めん。不破の關屋の板廂、眞屋の餘に間荒なれば、時雨も月もたまらず。駒並べて渡る井せきの杭瀬川。雨にさはれば笠縫の、里にやしばし休らはん。己々(おのおの)契や結ぶの森、美ましくも立て置きて枝さし通す二本、水の流れて川島の、若墨俣や替るらん。

前の梁塵のは單に地名を並べたに過ぎぬが、是れは地名の聯想から多少の主觀的情味を添へてある。後のは此の程度の進んだものに過ぎぬ。

道行は、連歌の最も發達した室町時代に最も盛に行はれた謠曲の一要素として大なる進歩を遂げた。併し其の程度は矢張り連歌と相應した位の邊に在つたことは言ふ迄も無い。

だけは斷言して可からうと思ふ。右に引いたものに次いでは、道行は左に引くものなどが最も古いものであらうといふが、予は未だ特に是等に就いて深く調べて見たことも無いから、姑く是に依つて置く。

いづれか清水へ參る道、京□たりに五條迄石橋よ、東の橋詰四棟六波羅堂、愛宕（おたぎ）寺大ぼ　け深井とか、それを打過ぎてやさかでら（八坂寺）一段登りて見下せば、主典大夫が仁王堂、塔の本天降りすへやしろ、南を打見れば、てうすたなてうつとか、お前に參りて恭敬禮拜して見下せば、此瀧はやうかる瀧の與がる瀧の水。

（明治書院本梁塵秘抄）

本書には此の外「いづれか法輪へ參る道云々」「いづれか桂川へ參る道云々」「根本中堂へ參る道云々」などがあつて、皆右の「清水へ」に似たものであるが「清水へ」だけは特に最も長い。此の書が後白河法皇御選のものでないとしても、其の頃のものに相違あるまいから、鎌倉期の少しく前で、無論連歌が行はれてからのものである。後世

した書もあるが、是にぴつたり適るものは殆ど無かつたやうである。こんな木に竹を繼いだやうな不自然なものが、永く行はれる筈は無く、試みたものも少數で、德川時代迄續いたのが寧ろ不思議な位のものである。

三、連歌と道行文

我が邦の謠物や淨瑠璃の類のあるものに道行といふ他邦には恐らくは類例の無いものが附屬してゐたことは、人のよく知る所である。『仁德天皇記』の「つぎねふや山代川を宮のぼり云々」等に道行の萠芽が求められるとするのは如何かと思ふが『萬葉集』中の長歌には既に萠芽と認むべきものがあり、『忠峰集』の「逢坂山を越ね出し、しげき思ひを山しろの云々」などは明らかに道行文の形になつてゐる。但し盛に行はれたのは鎌倉時代頃かららしい。是と連歌との關係をどの程度迄深入して考へるべきかは、容易な問題ではないが、兩者が殆ど同一の趣味から生れ出で、發展したものであることと

是が眞物であれば、漢和の流行は此の頃が初めてであつたらうが、後のものは大抵押韻してゐるのに、是は押して無いし、旁〻確かなものとは謂へぬ。但しそれから十數年後に成つた『菟玖波集』には曆應よりも以前の漢和も收めてある（但し一對二句宛だけ）から、盛に行はれたのは先づ大凡は南北朝の足利の初世からと見て可からう。前述の策彥は、足利末期の聯句の大家で、同時代の連歌師紹巴と漢和をも盛に試み、遺つてゐるものも少なくない、弘治二年の漢和の板本（題簽を失ふ）など、策彥紹巴等の百韻十卷を收めてある。二人の漢和では難ㇾ奈讀殘書に「秋風に飛行く螢吹消ゐて」沙濕履無ㇾ聲に「忍ぶ夜の雨はなか〳〵便りにて」など面白いと評されてゐる。（世事百談）俳諧時代になつては、常の聯句よりも漢和の方が多少行はれたらしく、芭蕉なども俳友素堂と之を試みてゐる。併し謂はゞ俳諧の餘戲に過ぎなかつた。韻法など、或は和句をも脚韻にしたり、或は和句の句尾の語に漢字の韻字の和訓を用ゐたり、漢句も無韻每句韻隔句韻などいろ〳〵試みたやうで、所謂「漢和式」とて、其の法式を記

項の引用文は原本を見るを得ず古事類苑から引用した處もある）天龍寺策彥の『城西聯句』の支那人の序に、聯句は無準・無學、高峰、夢窓、默翁、大岳、竺雲、心翁、策彥と傳はつた由を記して、歸化僧が創めたものゝやうにしてあるが、此の種の聯句はどうしても連歌を眞似たものとしか思へぬ。聯句の作法を說いた手引書も往々あつて、自分も二三の小册子を所持してゐる。

又和漢聯句（發句が和ならば和漢、漢ならば漢和）とて、聯句と連歌とを交互に付け合うたものも、足利時代頃から盛に行はれたが、是も大抵對句の洒落である。古い處では『枕草紙』の例の蘭省花時錦帳下に「草の庵を誰か訪ねん」と付けたなどは、形は漢和であるが、實際に行はれたのは、南北朝頃からであらう。『漢和之濫觴』（本名石鼎集か）と題する寫本（一本に曆應八年、一本に明應八年の板本より寫すとあるが、曆應は四年しか無く、又明應は夢窓等の時代から百數十年の後であるから、孰れにしても此の紀年は訝かしい）に、夢窓の發句で竺山無極乾峰鑑翁等の漢和が出てゐる。

を好んで爲つたこ『古事談』『本朝無題詩』などに見ゑてゐる。此の頃の句も朝器非ニ朝器ニ、茂才是茂戈、又深草人爲レ器、小松僧沸レ湯、江談抄）愚息稱ニ賢息ニ、令明與ニ茂明ニ（古事談）田豆又田豆、野篁復野篁（臺記）の類すべて對句の滑稽問答になつてゐる。白川隣ニ黒谷、紫野近ニ丹波ニとか、八阪五重塔、三條六角堂とか、小僧參ニ北野ニ、大佛在ニ南都ニ（以上、東見記）とかいふ類皆是で、前に擧げた「かも川を」や「桃園の」の連歌と全く同性質の所謂抽レ黄對レ白比レ月聯レ風（空華集）といふ風のものである。漢詩にも律等には對句を取るのが常規で、又元曲や詞曲の類にも對句で技巧を弄することはよくあり、對句は謂はゞ支那人の常習であつたが、我が邦の如く滑稽問答を聯句で試みるなどとは同じでなかつたこと勿論である。とにかく我が邦には支那の聯句を其のまま摹したものと、連歌的聯句とが共に行はれたが、後者の方が却て盛に行はれたのであつた。而して後者は恐らくは連歌を摹したものであらうと思はれる。是等の聯句は連歌の最初に見ゑてゐる『拾遺集』よりも皆遙に後であること言ふ迄も無い。（此の一

かゝり（狩、雁）袴をばをし（惜し、鴛鴦）と思ひて　信綱（金葉集）

桃園の桃の花こそ咲きにけれ　頼經

梅津の梅は散りやしぬらん　公資（同）

此の二首など對句風の問答になつてゐて、右の陸荀の問答と酷似し、栢梁體とは全う違うてゐる。且我が邦の聯句までが此の對句的問答になつてゐるのは、一奇とすべきである。『詩轍』三に「聯句又聯詩とも云ふ。（中略）本邦にては大津皇子、天紙風筆畫二雲鶴一、山機霜杼織二葉錦一、後人之れに續て、赤雀含レ書時不レ至、潛龍勿レ用未二安寢一（懷風藻に出てゐる。二聯共對句になつてゐる處に注意せよ）とありしを始めとすべし。而して今言ふ聯句は和製にして漢法にあらず、連歌より出たるにや。韻法限あり。多く隔句對にて起す。隔句對ならざるを獨立と云。平側詩の通り。先唱ふ者を唱句と云、繼者を對句と云、其法歐詩と異り、皆此方の造爲也。故に鳳城聯句の序にも本朝之準式有レ異二于異域一也と書けり」と說いてゐる。藤原忠通同茂明などは此の聯句

く性質の異うたものであつた。之を支那に類例を求めると、六朝頃清談と共に最も盛に行はれた機智問答の、例へば雲間陸士龍（士龍は陸雲の字）と名乗つたに對し、日下荀鳴鶴（鳴鶴は荀隱の字）と對へた（晋書、蒙求）といふやうなのとよく似てゐる。六朝頃は、詩でも所謂駢儷對比の句を多く用ゐたが、洒落味を含んでゐるものは右の問答などが最も好い例であらう。

山奥に船こぐ音の聞ゆなり
　なれる木の實やうみ（熟み、海）渡るらん　　紀貫之

あやしくも膝より上のさゆるかな
　こし（越、腰）のわたりに雪や降るらん　　藤原實方

は『菟玖波集』「俳諧部」に引いてゐるが、是等を二人で詠み合ふと、立派な滑稽問答的連歌になり、此の本末の句を入れ代へたのが後の所謂前句付である。

かも（賀茂、鴨）川をつる脛にても渡る哉　　頼綱

やうで、隨つて和歌の附屬物たる以上に太した地位を認められなかつたが、鎌倉末期から南北朝にかけて漸く其の道の專門の大家が出るやうになつて、だん〳〵獨立の地位を占め得るやうになつたのである。

二、連歌と聯句との關係

偖又連歌は漢詩の聯句から出たとの說もあるが、其の當否に就いて一言して見よう。連歌は聯句から出たものでも之を摹したものでもなく、正しく前述のやうな和歌の本末二句の問答體から創まつたものらしい。たゞ五十韻だの百韻だのと長く續けることだけは、確かに聯句を眞似たものと見ねばならぬ。漢詩の聯句卽ち柏梁體は、單に常の詩を二人以上の人が詠み續けて行くといふに過ぎぬ。所謂主賓倡答、首尾舖陳、如レ出二乎一人之手一不レ失二其序一(空華集聯句詩序)といふ風のものである。然るに最初の連歌は、二句一對の、多くは對句風の滑稽問答(例は後に出す)で、是とは全

てさするは惡しとす。例へば「夏の夜は短きものといひそめし」といひて「人は物をや思はざりけん」と末にいはせんは惡し。此歌を連歌にせん時は「夏の夜を短きものと思ふ哉」といふべき也。さてぞ適ふべき。「佐保川の云々」（前に掲げた萬葉の歌）是は萬葉集中の連歌也。よも惡からじとは思へども、心殘りて末に付けあらはせる、如何なる事にや。「白露の奥に云々」「人心うしみつ云々」（共に前に掲げた）是二つに相適へり。古今には連歌無し。（續々群書本俊秘抄）

連歌の特質を此の時代に斯くも判然と意識してゐたことは、注意して置かねばならぬ。前にもいうた如く、此の特質が後になる程著くなつて行つたのである。

偖右の諸例が悉く戯謔に過ぎぬは言ふ迄も無い。前にもいふ如く　頓智問答といふものは、其れ自體が既に滑稽味を有つたものである。是が眞面目な而もきまり文句のみ並べたあまり氣の利かぬ和歌に飽きた洒落好きの國民に歡迎されぬ筈はない。但し鎌倉中期頃迄は矢張從來の如く、歌人中の才子達が作歌の餘戲として試みたに過ぎぬ

の花の皆白髪とも見ゆるかな、賤が垣根はとしより（年寄、俊頼）にけり」なども、全く此の類の洒落である。俊頼は此く連歌を好んだので、拾遺の先例のあるのを幸ひに此の一部を金葉中にも設けたのであらう。なほ俊頼の歌論を記した『俊秘抄』（別名俊頼口傳、俊頼無名抄、歌學文庫中のものは誤脱が多く、續々群書類從中のものが可いやうである）にも連歌の事に言ひ及んである。是から定家家隆の時代迄は七八十年もあつたから、其の間にいろ〳〵試みた好事家もあつたことゝ想はれるが、詳しいことは判らぬ。定家以前では先づ此の人を以て連歌の大家とすべきであらう。此の他にも連歌を得意とした歌人の少なくなかつたことは『筑波問答』等を一讀すれば判る。

連歌の長短二句が、和歌のやうに二句連續して始めて意味が完結するものではならず、各句に意味が纏まらねばならぬとの考は、早くも俊頼が既に明言してゐる。

連歌といふは、例の歌のなから（半(なから)即ち本又は末）をいふなり。本末心に任すべし。其のなかばが内にいふべき事の心をいひ侍るなり。心殘りて末つくる人にいひ果

簍)とは見ゆれども、讀人不知」などもある。

右の金葉の選者で當時一流の歌人藤原俊頼の家集『散木棄歌集』(散木は莊子から取つた語で、此の名からして既に當時では風變りであつた)にも連歌の部を立てゝ多くの作を收めてゐる。

かゝりぎぬはいくの(幾布、幾箆)かたち(斷ち、立ち)しおばつかな
しか(然か、鹿)さぞいる(要る、射る)といふ人もなし

瓜ふねはうみ(熟み、海)すぎてこそまゐりけれ
なみにふられてみなそこに(皆其所、水底)に見ゆ

こゝのつのち(九乳)の聲遠く聞ゆなり
わが六つのね(音、根)の罪や消ゆらん

悉く此の類で、難題又は滑稽問答といふの外に殆ど何の意味も有つてゐぬ。俊頼は歌學に卓れた才人であつたから、連歌も餘程得意であつたと見ゐる。夫の有名な「卯

注連の内にきね（宜禰、杵）の音こそ聞ゆなれ　神主助成

如何なる神のつく（憑く、春く）にか有らん　行　重

つれなくたてるしか（志加、鹿）の島哉　為　助

弓張の月のいるゝ入る、射る）にも驚かで　國　忠

なほ前にも擧げた例を看よ。拾遺時代から見るとだん〳〵碎け、且巧みになつてゐる。一人の作が多く出てゐぬ處を見ると、まだ別段連歌を得意とした人など無かつたらしい。但し偶然かも知れぬが、法師の作が可なり多いのは、連歌が後には殆ど法師の占有物のやうになつたのと相應して面白く無いでもない。とかく頓智問答の類は、坊主などに適はしかつたのであらう。「奥なるをもやはし（端）ら（柱）とはいふ、成光、見渡せば內にもとゝ（外、戸）をばたてゝけり、觀暹法師」などは、宛ら近世の滑稽問答で「一羽の鷄をには鳥といふは如何。一疋の鹿をしかといふが如し」と同じである。中には隨分念の入つた「よる（夜、縒る）音すなり瀧の白絲。繰り返し晝もわく（湧く、

春はもゑ秋はこがるゝ竈山　　元輔
　霞も霧も煙とぞ見る

　くらすべしやは今迄に君　　廣幡御息所
訪ふやとぞ我も待ちつる春の日を　　帝

等すべて六首程（前に擧げたものも參看）を載せてある。併し此の集にはまだ連歌の名は出てない。『筑波問答』に「昔の人はつゞけ歌とぞ申侍りし」とあるは、連歌と稱せられる迄は斯く呼んでゐたとの意味らしいが、此の稱は他にはあまり見受けぬやうである。連歌の名は、それより百餘年後の『金葉集』（崇德天皇御宇）に始めて見ゑてゐる。同集には雜下に連歌と標題して可なりに多くを收めてある。其の中の二三を擧げて見よう。

東人の聲こそ北に聞ゆなれ　　永成法師
　陸奥國よりこし（來し、越）にやあるらん　　律師慶範

而して俳諧がだん〳〵ふざけにふざけてゐる内に、又漸く之に不滿を感ずる傾向が出で來て、遂に蕉風のやうな「俳諧」の名義とは緣の薄いものになつてしまうたので、其の發展の經路は全く連歌と同じかつたのである。

第二章　創始時代の連歌

一、勅撰集中の連歌及び俊賴

連歌の創始は　平安朝中比にあつたこと前にいうた通りである。宗祇時代には、此の期を連歌の「上古」と呼んでゐた。宗祇の『吾妻問答』は「步人の」(前に擧げた)や『拾遺集』(一條天皇御宇)中のもの(「人ごゝろうし」の如き)を例に擧げてゐる。同集には此外、

流俗の色にはあらず梅の花　　實　資
珍重すべきものとこそ見れ　　致　方

代に、之に對して狂歌の發達しなかつたのは寧ろ不思議である。『古今集』以下には俳諧歌もあるが至つて少なかつた。連歌は畢竟此の缺陷を充たす爲に產れ出たものと見るべきである。

此の滑稽趣味の連歌もだん／＼進んで歌人の片手業でなくなり、專門の連歌師が出る迄に至ると、今度はふざけるばかりでは物足らなくなり、連歌だけで凡ての要求を滿たせるやうにしようとし、まじめなものも次第に出て來るやうになるのも亦自然の成行である。斯くして專門家達が愈〻之を進めて行く內に、今度は本來の要求を漸く遠ざかる程極端にまじめな處迄押し進めてしまふのも、亦他の事にも多く見る歷史の自然の傾向である。斯くて宗砌宗祇時代の連歌となり、和歌と何の相違も無いものになつてしまうたので、別に狂體を弄ぶものが漸く殖ゑ、遂に宗鑑守武の狂連歌となりそれが俳諧の祖となつたのである。卽ちまじめな歌に對して宗鑑守武の狂體の出たのは、和歌に對して滑稽問答的連歌の出たのと、全く同じい要求に本づいたのである。

る。右に擧げた諸例が、一首として多少此の性質を帶びてゐぬはない處によく〳〵注意せよ。此の滑稽の要素がたま〳〵まじめな氣の詰る和歌にばかり沒頭してゐる窮屈さに饜きた人々に歡迎されたのが、連歌の流行を促した直接の原因であつたらしい。換言すれば、連歌は卽ち滑稽趣味の要求を充たさん爲に產れ出たといふことになるのである。

元來我が國人は滑稽洒落を愛した國民である。何處の國でも、悲劇に對して喜劇があるやうに、滑稽趣味は文學の反面を爲してはゐるが、我が國人は特に甚だしく之を好んだやうである。神典とされる『古事記』を初め、『風土記』の類でも、中古の物語、神樂歌、催馬樂から、淨瑠璃端唄の屬に至る迄、可笑味の雜らぬものは殆ど全く無い。殊に謠曲に對しては、之と匹敵して毫も價値を讓らぬ狂言が發達したなど支那と比べても餘程の違ひがある。德川時代に至つては、文化の中心であつた江戶つ兒は、洒落を生命とし、文學も亦之に伴うた。こんな風であつたから、中古の和歌の全盛時

一首の歌を二人で詠んだものと謂へるのである。今之を「白露のおくにあまたの聲すれば、男、花のいろ〳〵ありと知らなむ。女」(後撰集)の如き、一首の歌としては意味が聞ねず、本で問ひ、末で答へたものとして讀んで始めて解るのと比べたならば、多少の相違あるに氣付くであらう。但し此の相違は、連歌から見た上のことで、和歌として見る時は、兩者の間に強ひて區別を立てることは出來もせず、又必要もないのである。たゞ連歌は、和歌の本末を二人で詠みあうたのとは違ひ、本で問ひ、末で答へる問答體が本來の特質であることを合點して置けば宜しい。

それで連歌の起原を先づは平安朝の中比からボツ〳〵行はれ始めた本末問答體の和歌に置くのが最も實に近からうと思ふのである。而して、短歌は、其の調子の上から自然に本末二句に分れてゐるので、一首を二人で詠みあふといふことも亦自然にあり得べきであるが、問答體となると其の性質上機智を働らかせて巧く調子を合せる處に興味があるのであるから、其れが滑稽問答的性質を帶びて來ることも亦自然であ

まるやうになつて行つた譯である。つまり最初は單純な本末問答體の短歌から始まつたといふことが、其の特質をよく語つてゐるので、問答には問にも答にも纏まつた意味を有つことが必要なのである。而して長連歌は此の二句の一對のものが長く連なつたに過ぎぬと見て可い。此の特質は俳諧になると一層顯著になつてゐる。

よく似てはゐ乍ら、右に擧げたやうなのとは多少違うて、連歌的要素の備はつてゐぬのもある。例へば「あふひ(逢ふ日、葵)とは聞けどもよそにたち花の、君がつらさを今日こそは見れ」(蜻蛉日記)「うらやまし駒の足疾く走井の、清水にかげはよどむものかは」(同)などは二人の唱和ではあるが、底意はともかくも、表面は本末連續した一首の歌である。「わたつみの中にぞ立てるさを鹿は、或人、秋の山邊や底に見ゆらむ。檜垣女(大和物語)「さよ更けて今はねぶたくなりにける、天曆御製 夢にあふべき人やまつらむ。滋野内侍」(拾遺集)などは、可笑味のある處、二人で唱和した處は全く連歌の態ではあるが、本から末へ讀み下すと、意味が一つに連續してゐるから、

んだといふ迄で、後の連歌とは固より同じではない。それ故本居宣長翁も、平安朝中比の、

人ごゝろうしみつ今はたのまじよ　女
夢に見ゆやとねぞ過ぎにける　良岑宗貞（拾遺集）

歩人の渡れどぬれぬ緣あれば　女
またあふ阪の關は越えなむ　在原業平（伊勢物語）

等の唱和に至つて始めて後の連歌に似てゐると云うてゐる。（石上私淑言）すなはち是等の歌は、一首の歌の本末を甲乙が二人で詠んだのとは聊か趣を異にし、本末各句に各々意味の上の句主があつて、恰も甲と乙とが各々一首宛の歌を詠んだ贈答したのと同じやうな内容になつてゐる。手短かにいへば、本の句は甲の意を末の句は乙の意を別々に表はしてゐる。是れが卽ち連歌の特質によく聯つてゐる所以である。此の特質がだん〳〵顯著になつて行くに隨ひ、各句が一句宛引離しても、意味も趣致もよく纏

自分は十數年前に、嘗て片歌は國歌の最單純の形で、五七の一單節を七で結んだもの、短歌は更に是に五七の單節を加へたもの、長歌は其れを數節以上に延ばしたもので、いづれも五七調に基いて發生した形である事、後世七五調が盛になつたのは或は漢詩和讀の調子などに影響されたのかも知れぬ事、旋頭歌は片歌二首の合した形で、やゝ後に出たものである事などを論じて友人に評を乞うたことがあつたが、(何かに簡單に發表したこともあつたやうに記憶する)後に是等の說中の大部分は、古人が既に論及してゐることに氣付いた。併し多少の參考になる部分もあるやうに思ふので、茲に主旨だけを一言して置く譯である。片歌が其の名の如く歌の半分のやうに聞ゐるのは、短歌に頭を慣らされたからである。

次に『萬葉集』八に「佐保川之水塞上而殖之田乎、尼、苅草飯者獨奈流倍志。家持」の唱和が見ゐてゐて、是れは正しく連歌の祖(八雲御抄等)と謂へるやうである。但し是れも形式から見れば連歌に似てゐるが、內容からいふと單に一首の歌を二人で詠

ぬ說とがあるが、若し之を歌と見るならば 歌で唱和したといふ處だけは連歌に似てゐる譯である。併しこんな處迄持つて行く必要はない。一般には景行天皇の御宇日本武尊が甲斐の酒折宮で唱和し給うた歌「新ばり菟玖波（筑波）を過ぎて幾夜か寝つる。日本武尊。かゞなへて夜には九夜日には十日を。秉燭者（記には御火燒の老人とある）」を起原としてゐる。（釋日本紀等） 連歌を「筑波の道」など呼ぶのは、是を取つたのである。連歌の最初の選集を『菟玖波集』（紀の原文は筑波は菟玖波の假字を該て、ある）と號したり、連歌道を說いた書を『筑波問答』と名けたりしたのも是に據つたのである。但し此の唱和は、通常の短歌の五七五七七の本末二句ではなくて、片歌の五七七の形のもの二首であるから、（古事記傳、石上私淑言等にも說があるから參看）嚴しくいふと、是も連歌の祖とする譯には行かぬ。併し二句が應酬の體になつてゐる處だけは、連歌の樣に似てゐると謂へよう（元來片歌は問答風の場合に多く詠まれた）但し似てゐる處は其處だけである。

に地ならしや地固めをして呉れたやうなものであつた。連歌は宗祇に至つて既に達し得る極度迄達したので、其れ以上に進める餘地は更に無かつたのである。其の後宗祇の門流や、連歌の家元やが、暫く之を持續したが、實は永い間の歴史の惰力に過ぎぬのであつた。宗祇の頃になつてどうしても一轉せねばならぬ機運に達した爲に、やがて宗鑑守武の俳諧が出て、連歌に代つて勢力を得るやうになつたのである　俳諧が勃興するやうになつてから、連歌は殆ど亡びてしまうた。是が即ち第五第六の繼承衰廢の時代である。

五、連歌の起原

起原などいふと、何でも出來る限り古い處に持つて行きたがるのが昔からの常習であつた。連歌の起原も、諸冊二尊の「あなにやし　わをとめを」「あなにやし、わをとこを」の唱和まで溯らせる說もある。(筑波問答等)此の唱和を歌　見る說と歌と見

めて選集中に現はれた時代で、二句一對の滑稽問答又は狂歌的付合を歌人が偶〻氣まぐれに試みたに過ぎぬ。第二の勃興時代は、連歌の大に流行り出した時代で、長連歌や賦物や其の他いろ〳〵な事が試みられ、式目も立てられ、後の連歌の準備が大抵此の時代に成されたのである。併し連歌はなほ和歌の從屬物たるの觀があり、之を試みた人々も大抵歌人で、其等が餘戲として之を弄んだに過ぎぬ。但し滑稽問答よりもやゝ進んだものが試みられるやうになつた。第三の獨立時代は、專門の連歌師のだんだん出た時代で、隨つて連歌は獨立して和歌の向うを張るやうになつた。併しなほ各句が和歌の本末二句の關係の餘習を脫し切らずに、句々が全く獨立の意味を有つ迄には至らなかつた。而してなほ幾分かの狂歌臭味を殘してゐた。第四の成熟時代は、連歌が狂歌臭味駄洒落臭味を全く脫して醇平たる正風となり、又各句は句々全く獨立させて味はへるやうになつた。此の內前期は宗砌心敬等の多くの名家の叢出した時代で、後期は宗祇が是等の俳諧を繼承且集成した時代である。卽ち前期では謂はゞ宗祇の爲

勃興時代(鎌倉期)	宗鑑守武時代(戰國期)
獨立時代(南北朝)	貞德宗因時代(德川初期)
成熟時代(室町期)	蕉風興隆時代(同　盛期)
繼承時代(戰國期)	天明前後時代(同　中期)
衰廢時代(德川期)	天保前後時代(同　晩期)

右は單に大體の變遷を示す爲に並べたに過ぎず、用語等も多少妥當を缺くものもあらうが、時代の觀念を得る爲には、こんな風にして先づ頭に入れて置くと便利である。俳諧の發達は、連歌とは事情も違ひ、時代も違ふから、同じには行かぬこと無論であるが、大體に變遷の爲方がよく似てゐるから、對照の便宜上之を併せて並べて見た。蕉風以後は連歌と盛衰の模樣が大に違ふが、それでも多少似た處もあるので、對比させたに過ぎぬ。

前掲の各時代の最も著い特色を簡單に擧げて見よう。第一の創始時代は、連歌が始

つた情景であつた。而してそれは大抵歌などに言ひ古され詠み飽かれた趣致に過ぎぬが、語法や句法には多少新らしい味が加つて、其處には幾分の新らしい氣分もあつた。併し連歌の興趣の焦點は決して是等の處には無く寧ろ前にいつた自然乃至人生に對する宗敎的又は哲學的の氣分と一致した點に在る。是れを俳諧にも殆ど其のまゝ繼承したのである。それに、連歌特有の興味は、前句への附け方に在つて、二句間に觸發し醞釀される興趣を味ふのが其の本色である。俳諧の附合もさうであるのは言ふ迄もない。

四、連歌の時代別

連歌が行はれ始めてから、廢滅同樣に衰微した迄の間を、便宜上左の如く分けて見ようと思ふ。

連歌	俳諧
創始時代（平安朝）	俳諧連歌時代（室町期）

四句宛書くのが式であつた。歌仙は略式で二紙を用ゐ、初表六句名殘裏六句、初裏十二句名殘表十二句である。各頁を面といひ、相接した二紙の前の裏と、後の表とを合して見渡しと呼んだ。而して何の面の何句目あたりに月を詠み込むとか花を詠み込むとか、同季の句は何句程續けて可いとか、戀の句は必ず二句以上續けねばならぬとか同じ樣な物を同じ面に詠まぬとか。緣起の惡いやうな詞や物を初表には詠まぬとか動物と動物、植物植物といふやうな同類のものは、隣接した句では詠まぬといふ風にいろ／＼と法則を立てたのが、所謂「式目」である。式目は連歌でも時代に依つて多少宛の違ひがあり、又連歌と俳諧とでは、甚だしく違うてゐる。是等は作る上には一通り心得て置かねばならぬが、讀む上には大した必要は無く、且興味もあまり無いものであるから說明はすべて略して置く。

とにかく此のやうな奇體な詩形の歌の中に盛られた內容はどんなものかといふに、四時の風物や之に對する人事の「あはれ」な風情といふやうな、先づは殆どきまり切

次に十七文字、又十四文字と次々に並べるのをいふのであるが、始めは單に十七文字十四文字の二句に過ぎなかつた。十七文字の句を長句、十四文字の句を短句といひ、發句に次ぐ第二句を脇、それから第三第四と呼び、終りの句を揚句と呼んだ。其の句數はいろ〳〵あつたが、普通に用ゐられたのは五十句、百句の所謂五十韻百韻、及び三十六句の所謂歌仙であつた。連歌では百句のが最も多く用ゐられ、俳諧では歌仙が普通に用ゐられた。此の外世吉（四十四句）二百韻三百韻五百韻千句などもあつた。押韻もせぬのに韻は訝しいが、（此の事は筑波問答にも說いてゐる）漢詩の聯句に倣うての雅稱に過ぎぬ。斯く長く續けるやうになつてから、初めの三句即ち發句、脇（入韻とも）第三の三句は天地人に比して特に重きを置き、第四以下を平句と稱して之と區別した。是を書き記す用紙を懷紙と稱し、之を二つ折にして用ゐ、第一紙を初折、第二紙を二の折、最後のを名殘の折と稱し、各折の表面を表、裏面を裏と稱した。百韻は四紙を用ゐ、初表に八句名殘裏に八句（最舊式は初表十句、名殘裏六句）他は十

の作たるに論無く、文學としてさして高大なる價値を認めるこ〻は出來ぬ。其の價値はそれ自體よりは、寧ろ其の產み出した俳諧の母たり親たる處に在つた。極めて單純な意味での「俳味」なども連歌時代に旣に釀成されてゐたのである。俳諧の所謂「季」なども大部分此の時代に漸々に定められて來てゐる。一體德川時代には新たに生れたものは至つて少なく、多くは中世に創められ又は試みられたものを發展させ、又は完成したに過ぎぬと予は見るのであるが、連歌と俳諧との關係も亦是に過ぎなかつたのである。漢詩でいへば、盛唐の詩でも、其の時代に新たに創めたものは殆ど無く、古體近體共に古い型を完成したに過ぎぬと似てはゐるが、亦大に事情の異つた處もあるすべて創められたものが直に極致に達する例は少ないやうである。

三、連歌の形式

連歌の形式を茲に一言して置かう。連歌は十七文字の發句を始めに、次に十四文字、

諧の方は、拙著『芭蕉研究』に既に一通り說明してあるが、本書にも簡單に其の變遷の概要を話して見ようと思ふ。宗祇の事を特に詳しく述べたのは、連歌を大成した人であることと、其の地位が俳諧での芭蕉に相當してゐたことゝに深い興味を感じたからである。且其の爲人も芭蕉に似た處のあつたことは言ふ迄も無い。

抑〻連歌は平安朝中葉頃から行はれ、鎌倉時代に發達し、室町時代に最も流行を極めた國文學中の一種の變態文學である。變態といふは、先づ第一に其の形が和歌の變形したもので、謂はゞ和歌の庶子である處が變つてゐる。第二に、其の最も盛に行はれたのが、恰も和歌の（他の文學も）最衰期で、謂はゞ衰世の產物であつたことが變つてゐる。第三に、其れは大抵法師とか入道とか呼ばれた出家隱遁の圓顱の手に育てられた。是も變つてゐる。第四に其れが支那の聯句の所謂栢梁體とも違ひ、我邦獨得のもので　又恐らくは世界に類例の無い外形內容を有してゐる。是が最も變つてゐる處であらう。斯く變つたものであるが、連歌の名で呼ばれるものは、其の何の期の誰

いふ禪意などとよく相應して、益々道味を帶びた譯である。連俳を讀むには、此の心得を以てゐぬと、正しい意味を了解することは難かしからう。連歌は一小枝に過ぎなかつたに拘らず、之に從事したのが、多くは立派な人々で、且いづれも全身を打込んだのは、此の宗敎的感情に基礎を置いてゐたからである。法樂だの奉納だのといふことも、和歌にも行はれたが、連歌では特に甚だしく、且「名號百韻」の如きものも多く詠まれてゐる。

二、連歌發展の經路及び特質

連歌は俳諧の前身であること言ふ迄も無いが、其の發展の經路は略ぼ俳諧と同じであつたこと、共にもと〳〵滑稽趣味の要求から發生したものであること、又共にそれがだん〳〵進むにつれてまじめなものとなつたこと、其のまじめな頂點を代表する者は連歌では宗祇、俳諧では芭蕉であつたこと等を説明するのが本書の目的である。俳

か。即ち前述の宗教的氣分に對する心得がそれである。是れは一言で盡すことは出來ぬが、左に宗祇の言を引いて見よう。

此道にたづさはり侍らん人は、先づ冥加を可レ思。いかにも住吉玉津島を奉レ仰て、直きを擧げ、枉れるを措き、自他不二の思ひを專らとして、人の師ともなり、人の弟子ともなりて、終に上手に成り侍らんことを願ふべし。猶々歌の道は只慈悲を心にかけて、紅榮黄落を見ても生死の理を觀ずれば、心中の鬼神も和らぎて、本覺眞如の理に還るべく候。皆與二實相一不二相違背一と侍れば、何の道に心を寄せん人も、此の心に不レ可レ違候也。（吾妻問答）

是は一端を擧げたに過ぎぬが、此のやうな心得で弄んでゐたのである。此の種の說は連歌の心得書には、到る處に繰返されてある。良基も『筑波問答』に是れと似た意を反復說いてゐる。連俳では特に「前念後念をつがず」四時の風物の轉變するが如くに句々推移して行く處に最も興味を感せられたのであるが、是れが亦若能轉レ物則如來と

も極端に代表したのが連歌であつた。連歌は宗教的感情を詩に託して表現したものである。連歌の價値も茲に在つたが又大なる缺點も茲に在つた。此の長所缺點は亦やがて日本人の長所缺點であらう。

即ち和歌でも其の氣味があつたが、(廣くいへば、東洋の文學は大抵此の氣味が多少あつた)連歌は特に單純な文學としてのみ行はれたものでない。隨つて純然たる文學として取扱ふには大なる斟酌を要することは言ふ迄も無い。文學として見る場合、文學として批評するに遠慮は要らぬが、連歌の性質を會得せん爲には、是を了解してゐねばならぬ。連歌の如きは、始めからある心得を以て詠んでゐるのであるから、解釋するにも其の心得を以てすべきは當然である。俳諧も之を承け嗣いだものである以上は、是れ亦其の心得を全く無用とする譯には行かぬ。即ち前にいうた文學としての價値を論ずる場合と、適當に之を解釋する場合とは多少異はねばならぬことは、斯樣なものに對する場合に最も切實に感ぜられる譯である。然らば其の心得とは何である

究』にも反復說いてある。本書を一讀しても、辯明を須たずして判る筈である。

連歌は少しく極言すると、一の文學的雜技に過ぎなかつた。併し其の文學上の意義は、前述の如く道行文などと共に、國詩の任務のある點を指示してゐる處に在つた。それと今一つは、我が國民の特色の一たる宗敎的天性と融合した處にも意義を認めねばならぬ。我が國民の特性は、無論科學的でも、又倫理的でも哲學的でもなく、實に宗敎的であつた。こゝに宗敎的とは、何事でも信仰とか信念とかいふべき宗敎的氣分と結びつけ易い傾向をいふのである。日本人は宗敎的生活に最も適はしい天性を有ち、又宗敎家として優れた地位を占め得べき機根を有つてゐた。是れは予の持說の一である。印度人は哲學的で支那人は倫理的であつたと謂へるならば、日本人は宗敎的であつたと謂へる。異議もあらうが、予は確かにさう謂うて可いと思ふのである。支那人に詩を解するにも情に發して禮儀に止まるとか忠厚とかいはねば合點しなかつたが、日本人は歌を作るにも和歌三神や人麿樣を引出さねでは滿足しなかつた。之を最

る雄篇大作には適せぬ處があつた。何邦の詩でも押韻するのが原則（無韻詩の例外もあるが）であつたのに、我が國語は是れに適せなかつた。勢ひリズムで調を取るより爲方が無かつた。例へば七五調とか五七調とかの。加之國語が一律の單音を重ねた單調な旋律的のものであつたから、之を繰返す場合には、忽ちに倦厭を感じて來て、到底長く續けるには堪へる筈がなかつた。是れが我が邦人の氣短かな天性と抱合して、短歌となり、俳句となり、七七七五の俚謠調となつたのである。他にも原因があらうが、是等が國詩の形の短かつた主因であらう。而して國民性が縱し變化しても、國語が變化せぬ以上は、此の特質を無視することは難かしからう。

故正岡子規氏などは、連俳は變化を主とするから文學としての價値が無いとかとしいとかと主張した。卽ち連俳は句々意味が變化して、首尾一貫した意味が無いから、文學として取扱ひにくいといふのである。多分漢詩などを讀んでも例が無いので、其の頭で考へたからそんな謬見に陷つたのであらう。其の誤りなことは、拙著『芭蕉研

と、往々日本の俳句や連句が一向につまらぬといふ。而して形があまり短い、一貫した意味が無いなどいふ。外國に類が無いといふことを價値が無いと同じ意味に考へてゐる。匕首を刀で無いと考へるのは自由であるが、匕首でも突きも刺しも出來るものであることを知つて置かねばならぬ。予は日本の文明は匕首的文明、日本の文學は匕首的文學であつたと信ずる者であるが、其の事はまた別にいはう。

道行文の事は後で改めていふが、是れや連俳は、我邦の中世の文學が産んだ意義ある特色の主要部を成してゐる。其の驚くべき發達の可能性は、是等が進んだものに過ぎぬ近松の心中物の道行や、芭蕉の連俳を見ても判る。且又道行や連俳やは、此の邊で行留りになつたのであらうか。予は斷じてさうで無いと信ずる。其の裏に必ず我が邦の詩歌なり俚謠なりが今後も取るべく盡すべき任務を暗示してゐるものがあるのではないかと思うてゐる。

國語にも、又國民性といふやうなものにも適不適があつて、我が邦のは所謂堂々た

二

ら異はねばならぬ。見方を新らしくして行くことは無論必要であるが、新らしい考を其のまゝ古いものに附會することは、古いまゝに見ようとする者は、成るべく避けねばならぬ。其の避くべき傾向が、評論などにもだん〳〵侵蝕して來てゐるやうである。

一體評することと解することとは其の間に自づから多少の用意の相違が無ければならぬ。且正しく解することは正しく評することの準備であるべきに、今の人は往々之を前後せしめてゐる。此の二つは結局同じことに歸するのであるが、價値の判斷卽ち評論が先に立つと、とかくに不公平な解釋に陷り易いものである。自分等も公平を期しながら、識らず知らず此の弊に陷ることが多い。愼まねばならぬ。

右のことにも聯關して、斯ういふことも氣を注けねばならぬ。すなはち常識的な通俗的な考を土臺にして、卒かに特殊なものを律すべきではない。特殊のものは亦自づから之を取扱ふべき方法がある筈である。例へば西洋や支那のものが頭に入つてゐる

連俳史

樋口功

前篇　連歌

第一章　序說

一、連歌の本色

和歌史の方は是迄相當に研究されて、著書も彼是出てゐるが、連俳の方はまだあまり手を着けられずに捨てられてある。近頃出た文學論や連俳論の類を見ても、連歌がどうだとか宗祇がどうだとか說いたものもあるが、初期の連俳と正風連歌との區別さへついてゐぬやうなものもある。親鸞に祝福を說かせたり、日蓮に贖罪を叫ばせたりするのは、創作では許されようが、古いことを古いまゝに見ようとする態度は自づか

索引……一九五

附圖

口繪

後篇 俳諧

第五章　成熟時代の連歌

第六章　繼承及び衰廢時代の連歌

目次

前篇　連歌

第一章　序説

第二章　創始時代の連歌

捨てゝしまうたものか、二三片が見出されたのみで行方がわからぬ。それで略〻舊稿のまゝで出すことにした。こんなものでも幾らか役に立つか知らぬ。本書が若し無事に印行ができれば、それは全く小川君の御蔭である。

昭和三年三月四日

洛北今宮祠畔黄葉山房にて

著者識す

一度予の宅に立寄られた際、出版することにしようかね、など話の序にいはれたきり其の後は別に何にもいうて來ぬ。當時再三本屋からも望まれ、友人からも慫慂されたが、同氏から其の内何とか話があるかも知れぬと待つてゐた。けれども音沙汰も無く予も他事に取紛れてだん／＼忘れかゝつてゐる處へ、今度是非にと望まれた。それを機會に、俳諧の部を大急ぎで書き加へて本屋に與へた次第である。佐賀君との事を陳べたわけもかうした因緣があつたからで、上村氏の事はまたそれと聯關した處があるので一言したのである。

本書の出版上の世話や校正やには、同志社大學の小川壽一君が當つて吳れられた。予には目下いろ／＼差迫つた忙しい事があつて、迚も時間の餘裕は得られぬからである。又其の後讀書の序でに得た事などを紙片に記しては紙囊中に投げ入れておいた連歌資料も可なり蓄つてゐた筈で、それらをも書き加へようと思うて搜すけれども、本來の粗放と昨年の引越とで、大部分は丁度林檎函に一ぱいあつた反故類と一しよに燒

る處へ、だん／＼さびしさを增すばかりになつたわけである。予のやうなやくざでも時には何やらの權威な呼ばれる此節柄ゆゑ、權威の正體もあまり當てにはならぬといふ者もあるかも知れぬが五山文學研究に此の二人を亡くしたことは、まことの二大權威を失うたので、又予にとつては入門しかけた二人の良師を欬を受けぬ先に失うたことになる。

本書の連歌篇は嘗て雜誌「潮音」に連載したのを聊か補訂したものである。草稿は八九年前に成り、後多少取捨して「宗祇を中心とした連歌史談」と題し、小冊子として出すつもりで卷頭に「此書を亡友佐賀東周君の靈前に捧ぐ」と記しておいた。それを聞いた勝峰晉風君が、東京の本屋に謀つて見るから送れといふて來ので、同君に送へ。間も無く同君から太田水穗氏が自分の雜誌に連載した後に出版の世話をするといふから、同氏に任せたらどうかといふて來た。それを承諾して連載することになつたわけである。完結したのはもう彼是三四年前の事であるが、同氏は連載中に

相牽くものあるは更めて言ふを須たぬ。其の研究のやがては一權威たるべき君が遠く逝つてから、もう十年程になる。

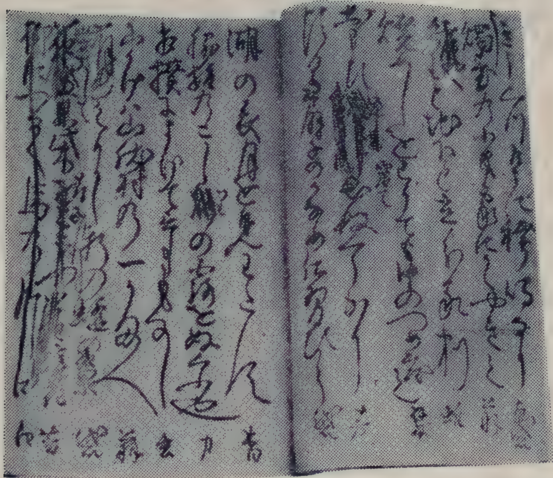
今一人想ひ出される人がある。それは上村觀光氏で、彙文堂の「冊府」に同人が勝手な熱の吹きくらをやつてゐた頃、予も圖に乘つて聯句の事を狂言記體でほざき散らすと、同氏は同主人に「あれは誰が書いたのだ」と聞き 予だと知つて「まだ會はぬが是非一度會ひたいと傳へておいて呉れ」との事であつたと、主人から話された。たゞそれつきりの事である。が、予は豫てから同氏に御近づきしておきたいと切望してゐたのでもあるから、其の內に伺はうと思ひながら、だん〳〵延び〳〵になつてゐる間に、彙文堂主人が先づ逝き ついで上村氏も亡くなられた。五山文學では既に鬱然として一權威をなして居られた上村氏を失うたことは、學界の爲に痛惜に堪へぬは言ふ迄もないが、予にとつては、そんな事よりも差當つて、親しく敎を受けたいと思うて張合にしてゐた人が二人まで居なくなつたので、たゞさへ同好が無くてさびしくて居

あつたが、其の話は今に深く予の記憶に刻みつけられて貽つてゐる。といふのは、聯句や連歌の話になると、誰でも「あんな斷片的偶感を並べたに過ぎぬものを何處がおもしろい。あれが首尾一貫したら眞の詩らしいものになつたらうに」と、殆ど十人が十人迄いふのが例であるのに、轉變する處がおもしろいと見た君の言は、予にとつては空谷の跫音と響いたからである。予は其の時、聯句の事や又廣く五山文學の事やを君を師として學び、予の連歌及び中世味の藝術の研究に資せようと思うたわけであつた。予が中世味の文學藝術に最も深い快心を感じ、且近世のものは悉く中世に栽ゐられ培はれたものの開發に過ぎぬとの私見を抱いてゐることは、既に何かに一再ならず發表した通りである。予が國文學に强い執着をもち、專攻すべき支那文學を放つたらかして俳諧などに熱中したのも、實は中世系統のものに烈しく心を惹きつけられたからである。草堂を落葉庵と號したのも所謂飛花落葉の連歌味に共鳴する所があつたからである。五山文學は中世文學の中堅である。其がたゞよはす香氣は連歌の類と互に

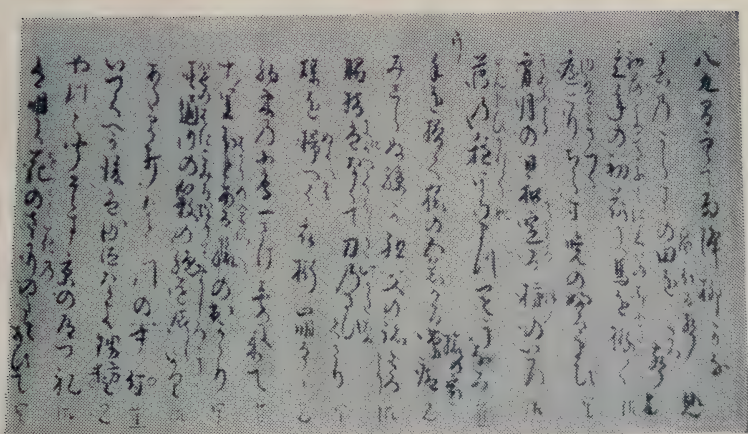
萬物の轉變するやうに轉變しつゝ一處に停滯せぬ處に在る」といふ。予は、君が聯句の書物を蒐めつゝあるといふだけでも驚喜したのであるが、尚そのおもしろいと見る點が予と符節を合せたやうに一致してゐたので、予の連俳論でも何かで讀んで故意と予に調子を合せてゐるのでないかと訝つた程に、——それ程他人の意見でもよく了解し尊重する篤厚な處があつたので——予は寧ろ奇異の思をした。しかしまた退いて思ふと、君の出身は禪僧である。禪僧がさうした詩趣に微笑を漏すのは當りまへで、何の奇も異も無い筈である。其の時は君は病苦を忍びつゝ勤めて予に應接してゐる樣子が見ゑたので、あまり深入した話もせず、養生談など二三かはしたまゝ別れて歸つた。其の後君の病勢が次第に進むやうに聞いたので、一二度君の轉地先などに見舞うたきり、遠慮して訪ねなかつた。會うても學問上の話などせず、最後に訪ねた時などはもう永く持たぬかも知れぬ容態に在つたので、特に氣支うて馬鹿話で終始した。そんな事で、聯句の話はたゞ一度それもほんの一言二言是に言ひ及んだに過ぎぬ程度で

自叙

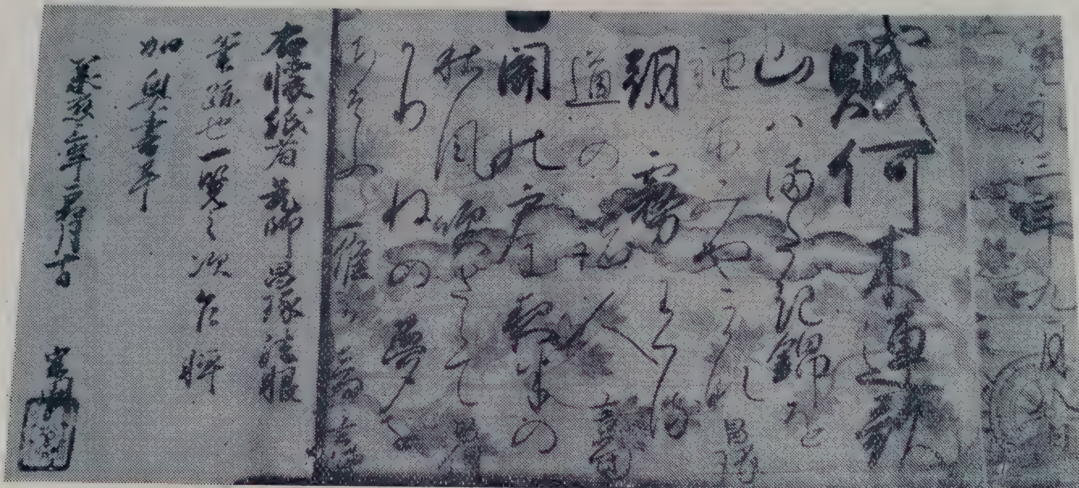
予の支那文學科の同窓の友人に文學士佐賀東周君といふ俊秀があつた。若い人には先づ稀な漢詩も漢文もやれる方で、且頭腦の穩健正確な、資質の溫厚篤實な人であつた。亡くなられる少し前まで同志社大學に支那文學を擔當して居られた。卒業後はしばらく相隔つた地に居たので、滅多に會ふこともなかつたが、人傳に君が五山文學の研究に沒頭して居られることを聞いたので、是非折々會うて話を聽きたいと思うてゐた。それは、予は丁度其の頃に連歌の事をボツ〳〵調べかけてゐたので、君に聯句の事を序でに調べて貰うたり、禪學方面の事を質ねたりしたかつたか　である。間も無く予は京都に來ることになつたので、其の頃病臥中と聞いた君を見舞かた〴〵建仁寺の塔頭に訪ねた。予が聯句の話を出すと君は「聯句といふものはなか〳〵おもしろいものだ。自分も關係書を蒐めつゝある所だ」といひ、且「聯句のおもしろ味は、天地



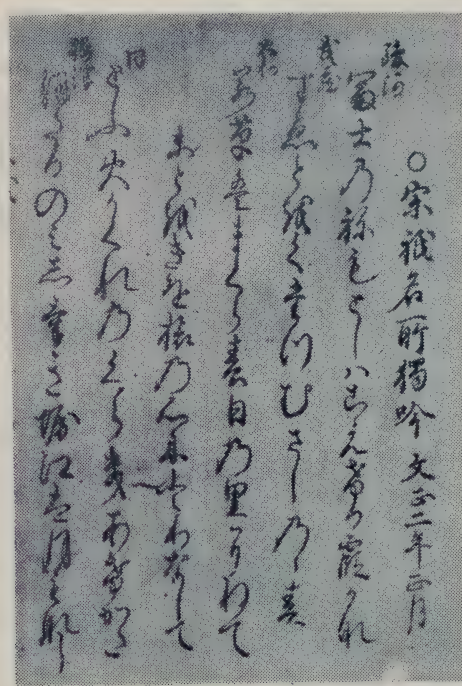
芭蕉手批　暴風の卷　（蕉門古人眞蹟所藏）



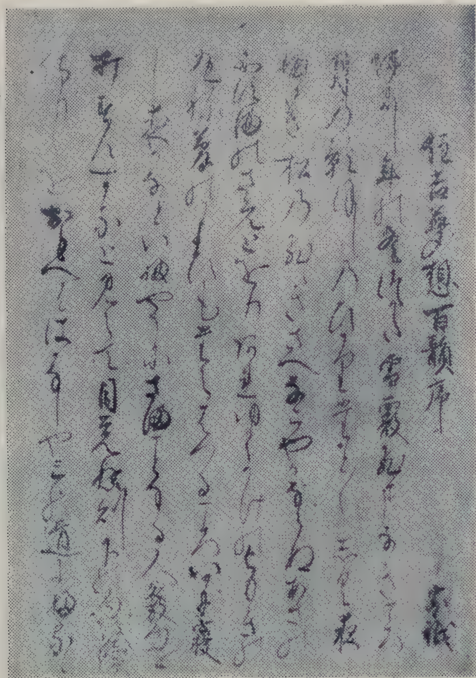
芭蕉眞蹟　八九間の卷　（八九間雨柳所藏）



里村昌琢筆　連歌百韻　（著者所藏）

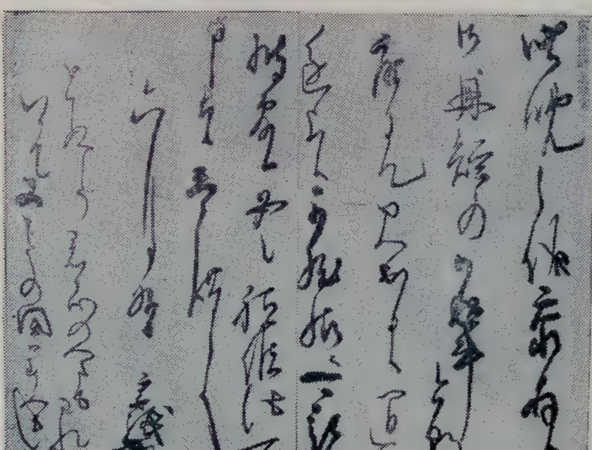


宗祇名所百韻　寛文頃板　（著者所藏）



宗祇獨吟寫本　（著者所藏）

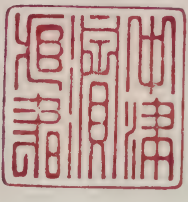




宗祇法師肖像 並ニ筆蹟 （紀伊國名所圖會所載）

樋口功著

連俳史



文明書店發行